

第2章 鎌倉市の維持及び向上すべき歴史的風致

1 鎌倉市における歴史的風致の構造

鎌倉においては、武家政権の発祥に起因する都市形成の歴史の中で、社寺や近代に建てられた和風や洋風の建築物など、様々な歴史的遺産が生まれた。その多くは幕府が置かれた鎌倉地域に点在し、層を成して重なり合う複数の歴史的風致の核となっている。

特に、鎌倉幕府の成立以降、各時代の為政者などによって盛んに建立された社寺は、現在に至るまでの時の流れとともに、「生きている歴史的遺産」として現在も宗教活動が続けており、鎌倉を代表する歴史的風致を形成している。

鎌倉幕府滅亡後の鎌倉の歴史を辿ってみると、康正元年（1455年）以降、鎌倉公方の足利氏が鎌倉支配を放棄したことなどによってまちは衰退し、かつての中世都市の活気は失われ、静かな農漁村へと変わっていった。今日行われている沿岸漁業は、この頃より続く生業の一つであり、大漁や海の安全を願う伝統行事には、社寺の存在が欠かせない。

江戸時代に入り、泰平の世が続くようになると、それまで信仰の対象であった鎌倉の社寺は、参詣を兼ねた遊山の対象としても認知されるようになる。鶴岡八幡宮参道の若宮大路は遊山客で大いに賑わいを見せ、若宮大路以外の社寺・眺望点なども名所として人気を博し、周遊観光の経路も定番化していった。明治時代に入ると、周遊観光に関わる鉄道として江ノ電が開通する。

また、明治時代から大正時代にかけて、避暑・避寒・保養の適地として知られるようになった鎌倉では、この地に別荘を構えた人々の中で生まれた価値観が知識、道徳、習慣、作法、生業、芸術といった鎌倉に住む人々の精神や営みに大きな影響を与えるようになり、まちの発展に寄与することとなる。こうして形成された文化や暮らしと、鎌倉の社寺や豊かな自然が織りなす歴史情緒あふれる風景は、多くの人々を魅了した。これらの別荘文化を支えた人々の営みは今も形を変えながら続いており、また別荘建築物が保存・活用され、鎌倉の別荘文化を今に伝えている。

戦後、都心近郊のベッドタウンとしての需要が高まると、鎌倉の象徴ともいえる鶴岡八幡宮の裏山で宅地造成の計画が持ち上がり、古都の景観を守るために立ち上がった住民等によって、後に「御谷騒動」と呼ばれる日本初のナショナルトラスト運動が展開された。古都保存法が制定されるきっかけとなったこの市民運動の精神は、現在も市民を中心とした人々の間で引き継がれており、山稜部の緑を保全する活動などが市内各所で展開されている。

このように、鎌倉の歴史的風致を構造的に整理すると、社寺の存在が鎌倉の歴史・文化の源泉として位置付けられ、全ての歴史的風致の形成に深く関わる基盤的な役割を担っているものといえる。

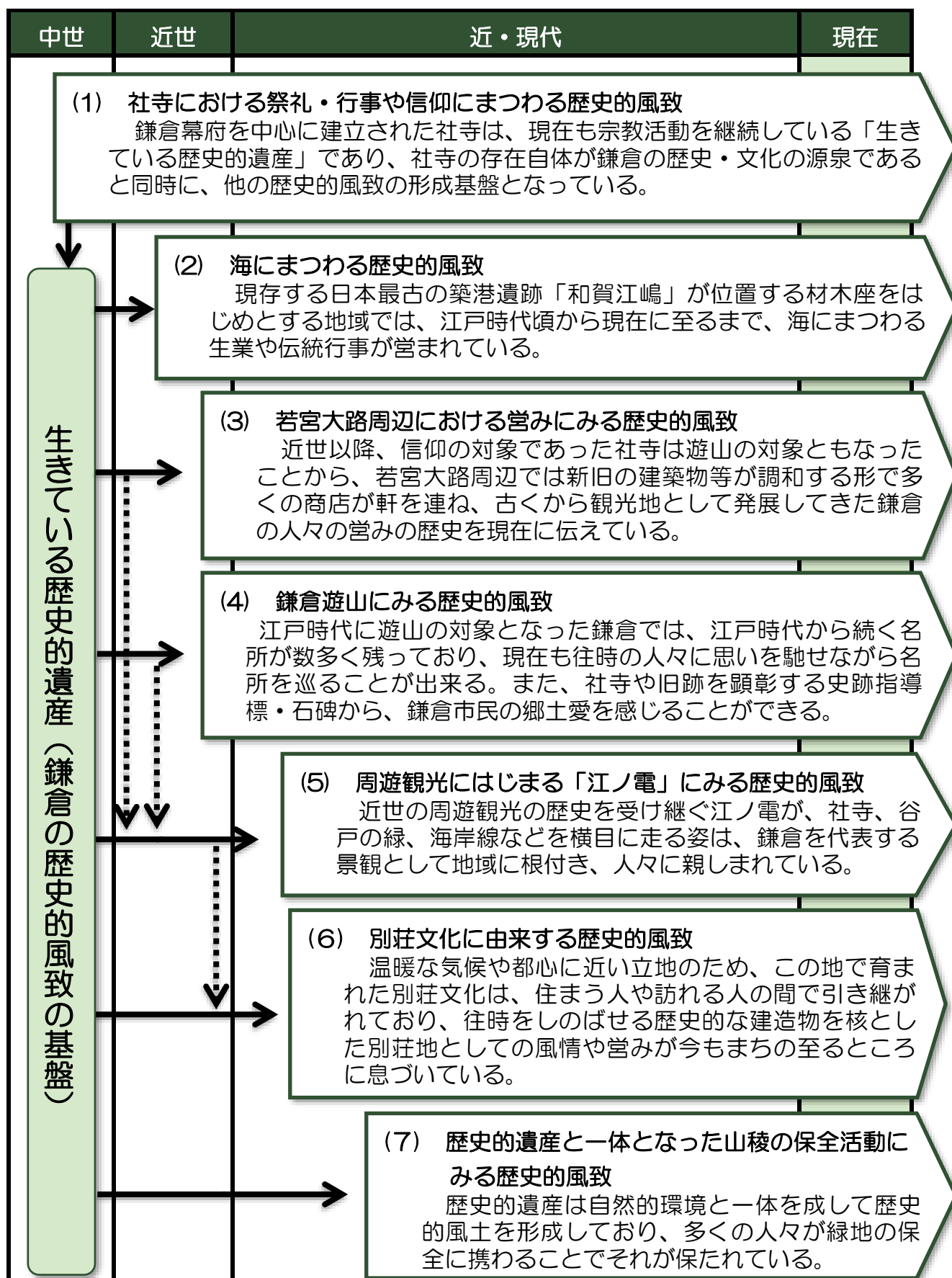


図 歴史的風致の構成

社寺における祭礼・行事や信仰にまつわる
歴史的風致



写真 鶴岡八幡宮

海にまつわる歴史的風致



写真 汐まつり 鎌倉神楽

若宮大路周辺における営みにみる
歴史的風致



写真 若宮大路

鎌倉遊山にみる歴史的風致



写真 史跡指導標の清掃活動
(NPO 法人鎌倉ガイド協会)

別荘文化に由来する歴史的風致



写真 旧華頂宮邸

周遊観光にはじまる「江ノ電」にみる
歴史的風致



写真 江ノ電

歴史的遺産と一体となった山稜の
保全活動にみる歴史的風致



写真 鎌倉風致保存会の活動

2 鎌倉市の維持及び向上すべき歴史的風致

(1) 社寺における祭礼・行事や信仰にまつわる歴史的風致

ア はじめに

鎌倉時代、幕府及びその関係者は、神仏を敬い政治理念の中核にそれを据えるという宗教政策を進めた。そしてその具現化のため数多くの社寺を造営し、社寺が武家文化の創出及び発展の主な拠点となった。

特に禅宗については、鎌倉幕府の主導によって様々な面で積極的に導入され、禅宗寺院は日本における中国文化の発信源として大いに繁栄し、その後様々な歴史の変遷の中で、日本独自の「わび・さび」と呼ばれる美意識の醸成につながっていった。また、鎌倉時代以降の歴代武家政権も、鎌倉を武家政権発祥の聖地として手厚く保護した。

イ 鎌倉と信仰の関わり

山谷に囲まれた地形の鎌倉は、昔から信仰の地として祭礼が行われていた。源頼朝が鎌倉に幕府を開いたことで、鶴岡八幡宮を中心とした都市構造が整備され、社寺は権威を示すとともに政治的象徴となった。同時に禅宗をはじめとする新仏教の寺院が多数建立され、武士や庶民の精神的な支えとしての役割を担った。

その後、鎌倉は政治の地としての役割を終え、社寺は信仰の対象であると同時に観光名所として発展した。

さらに時代の変遷を経て、信仰の役割や社寺と住民らとの関係も変化するが、社寺及び境内地は現在も鎌倉における文化を継承する場所でありながら、地域の独自性を発信する場所として、市民の憩いの空間、場所となっている。

現在、鎌倉には約 160 もの社寺があるが、それらの寺院も歴史的な背景から創建時期や宗派は様々である。

市内に点在する社寺の境内やその周辺では年間を通じて各種祭礼や伝統行事が行われ、市民や、信者や参拝者などを問わず数多くの人々が参加している。

鎌倉では商店や住宅が建ち並ぶ市街地の中、閑静な谷戸の奥などいたるところに社寺があり、社寺のある風景は境内地やその周囲の市街地で催される祭礼・行事やその他の活動を通じ、市民生活に溶け込み、息づいている。そして、時代ごとに意味を変えながら、住民や来訪者の心を捉える信仰の場として現在まで引き継がれている。

そうしたことを通じ、鎌倉の独自性、歴史的風土や古都としての雰囲気や魅力を大いに感じることができる。

ウ 建造物

鎌倉における社寺の全てをここで取り上げることはできないため、その一部について示していく。

(ア) 歴史的風致の形成を担っている建造物

a 神社

歴史的風致の形成を担っている神社の掲載順は、各神社における祭礼・行事の正月からの開催順である。

(a) 鶴岡八幡宮

鶴岡八幡宮の歴史は、源頼義が康平6年（1063年）に

石清水八幡宮を鎌倉由比郷に勧請したことはじまる。その後、鎌倉幕府を樹立した源頼朝が、鎌倉入りした治承4年（1180年）に、先祖が勧請したこの由比若宮（元八幡）を、現在の位置に移して造営した。祭神は応神天皇、比売神、神功皇后の三柱からなる八幡神で、宇佐神宮（大分県宇佐市）、石清水八幡宮（京都府八幡市）に菅崎宮（福岡県福岡市）、鶴岡八幡宮のいずれかを加えて日本三大八幡に数えられる。

境内には、上宮、摂社若宮、丸山稻荷社、白幡神社、旗上弁財天社、祖霊社及び今宮等の社殿の他、源平池などがある。境内の配置は、天正19年（1591年）成立の『修営目論見絵図』及び享保17年（1732年）成立の『鶴岡八幡宮境内絵図』などからその変遷を知ることができる。建久2年（1191年）に新たな社殿の造営を行い、現在のような上下両宮の構成となったが、天正19年成立の『鶴岡八幡宮指図』には、経蔵や御本地堂、鐘楼が、『鶴岡八幡宮境内絵図』には大塔や護摩堂が描かれており、神仏習合時代の様子を見取ることができる。



写真 鶴岡八幡宮 上空

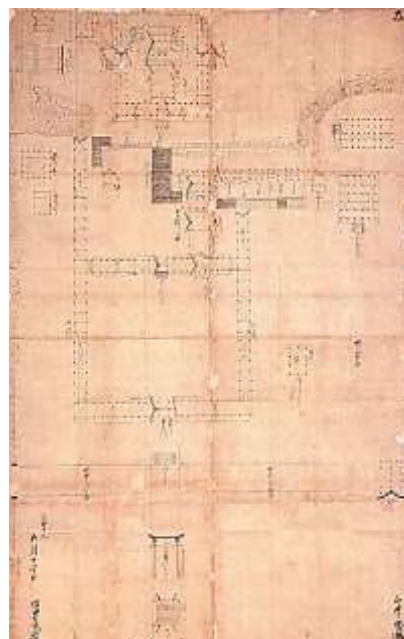


図 鶴岡八幡宮修営目論見絵図

江戸幕府の将軍家徳川氏は、自らを源氏の末裔と位置付けたため鎌倉を聖地として手厚く保護し、寛永元年（1624年）には江戸幕府第二代将軍徳川秀忠が上宮、摂社若宮ともに規模形式を一新した造替^{まつえい}えを行なったことを初めとして、その後も、再建や定期的な修造などを継続的に行なった。

その後、明治政府の神仏分離令により、仏教施設は姿を消したが、上下両宮の構成は現在に継承されている。

また、由比ヶ浜海岸から海を背にして市街地に目を向けると、正面中央の山裾に造営された鶴岡八幡宮は、幕府が所在していた鎌倉地域の中心に造営されていたことが分かる。寿永元年（1182年）に、源頼朝の妻である北条政子の安産を祈願して造られた若宮大路は、鶴岡八幡宮三の鳥居から海岸に向かって、約 1.5 km の長さで真っ直ぐに造られた参道であり、かつ幕府所在地の軸線となっていた。こうした鶴岡八幡宮及び若宮大路の「まちの中心と軸線」という位置付けは、中世以来、現在に至るまでまちづくり上の基本的構造として引き継がれている。

なお、鶴岡八幡宮境内は裏山の鶴岡二十五坊跡^{にじゅうごぼうあと}を含めて昭和 42 年（1967 年）に、若宮大路は昭和 10 年（1935 年）に史跡に指定されており、境内に建つ上宮、摂社若宮、末社丸山稻荷社本殿及び若宮大路南端付近に建つ石造の大鳥居（一の鳥居）は重要文化財に指定されている。

鶴岡八幡宮は、鎌倉幕府の守護神として、最も重要な施設に位置付けられた神社である。頼朝の時代から続く、例大祭や流鏑馬神事^{やぶさめしんじ}をはじめ、1 年を通じて様々な伝統行事が現在も行われている。

（ⅰ）上宮

上宮は、大石段の階段の上に位置する。建久 2 年（1191 年）3 月に起きた大火に類焼し、鶴岡八幡宮の当時の社殿・廻廊など、ほとんどが焼失した。このため、源頼朝は、大臣山の地を拓いて新たな社殿の造営を行い、同年 11 月に遷宮を行い、これにより、現在のような上下両宮の構成となった。その後、何度も火災等の被害を被ったが、歴代武家政権により、そのたびに再建された。文政 4 年（1821 年）の大火災で上宮本殿を焼失したが、文政 11 年（1828 年）に第 11 代将軍徳川家斉によって再建され、本殿九間社流造による権現造となった。現在の社殿はこのときのものである。



写真 鶴岡八幡宮上宮

社殿は、幣殿と拝殿を連ねた流権現造で、廻廊が左右に伸びて、本殿を囲む形になっており、建物内外の上部壁面には、鳥獣草木が描かれ、精巧な彫刻とともに細部にわたり見

事な色彩が施されている。重要文化財に指定されている。

(ii) 摂社若宮

若宮の創始は古く、源頼朝が治承4年（1180年）に由比郷にあった鶴岡宮を現在地に遷宮し、「鶴岡八幡新宮若宮」と称されていた時代にまでさかのぼる。建久2年（1191年）3月におきた大火により社殿が焼失してしまうが、源頼朝が大臣山中腹をけずり、そこに上宮を建て、従来の社殿があった位置に下宮を建て若宮とした。これにより、現在のような上下両宮の姿となった。これ以来、若宮を下宮と称するようになった。その後、幾度かの修理・再建を経て、寛永元年（1624年）に上下両宮造替が行われた。現在の社殿はその時のものである。その後もさらに寛文から昭和にかけて修理が行われた。



写真 鶴岡八幡宮 摂社若宮

社殿は、桁行が五間、梁行が二間の身舎全面に向拝をつけた流造の形式である。廻廊、末社武内社とあわせて、重要文化財に指定されている。

(iii) 末社丸山稲荷社本殿

丸山稲荷社は、上宮廻廊の西方、小高い丘の上にある。建長5年（1253年）に創建、応永5年（1398年）に造替の蛭子三郎明神社が江戸時代に柳営社となり、さらに明治時代に入って丸山稲荷社本殿として現在の場所に移築されたものである。鶴岡八幡宮において最古の建造物であると推定される。



写真 丸山稲荷社

本殿の形式は、一間社流見世棚造で、桁行一間、梁間一間切妻身舎に同じ桁行の向拝を張出し、正面と両側面の縁の出は、向拝の出より少し小さい。一部後世の改造も認められるが、様式は、純粋な中世和様本殿であり、貴重な古建築である。重要文化財に指定されている。

(b) 八雲神社(大町)

大町にある八雲神社は、平安時代永保年中（1081～1084年）^{みなものよしみつ}源義光の勧請と伝えられている。後三年合戦に奥州鎮護の任務にあたった兄源義家の苦戦が伝えられる中、義光は力添えのために官職を辞して現地に向かうが、鎌倉に入ると悪疫により苦しむ人々を目の当たりにし、厄除けのために京都の祇園社を勧請し、土地の



写真 八雲神社(大町)

守護神として崇めた。すると悪疫はたちまち退散し、人々は難を逃れたといわれており、八雲神社が鎌倉の「厄除さん」といわれる由縁でもある。

現在の社殿は昭和5年（1930年）に竣工¹した。社殿は、拝殿と本殿が一体となった造りをしている。拝殿の屋根は、入母屋造りで、正面に一間の向拝が設けられている。本殿は、三間社神明造で、屋根は銅板葺である。境内には稲荷社の他に、「寛文十年」（1670年）の銘がある庚申塔が建っている。庚申塔は市指定有形民俗文化財である。

(c) 荏柄天神社^{えがらてんじんしゃ}

荏柄天神社は、鶴岡八幡宮及び旧大倉幕府の北東に位置し、古くは荏柄山天満宮^{じんべいざんてんまんぐう}とも号された。源頼朝は、長治元年（1104年）創建の天神社を幕府鬼門の守護神と位置付け、改めて社殿を造営した。以後、武家の誓約を司る神として、鶴岡八幡宮とともに江戸幕府に至るまで、関東の戦国大名や武家政権の庇護をうけた。



写真 荏柄天神社社殿

現存する本殿は、寛永元年（1624年）の鶴岡八幡宮若宮の社殿造営に伴い、若宮の旧本殿を移築して再興されたものである。若宮自体は、正和5年（1316年）再建後、中世を通じて維持されているため、この本殿創建は14世紀に遡る可能性がある。形式は三間社流造、屋根は銅板葺である。内部は小組格天井とし、内法長押上の小壁に横連子を入れる。鶴岡八幡宮の室町時代に遡る主要社殿を伝える唯一の例として大変重要な建造物であり、重要文化財として指定を受け、また、境内も史跡の指定を受けている。

境内には、昭和46年（1971年）に奥多摩の天然石で造られた「かつば筆塚」と平成元年（1989年）に青銅製の筆の形を模した「絵筆塚」と呼ばれる2つの筆塚がある。「かつば筆塚」は、漫画家の清水崑^{こん}が愛用した絵筆を埋納した際に建てられた。「絵筆塚」は、清水崑の死後、漫画家の横山隆一が中心となり建てられた。「絵筆塚」には多くの漫画家が描いたかつばのレリーフが飾られている。それぞれ、除幕式当日の写真が荏柄天神社に保管されている。

¹ 昭和47年（1972年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

(d) ぜにあらいべんざいてん う が ふくじんじゃ
 銭洗弁財天宇賀福神社

銭洗弁財天宇賀福神社は、JR 鎌倉駅から源氏山公園へと向かう急な坂道の途中に位置する。

道の切岸に口を開く岩のトンネルを進み、さらにその先の木の鳥居を抜けると広々とした空間が開け、右手には本殿と弁財天を祀る洞窟が見える。洞窟入口には、唐破風屋根付きの本社がある。昭和 38 年（1964 年）の写真から、50 年以上前も、現在と同様に、洞窟奥には小さな木造の奥宮が岩壁に寄り添うようにあることが分かる。境内には、七福神を祀った末社や上の水神社・下の水神社が崖の中腹まで建ち並び、巡回して参拝できるようになっている。また、参拝者のための茶店もあり、巳の日などは大いに賑わう。

銭洗弁財天には、巳の月の巳の日の夜中に宇賀福神が源頼朝の夢に現れ、その教えに従いこの地に宇賀福神を祀ったところ、平安な世が訪れたとの言い伝えがある。その後、正嘉元年（1257 年）に北条時頼が、ここから湧き出る水で銭を洗い清めれば福銭となる、と自ら銭を洗い祈願したことがはじまりとなったといわれており、今でも多くの人々が年間を通じてこの地を訪れ、幸福利益を願いながら故事に倣って銭洗いを行っている。



図 0-1 銭洗弁財天宇賀福神社
昭和 38 年(1964 年)



図 0-2 銭洗弁財天宇賀福神社

(e) 佐助稲荷神社

佐助稲荷神社は、建久年間（1190～1199 年）に源頼朝が畠山重忠に命じて「かくれ里の祠」を探し当て、稲荷神社を再建させたと伝えられている。源頼朝はかつて佐殿と呼ばれており、佐殿を助けた稲荷社ということで佐助稲荷社と呼ばれている。源頼朝が征夷大將軍まで出世したことから、別名「出世稲荷」と呼ばれ信仰を集めている。



図 0-3 佐助稲荷神社 拝殿

社殿は、拝殿の後方の階段を上った場所に本殿がある形式で、本殿は明治 28 年（1895 年）に建造²されたものがあつたが、令和元年東日本台風で被害にあい、現在、本殿は、四つの赤い柱に囲まれた神籬^{ひもろぎ}となっており、拝殿は、令和 2 年（2020 年）に建替えられた。

² 昭和 47 年（1972 年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

境内の中には、小さな洞穴の中に^{れいこ}霊狐の神水と称される湧き水があり、洞穴の奥には小さな石造りの祠がある。昭和 45 年（1970 年）の写真を見ても 50 年以上前から湧水が絶えることなく湧き出ていることがわかる。



図 0-5 佐助稻荷神社 祠
(昭和 45 年(1970 年))



図 0-4 佐助稻荷神社 祠

(f) 由比若宮（元八幡）

源頼義が前九年の役を平定した後の康平 6 年（1063 年）に、源氏の守り神である石清水八幡宮を由比郷に勧請したということが、『吾妻鏡』³に記されている。その後、源頼朝が現在の鶴岡八幡宮がある場所に遷宮を行ったことから、ここは「元八幡」と呼ばれるようになったといわれる。

由比若宮の社殿は、一間社流造で、朱塗りの外観をしている。境内は、鶴岡八幡宮とともに、史跡に指定されている。昭和 40 年（1965 年）の写真からも、現在の社殿が 50 年以上前から建っていることが分かる。



写真 6 由比若宮
(昭和 40 年(1965 年))



写真 由比若宮

(g) 葛原岡神社・日野俊基墓

葛原岡神社は、日野俊基を祀る神社で、明治天皇が日野俊基に従三位を贈り、地元有志

³ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

と全国の崇敬者の協力、また、宮内省からの支援により明治 20 年（1887 年）に創建された。日野俊基は後醍醐天皇の側近であり、後醍醐天皇の鎌倉幕府倒幕計画に加担したため
 仮粧坂⁴上の葛原岡で、辞世の句を残し、この地で非業の死を遂げた。

現在の社殿は、平成 20 年（2008 年）の鎮座 120 年を機に氏子・崇拝者からの寄進により、平成 18 年（2006 年）12 月 20 日に遷宮を執り行った。新しい社殿は、拝殿と本殿が一体となった造りになっている。境内は、史跡仮粧坂の一部として史跡に指定されている。神社の南にある日野俊基墓も史跡に指定されている。



写真 葛原岡神社



写真 7 日野俊基墓

(h) 熊野新宮

極楽寺二丁目に鎮座する熊野新宮に関しては、『忍性菩薩行状略頌』に文永 6 年（1269 年）創建とあり、また永仁 6 年（1298 年）の社殿焼失後、正安 2 年（1300 年）に熊野大神を勧請し、熊野新宮としたと伝わっている。関東大震災で村内の八雲神社と諏訪神社が倒壊すると、この 2 社を昭和 3 年（1928 年）に合祀し、現在の姿となった。棟札によると、現在の社殿は昭和 2 年（1927 年）の造営である。拝殿、幣殿、本殿が一直線に配置されている。本殿は一間社流造で、屋根は銅板葺となっている。



写真 熊野新宮

(i) 八雲神社(山ノ内)

山ノ内の八雲神社は、文明年間（1469～1487 年）に創建されたと伝わり、市の指定有形文化財で、鎌倉市で最古かつ最大とされる寛文 5 年（1665 年）銘の庚申塔や、安倍晴明の伝説が残る晴明石などが境内に残っている。

現在の社殿は弘化 3 年（1846 年）の再建⁵で、拝殿、



写真 八雲神社(山ノ内)

⁴ 史跡の指定名称は「仮粧坂」であり、ふりがなは「けはいざか」であるものの、「化粧坂」と表記する場合や、「けわいざか」と読む場合もある。

⁵ 昭和 47 年（1972 年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

幣殿、本殿が一直線に配置されている。本殿は一間社流造で、屋根は銅板葺である。

(j) 八雲神社(常盤)

常盤の八雲神社は、治承年間（1177～1181 年）に創建されたと伝わる。「文久二年」（1862 年）の銘がある石造の鳥居の奥にある階段を上ると社殿がある。以前は天王社と呼ばれ、御嶽神社・諏訪神社が合祀され、現在の地に社殿が建築された。

社殿は、拝殿、幣殿、本殿が一直線に配置されている。本殿は一間社流造で、屋根は銅板葺である。昭和 48 年（1973 年）の写真から、現在の社殿が 50 年以上前から建っていることが分かる。



写真 八雲神社(常盤)
(昭和 48 年(1973 年))



写真 八雲神社(常盤)

(k) 鎌倉宮

鎌倉宮は、明治 2 年（1869 年）に明治政府が勅命により創建した神社であり、鶴岡八幡宮から東へ約 1 kmの場所に位置している。緑に囲まれた境内の入口には、石造りの鳥居がそびえ立ち、その下をくぐり抜けると広々とした空間に石畳の参道が延びている。正面に見える石段を上がり、二つ目の鳥居を抜けた先には、静寂の中に拝殿、本殿が立ち並んでいる。

祭神は、後醍醐天皇の皇子で鎌倉幕府の倒幕に貢献した大塔宮護良親王であることから、鎌倉宮は大塔宮とも呼ばれている。初詣に訪れた参拝客の多くが求める獅子頭は、護良親王が戦いに臨む際、兜の中に厄を食べ、幸せを招くといわれる獅子頭のお守りを忍ばせたとの言い伝えによるものである。

本殿をはじめとする境内の建築物は明治 2 年（1869



写真 鎌倉宮
(昭和 50 年(1975 年))



写真 鎌倉宮

年）創建⁶当初のものである。拝殿は、妻入りの入母屋銅板葺、拝殿と本殿を繋ぐ位置に幣殿代わりとなる中門があり、本殿は、三間社神明造で、屋根は反りのある切妻銅板葺という造りになっている。

（I） 甘縄神明宮

甘縄神明宮は、正徳2年（1712年）成立の『相州鎌倉郡神輿山甘縄寺神明宮縁起略』によると、和銅年間（708～715年）にこの辺りの豪族、染谷太郎時忠が創建した鎌倉で最古といわれる神社である。

関東大震災により、本殿は半壊し、拝殿は全壊した後、昭和12年（1937年）に新築⁷された。拝殿の後方に石段があり、本殿と繋がっている。拝殿、本殿共に屋根上に千木、堅魚木があり、本殿は、一間



写真 甘縄神明宮

神明造で、屋根は切妻銅板葺である。石造りの神明鳥居の脇には、鎌倉青年団が大正14年（1925年）に建立した「あだちもりながやしきあと足達盛長 邸 址」の石碑が残る。

源頼義が相模守としてこの神社にお参りした後、義家が誕生し、その後義家がやしろ社を再建したと伝わっている。『吾妻鏡』⁸によれば、鎌倉時代には、源頼朝、政子、実朝らが参詣しており、源氏と縁が深い。川端康成の『山の音』に登場する信吾の家の裏山の神社のモデルともいわれる。

⁶ 昭和47年（1972年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

⁷ 昭和47年（1972年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

⁸ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

b 寺院

歴史的風致の形成を担っている寺院の掲載順は、建長寺、円覚寺、高德院に続き、各寺院における歴史的風致の形成を担っている行事の正月からの開催順である。

(a) 建長寺

建長寺は、建長5年（1253年）に鎌倉幕府第五代執権北条時頼が、中国の禅僧蘭溪道隆を開山に迎えて創建した我が国初の禅宗専門道場であり、我が国に禅宗が定着する契機をなした最も重要な禅宗寺院といえる。現在は臨済宗建長寺派の大本山で巨福山建長興国禅寺と号する。仏殿前庭及び方丈庭園は昭和7年（1932年）に史跡及び名勝の指定を受けており、6件の重要文化財（山門・仏殿・法堂・唐門・昭堂・大覚禅師塔）のほか、国宝に指定された建長7年（1255年）鑄造の梵鐘など多くの文化財を有している。

昭和41年（1966年）に史跡に指定された境内はかつて「地獄谷」と呼ばれた南に開く谷戸の内部にあり、谷開口部付近の総門から約100mの地点に壮大な山門を構え、そこから谷の中軸線に沿って仏殿前庭、仏殿、法堂、唐門、方丈、方丈庭園等が一直線に配置されている。狭い谷間を造成した中に営まれた直線的な伽藍配置は、我が国における初期大禅宗寺院伽藍の典型であると同時に、後背山稜部と一体となって静寂な宗教空間を形成しており、鎌倉固有の社寺景観を現している。主要伽藍の東西、さらに北東へ谷が入り込む区域には多くの塔頭が営みが続けており、その中でも仏殿前庭から南東に入る小谷に位置し、開山を祀る西来庵の昭堂と大覚禅師塔は特に重要な存在である。また、北東の尾根線付近には、約50穴から成る朱垂木やぐら群が存在する。

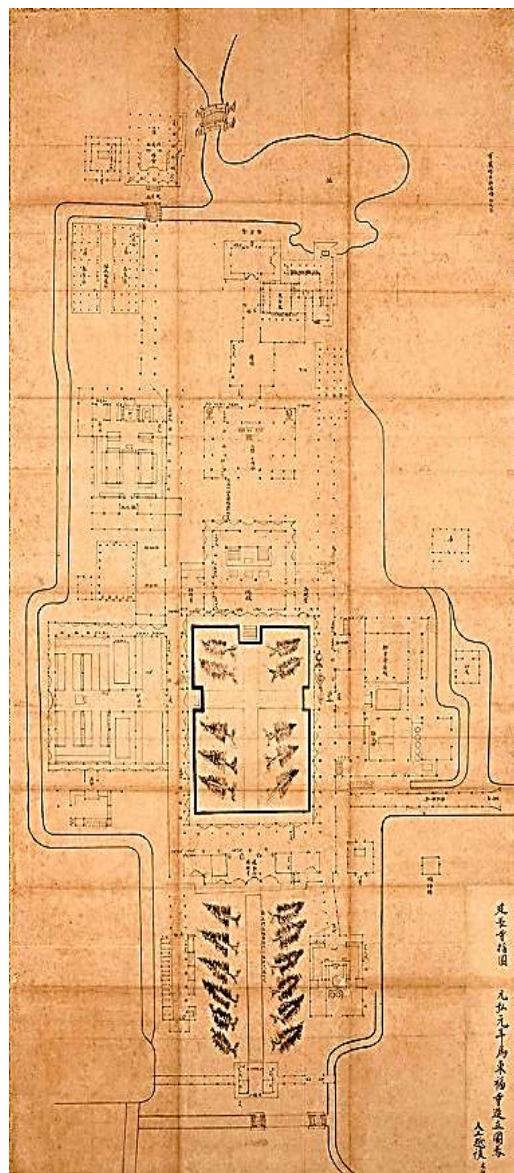


図 建長寺伽藍指図

このような境内及び伽藍の配置は、「建長寺伽藍指図」（元弘元年（1331 年）作成）や「建長寺境内絵図」（延宝 6 年（1678 年）作成）などに描かれた中国禅宗寺院を模した配置を基本的に踏襲しているが、鎌倉時代から室町時代にかけての建長寺は、中国南宋五山に倣った、壮大な伽藍を構えた大禅宗寺院として威容を誇った。創建後の建長寺は、度重なる火災や暴風によって伽藍の焼失、倒壊といった被害を受けており、その都度、鎌倉幕府や後続した武家政権によって復興が図られた。鎌倉時代に再建するにあたり、「建長寺船」という鎌倉幕府公認の渡航船を元へ派遣し、資金調達を行うとともに、文化的な交流に繋がった。近世以降、江戸幕府は手厚い保護を実施し、正保 4 年（1647 年）には芝増上寺からの唐門や仏殿の移築、延宝 6 年（1678 年）には徳川光圀による「建長寺境内絵図」の寄進の他、数次に及ぶ修造を援助した。現在の主要伽藍は、この江戸幕府を中心とする修造による。



写真 建長寺 梵鐘

（i）山門

建長寺の山門は、安永 4 年（1775 年）の建設になる。禅宗様を基調とした 2 階建ての三間二重門で、下層を吹き放し、上層内部には仏壇を備え、屋根は入母屋造銅板葺で、2 階正面中央には、軒唐破風を設ける。三間二重門として東日本最大規模を誇る重要な建築である。重要文化財に指定されている。



写真 建長寺 山門

（ii）仏殿

建長寺の仏殿の創建は、建長 3 年（1251 年）だが、その後、数回の火災による消失と再建を繰り返す。現在の建物は、正保 4 年（1647 年）に徳川秀忠夫人崇源院の御霊屋旧殿を移築したものである。

建長寺仏殿は、方三間の母屋に裳階^{もこし}をめぐらせた裳階付仏殿で、寄棟造瓦棒銅板屋根という造りになっている。重要文化財に指定されている。



写真 建長寺 仏殿

(iii) 法堂^{はっぽう}

建長寺の法堂は、文化 5 年（1808 年）に再建が着手され、文政 8 年（1825 年）に竣工した方三間^{もこし}裳階付の大型禅宗様仏堂である。屋根は入母屋造銅板葺で、要所に江戸時代後期らしい装飾性も認められる。重要文化財に指定されている。



写真 建長寺 法堂

(iv) 半僧坊^{はんそうぼう}

半僧坊は、建長寺境内の最奥部、裏山の中腹に位置する鎮守社であり、建長寺の伽藍構成を補完する重要な建造物群である。山門から法堂・方丈などの主要伽藍を経てさらに背後の石段を上った地点に鎮座している。



写真 半僧坊

半僧坊権現は、明治 23 年（1890 年）、静岡県奥山方廣寺より勧請されたもので、鎌倉建長寺の鎮守として祀られた。昭和 45 年（1970 年）に建長寺で発行された会報誌「和光」にも、その旨が記載されている。

本殿（社殿）は木造入母屋造、銅板葺で、正面に向拝を備える。建長寺の主要伽藍とは異なる和風社殿の姿を持ちながらも、周囲の山林や石段参道との調和した構えを示す。本殿へ至る長大な石段参道の両側には天狗像が多数配置され、これらの造形群が社殿への導入空間を演出している。

(b) 円覚寺

円覚寺は、弘安 5 年（1282 年）に鎌倉幕府第八代執権北条時宗が、モンゴル襲来時の犠牲者を敵味方の区別なく弔うため、中国の禅僧無学祖元を開山に迎えて創建した禅宗専門道場である。建長寺と並んで我が国に禅宗が定着する契機をなした重要な禅宗寺院であるとともに、鎌倉幕府による神道と禅宗を両輪とする宗教政策の中心であり、建長寺に並ぶ当



写真 円覚寺 山門

時の中国文化受容の最大の拠点として、武家文化の成立と発展に大きく貢献した。現在は臨済宗円覚寺派の大本山で瑞鹿山円覚興聖^{ずいろくさんえんがくこうしょうぜん じ}禅寺と号する。

円覚寺境内は昭和 42 年（1967 年）に史跡に指定され、仏殿の前庭、白鷺池及び妙香池は昭和 7 年（1932 年）に史跡及び名勝の指定を受けている。

境内は、南西に開く谷戸が雛壇^{ひなだんじょう}状に造成されており、北東方向へ約 500m 入り込む谷戸の入り口横に白鷺池、そこから一段高くなった位置に総門を構える。総門を入ると約 300m の間に諸伽藍が一直線に配置されている。建長寺同様、狭い谷間を造成した中に営まれた伽藍は、我が国における初期大禅宗寺院伽藍の典型であると同時に、後



写真 円覚寺 妙香池

背山稜部と一体となって静寂な宗教空間を形成しており、鎌倉固有の社寺景観を現出している。また、山門の北東約 270m の位置、東西側及び北側に迫る山稜部の裾を切り下げた空間には 15 世紀前半の建築と推定される国宝の舍利殿、山門の南東側約 100m の丘陵上には正安 3 年（1301 年）鑄造の国宝の梵鐘が所在する。

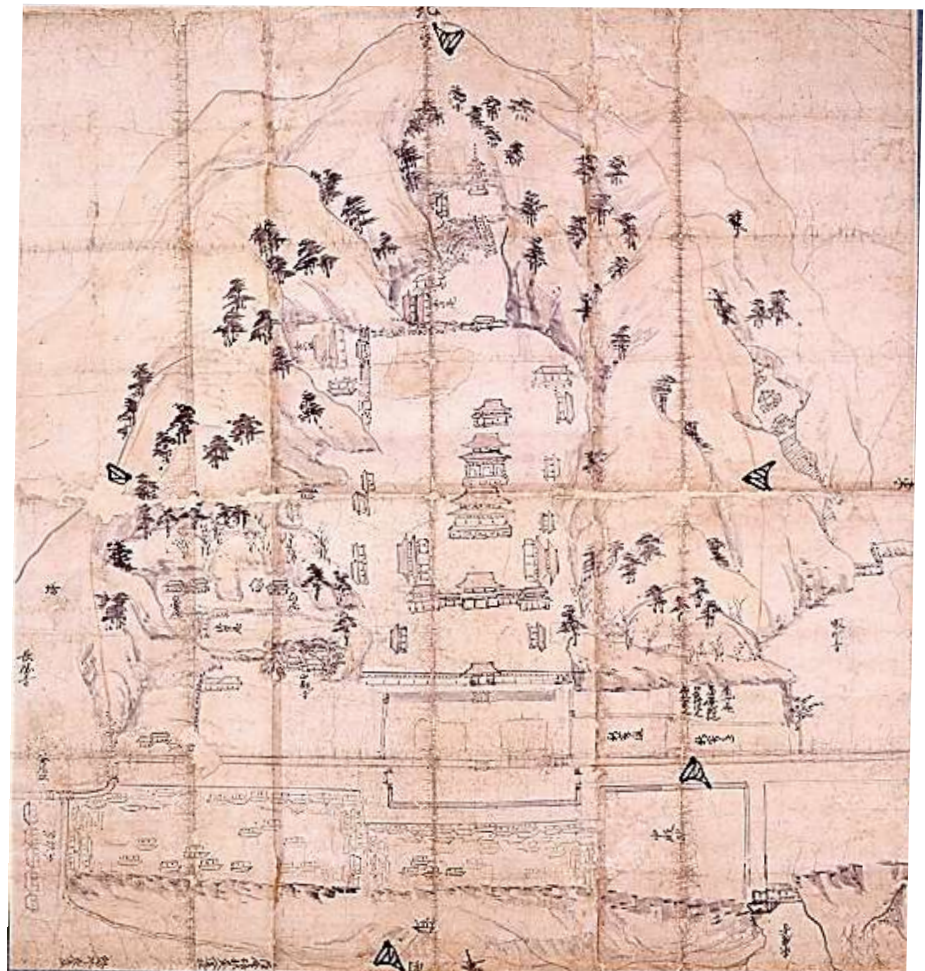


図 円覚寺境内絵図

円覚寺は、鎌倉幕府の庇護の下に境内整備が進められ、鎌倉幕府滅亡後も室町幕府等の時の権力者の保護を受け、14 世紀前半には、大伽藍を備えた最盛期を迎えた。当時の状況を描く正慶 2 年（1333 年）～建武 2 年（1335 年）頃作製の「円覚寺境内絵図」によれば、主要伽藍が中軸線上に並び、建長寺と同様に中国禅宗寺院を模して造営されたことが明らかである。江戸時代には江戸幕府の保護による伽藍の復興が進められ、18 世紀後半には現在の姿に整備された。

(i) 舍利殿

円覚寺の舍利殿は、永禄6年（1563年）の大火後の復興事業として、後北条氏の助力により、西御門にあった太平寺の仏殿を天正年中（1573～1592年）に移築したものと考えられている。

太平寺におけるこの建物の建立年代は明らかではないが、15世紀前半に建立された正福寺地藏堂（東京都東村山市）と酷似することから、室町時代中頃に建立されたものと推測される。禅宗とともに伝来した宋の建築様式、禅宗様の仏堂で、現存する禅宗様建築の典型とされる。国宝に指定されている。



写真 円覚寺 舍利殿

(c) 浄智寺

浄智寺は鎌倉幕府第五代執権北条時頼の子である宗政の菩提を弔うために、弘安4年（1281年）に創建された。緑豊かな境内は史跡に指定されている。鐘楼門は鐘つき堂を兼ねた山門で、全国でも珍しく、延宝7年（1679年）銘の梵鐘がかかっている。



写真 浄智寺

その他に、古くから残る建造物として葵門と外門がある。どちらも江戸時代後期の建築⁹とされている。葵門は、書院と庫裡に行く門であり、一間棟門で屋根は鉄板葺となっており、扉の上方に墨で丸く葵の紋を描いている。外門は、浄智寺参道の石段を上ったところにある高麗門で、屋根は切妻造棧瓦葺である。

曇華殿^{どんげでん}と称される本堂は、関東大震災で倒壊してしまい、その後多くの人々から寄付を受けて昭和7年（1932年）に再建¹⁰された。建物は宝形造で、屋根は棧瓦葺の形式である。浄智寺が創建された当時は、中国（宋）からの渡来僧も多かったことから、宋の建築様式をうかがうことができる造りをしている。

そのほかに大正13年（1924年）に建築された茅葺屋根が特徴的な書院があり、正面からも庭園からも美しいたたずまいを見ることができる。

元亨3年（1323年）の北条貞時の十三回忌の際に参加した浄智寺の僧侶は224人で、建長寺・円覚寺・寿福寺に次ぐ人数であり、寺権を誇っていた。

⁹ 昭和62年（1987年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

¹⁰ 令和4年（2022年）に浄智寺が発行した『史跡浄智寺境内保存活用計画』による。

総門の手前には石橋のかかった池があり、その近くには鎌倉十井の1つである甘露ノ井がある。

浄智寺境内は、史跡に指定されている。

(d) 高德院

高德院は、鎌倉大仏として知られる浄土宗の寺院で、正式には「大異山高德院 清 浄 泉寺」^{だい い さんこうとくいんしょうじょうせん じ}と称する。国宝に指定されている青銅製の阿弥陀如来坐像は、高さ約 11.3m、重さ約 121t に及び、奈良の大仏と並ぶ巨像として全国的に広く知られている。『吾妻鏡』¹¹によれば、暦仁元年（1238 年）に木造の大仏を造り始め、大伽藍もあわせてその 6 年後に完成された。その後、建長 4 年（1252 年）に青銅の大仏が造られ始め、康元元年（1256 年）に開眼供養が行われたと伝わる。



写真 鎌倉大仏

当初は大仏殿に安置されていたが、度重なる災害によって建物は失われ、現在では露坐の姿が鎌倉の風景に溶け込んでいる。境内には、かつて大仏を覆っていた大仏殿の存在をしのばせる礎石も残されている。境内は、鎌倉大仏殿跡として史跡に指定されている。

(e) 本覚寺

本覚寺の境内は、『吾妻鏡』¹²にみられる夷堂の地といわれている。当初は天台宗の寺院であったが、日蓮がここに留まったことから改宗し、日蓮宗の寺院になったと伝わっている。

本堂は大正 12 年（1923 年）に建て直したものであり、境内中央西寄りに東面し、正面 7 間の入母屋造棧瓦葺で、正面に軒唐破風の向拝を付す。日蓮宗におい



写真 本覚寺 本堂

て伝統的な平面ながら、建 登 せ 柱^{たてのぼせ ぼしら}が使用され、小屋組はトラス構造を採用し、軽量化が図られている。客殿・庫裡・分骨堂・鐘楼・手水舎・楼門・大門とともに登録有形文化財である。

¹¹ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

¹² 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

(f) 虚空蔵堂

虚空蔵堂は、極楽寺坂の入口に位置する成就院の境外仏堂である。弘法大師ゆかりと伝わる地に建立された成就院の歴代住職が、100 日間かけて真言を 100 万回唱える虚空蔵菩薩求聞持法と呼ばれる修行法で修行した仏堂である。虚空蔵菩薩は福德と知恵を人々に与え、すべての願い事を満たしてくれる仏様として信仰を集めている。明鏡山円満院星井寺と号する。

仏堂は、寄棟造瓦葺の屋根をした小堂である。正面に唐破風を備えた向拝を設けている。元々の仏堂は、現在の場所よりもさらに山の上にあったとされるが、関東大震災で倒壊してしまった。現在の仏堂は、地域の人々からの寄進等により昭和 10 年（1935 年）に新たに建てられたものであることが、成就院に保管されている昭和 9 年（1934 年）に作成された「堂宇改築許可願」や当時の写真などから分かる。



写真 虚空蔵堂(昭和 10 年(1934 年))



写真 虚空蔵堂

(g) 円応寺

円応寺は、建長 2 年（1250 年）に彫像された閻魔大王を本尊としている。室町時代後期から戦国時代にかけて成立したとみられる『文明明応年間関東禅林詩文等抄録』によると、円応寺は当初、高德院（鎌倉大仏）の近くにあり、鎌倉幕府滅亡後に足利尊氏が材木座に移築していることが分かる。享保 2 年（1717 年）に鎌倉を訪れた太宰 春台が江戸時代中期に著した『湘中紀行』では、すでに現在の地に移っている。本尊の閻魔王座像は重要文化財で、寺伝によれば、運慶の作品と伝わる。



写真 円応寺

現在の本堂は、関東大震災で倒壊後、昭和 14 年（1939 年）に古材を用いて再建¹³され、桁行五間、梁間五間の規模で、宝形造棧瓦葺の屋根をもつ。後面中央一間に本尊閻魔王像

¹³ 昭和 62 年（1987 年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

安置のための張出がある。

境内は、史跡建長寺境内の一部として、史跡に指定されてる。

(h) 宝戒寺

宝戒寺は、鎌倉幕府滅亡による北条一族の霊を弔うため、建武2年(1335年)に後醍醐天皇が足利尊氏に命じ、北条家執権の屋敷跡に創建された。本尊は子育経読地蔵として信仰される重要文化財の地蔵菩薩坐像である。本堂に向かって右には聖徳太子を祀った太子堂がある。秋の彼岸頃に咲く参道沿いの白萩が有名であり、「萩寺」という名でも親しまれている。



図 0-8 宝戒寺

現在の本堂は昭和6年(1931年)の建立¹⁴である。桁行五間の規模で、屋根は入母屋造瓦葺の禅宗様式を基調とした建築である。

(i) 明王院

明王院は嘉禎元年(1235年)に鎌倉幕府第四代将軍藤原頼経により創建された。不動、降三世ごうさんぜ、大威徳だいいとく、軍荼利ぐんだ、金剛夜叉こんごうやしやの五大明王像を祀っているのは、鎌倉では明王院のみである。弘安4年(1281年)に記された『異国降伏祈祷記』には、鎌倉幕府の祈願所として、モンゴル襲来の際に明王院で元軍退散の法要がなされた記録が残っている。



図 0-9 明王院

現在の本堂は、元禄6年(1693年)の建築¹⁵で、桁行三間、梁間三間の規模で、茅葺の寄棟屋根が印象的な建物である。

(j) 極楽寺

極楽寺は、正元元年(1259年)に、第二代執権北条義時の三男で、第五代執権北条時頼の補佐を行うなど幕府内で重きをなした北条重時が、日本人律宗僧の忍性を開山に招いて創建した。現在は、真言律宗の寺院で、霊鷲山感応院極楽律寺りょうじゅせんかんのういんごくらくりつじと号する。

中世には子院 49 箇院を有する大寺院であったが、現在の境内は、北西から南西の周囲を山陵に囲まれた一画に営まれ、山門から参道を約 50m 進んだ場所に、伽藍が配置されて

¹⁴ 昭和 47 年(1972 年)に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』(第三版)による。

¹⁵ 昭和 62 年(1987 年)に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

いる。また、西側の山稜部の裾には、開山の忍性及び第二代 順忍^{じゅんにん}の墓塔である大型の五輪塔 2 基が建つ。忍性墓塔は国指定の重要文化財で、順忍墓塔は、市指定有形文化財である。

忍性は、布教活動を行うとともに、極楽寺を拠点に弱者・貧民救済の事業や、道路や橋の建設及び井戸の掘削などの土木事業にも力を注いだ。また、極楽寺は、和賀江嶋の管理・徴税などの権利を幕府から与えられるなど、鎌倉幕府において重要な役割を果たした。

なお、当初の史跡指定は忍性墓の範囲のみであったが、平成 20 年（2008 年）に境内一体が追加指定された。



写真 極楽寺 山門



写真 極楽寺忍性塔

(k) 光明寺

光明寺は、仁治元年（1240 年）に、第四代執権北条経時が浄土宗三祖然阿良忠^{ねん なりょうちゆう}を開山に開創した蓮華寺^{れんげじ}を起源とし、寛元元年（1243 年）に現在地に移築し、光明寺と改称したとされるが定かではない。室町時代には第九代住職観譽祐崇^{かんよゆうそう}によって中興され、明応 4 年（1495 年）には後土御門天皇より勅願寺^{ごつちみかど}に定められており、江戸時代には、浄土宗の関東十八檀林の第一位の寺として栄えた。現在は、浄土宗大本山天照山光明寺と号する。

東に山稜部が迫る境内には、山門、本堂、日向延岡藩主内藤家歴代の墓所などがある。本堂は重要文化財に指定されており、元禄 11 年（1698 年）に建てられた、現存する鎌倉近世仏堂のうち最大の堂である。桁行九間、梁間十一間の規模で、瓦棒銅板葺入母屋造の大屋根をもち、正面には、中央軒唐破風付の三間向拝を設ける。内部は上段式になる内陣と後陣、二重構成になる広大な外陣など、浄土宗寺院における大規模な本堂として特色ある構成をしている。

なお、令和 8 年（2025 年）現在、浄土宗 開宗 850 年記念事業として本堂の大改修を実施中のため公開されていない。



写真 光明寺
(昭和 36 年(1961 年))



写真 光明寺

(I) 覚園寺

覚園寺は、建保 6 年（1218 年）に第二代執権北条義時が建てた薬師堂を、永仁 4 年（1296 年）に第九代執権北条貞時が元の討滅を祈願して寺院に整備したもので、諸宗兼学の寺院として繁栄した。

創建当初は、多くの伽藍を備えた大規模かつ荘厳な寺観を呈していたが、現在の境内は、谷の最奥に奥行約 380m、最大幅約 50m 程の範囲に営まれている。境内に



写真 覚園寺 薬師堂

は、薬師堂の他各種の建物が建ち、境内最奥部には大型宝篋印塔の開山塔及び大燈塔（正慶元年（1332 年）建立の重要文化財）他、歴代住持の墓塔が並び建ち、寺院の聖域を形成している。

境内全体が山稜部の裾を切り落として谷を広げた状況をよくとどめ、境内奥から後背の山稜頂部（標高約 150m）までが連続する地形は、鎌倉の寺院の中でも、最も幽玄かつ静寂な宗教空間の特徴を保持している。また、百八やぐら群が存在する背後の山稜部も含め、覚園寺は昭和 42 年（1967 年）に境内全域が史跡に指定されている。

現在の薬師堂は、文和 3 年（1354 年）に建立され、元禄 2 年（1689 年）に改築¹⁶された。鎌倉石で積んだ基壇の上に建ち、方五間の規模で、屋根は寄棟造の茅葺である。内部は、禅宗様方三間裳階付仏殿と同じ構成であり、長大な禅宗様仏壇に薬師如来像と日光・月光両菩薩像（いずれも国指定の重要文化財）が安置されている。これは、全国的にみても大規模な宋風仏殿内部の偉容をうかがわせる唯一の例である。薬師堂は、県指定重要文化財である。

¹⁶ 昭和 62 年（1987 年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

(m) 長谷寺

長谷寺は天平8年（736年）に聖武天皇の治世下に勅願所と定められたと伝えられる。実際の創建年次は不詳であるものの、梵鐘に文永元年（1264年）の銘があることから、13世紀には創建されていたと考えられる。^{かいこうざん じしやういん}海光山慈照院長谷寺と号する。本尊の十一面観音菩薩立像は木彫の仏像として日本最大級の高さ9.18mを有する。

観音堂は大正12年（1923年）の関東大震災で大きく崩れたため、本尊を祀る内陣が昭和18年（1943年）に再建された。現在の観音堂は昭和60年（1985年）に再建されたものの、内陣部分は昭和18年（1943年）当時の建築を使用している。観音堂の南方に位置する経蔵内の輪蔵は、東京都八王子市の浄土宗大善寺から移したもので、幕末の様式を示し、江戸時代末期の建築¹⁷とみられている。輪蔵の内部は、回転式の八角経庫で、現在は、扉を開けて公開している。すべて素木としながら、構造細部が充実しており、柱や横材に地紋彫や彫刻木鼻がある。



写真 長谷寺 輪蔵



写真 長谷寺(長谷観音)

(n) 杉本寺

杉本寺は天平6年（734年）の創建と伝えられる。別名「大蔵観音」・「杉本観音」とも呼ばれている。

「十一面杉本観音」と書かれたのぼりが立ち並ぶ石段の途中には、仁王門があり、門をくぐると右手に弁財天が祀られている。石段を上りきると、県の重要文化財に指定されている観音堂が見える。観音堂は、延宝6年（1678年）に建てられたもので、桁行五間、梁間五間の寄棟茅葺屋根である。内・外陣に分かれる中世密教本堂形式のものである。壁には参詣者の名前を刷った千社札が貼られている。

観音堂の右手には鐘楼があり、山際には白山権現が祀られ、境内には地藏像や多数の五輪塔が建っている。文治5年（1189年）に観音堂が火事になり、本尊を持ち出すため、別当が観音堂に入った際にやけどを負わなかったと伝わり、観音経の功德が現れる寺として信仰を集めている。源頼朝も深く信仰したと伝わり、建久2年（1191年）の再建において

¹⁷ 昭和62年（1987年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

は自ら参詣して本堂の再建に布 200 反を寄付したと『吾妻鏡』¹⁸に記載がある。



写真 杉本寺
(昭和 45 年(1970 年))



写真 杉本寺観音堂

(o) 安養院

安養院は嘉禄元年（1225 年）に北条政子や源頼朝の冥福を祈って建てた長楽寺が前身と伝わる。鎌倉時代の終わり頃に火災にあい、鎌倉幕府滅亡後に現在の地へ移転し、北条政子の法名である安養院を院号としたと伝わる。現在の本堂は昭和 3 年（1928 年）の建立¹⁹である。本堂は、屋根が入母屋造で、正面に一間の向拝が設けられている。本尊の阿弥陀如来像、千手観音像と北条政子像が安置されている。

本堂右手裏にある高さ約 3.4m の宝篋印塔は重要文化財に指定され、徳治 3 年（1308 年）とみられる銘がある。現在、鎌倉の中で年代が推定できる最も古い宝篋印塔である。



写真 安養院 宝篋印塔



写真 安養院

¹⁸ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

¹⁹ 昭和 47 年（1972 年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

(イ)その他の建造物

本計画において、後述する活動が認められず、歴史的風致の形成を担っている建造物として位置づけてはいないものの、歴史的遺産として鎌倉らしい景観を形成する社寺を抜粋して記載する。

a 寺院

(a) 寿福寺

寿福寺は日本に臨済宗を伝えた栄西を開山とし、源頼朝が没した翌年の正治2年（1200年）に創建された。『吾妻鏡』²⁰の記述から、寿福寺のある場所は源義朝の屋敷があった場所と考えられており、源氏ゆかりの地であったことがわかる。

源実朝もしばしば訪れ、七堂伽藍や塔頭が14もある大規模な寺院となった。境内は史跡に指定されている。境内のビャクシンも市指定の天然記念物に指定されており、山門の向こうに枝が広がる様子は禅寺の趣を感じさせる。

中軸上に惣門・中門・仏殿、仏殿東北に鐘楼、仏殿北側に客殿・庫裡が建つ。現在の仏殿は、正徳4年（1714年）の建築²¹で、方五間の規模で、屋根は寄棟造棧瓦葺屋根の禅宗様建築である。仏殿は、市指定有形文化財である。

山門の脇の小路を登ると、高浜虚子や大佛次郎など、鎌倉にゆかりの深い文化人の墓が建っている。



写真 寿福寺

(b) 浄妙寺

浄妙寺は源頼朝の重臣・足利義兼により、退耕行勇を開山として文治4年（1188年）に創建されたと伝わる。退耕行勇は鶴岡八幡宮の供僧であり、北条政子や源実朝にも篤く敬われた高僧である。創建当初の寺号は臨「極楽寺」であったが、建長寺の開山蘭溪道隆の弟子である月峯了然が住職となり、臨済宗の禅刹に改められ、正嘉年間（1257～1259年）頃に現在の浄妙寺に改称した。



写真 浄妙寺

かつては、外門・総門・山門・仏殿・法堂方丈・禅堂・経堂などの伽藍や多数の塔頭を

²⁰ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

²¹ 昭和62年（1987年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

持つ大寺院だったが、火災などのために徐々に規模が縮小し、現在は総門・本堂・客殿・庫裏が残っている。仏殿の東側には客殿と庫裏があり、仏殿の裏が開山堂で、境内は史跡に指定されている。寺の裏の墓地には、足利貞氏の墓と伝わる「明德三年」（1392 年）銘の宝篋印塔の他、室町時代の代々の足利公方の墓と伝わる石塔が多く見られる。

現在の本堂は、宝暦 6 年（1756 年）の建築²²で、規模は、桁行八間、梁間六間で、屋根は寄棟造茅葺形銅板葺の形状をしており、起りと呼ばれる膨らみが特徴的な形をしている。鎌倉近世禅宗方丈の唯一の遺構といわれている。寺の名にちなんで現在でも周辺の地名を「浄明寺」といい、地域の人々の生活の中にもその存在が息づいている。

²² 昭和 62 年（1987 年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

エ 活動

鎌倉における祭礼や伝統行事、その他の活動の全てをここで取り上げることはできないため、その一部について事例を示していく。

(ア) 鎌倉の社寺における信仰の広がり

中世以降の鎌倉は、狭い範囲に社寺がひしめく、いわば宗教都市であったといえる。現在も鎌倉には多くの社寺があり、それぞれ創建の背景や宗派は様々で、多様な歴史を今に伝えている。

谷戸や街角に点在する社寺は、鎌倉らしい風景を形づくとともに、季節の節目ごとに人々が訪れ、祈りを捧げる場ともなっている。信仰は日常の営みに自然と溶け込み、今なお市民生活に息づいている。

a 初詣

『吾妻鏡』²³によれば、治承5年（1181年）1月1日、「卯剋、前武衛、參鶴岳若宮給、不及日次沙汰、以朔旦被定當宮奉幣之日（云々、）（卯の剋、前武衛、鶴岳若宮に参りたまふ。日次の沙汰に及ばず、朔旦をもって当宮奉幣の日と定められると云々。）」とあり、頼朝が午前6時頃鶴岡八幡宮を訪れ、日柄などのことは関係なく1月1日の朝を鶴岡八幡宮へ奉幣する日と定めたと書かれている。

初詣は、社寺に詣で新たな気持ちで神仏の前で手を合わせ、1年間の無事と幸福を祈る風習であり、地元の氏神様へ参拝すること多いが、近年では有名な社寺へ参拝する人も増え、鶴岡八幡宮には遠方から多くの人が訪れている。

この参拝者の中には、大晦日の夜から元日の朝にかけて参拝をする人や夜が明けぬうちから訪れる人もいる。境内地の奥深くにぼんやりと浮かび上がる社殿に向かって、人々の列がゆっくりと歩を進める様子が見られる。夜が明けると、境内はさらに多くの参拝客で賑わうようになり、境内入口にそびえる三の鳥居から舞殿に続く参道、上宮へ続く大石段に



図 0-11 初詣(鶴岡八幡宮)



図 0-10 初詣(昭和 33 年(1958 年))

²³ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

は人々が帯のようになって進んで行く光景を見ることができる。また、社殿の周辺では、参拝を終えた人々が破魔矢^{はまや}やお守りを求め、おみくじを引いた人の歓声が方々で湧き上がる。鶴岡八幡宮では、三が日の参拝客が200万人を超える年もある。

元日の未明に鶴岡八幡宮を訪れる参拝者の中には、鶴岡八幡宮へ詣でた後、若宮大路を南へ下り、相模湾を臨む海岸で、山の端から昇る初日の出を待つ人々を見ることができる。こうした光景は、現在初詣が全国的な風習となっている中で、三方は山に囲まれ、一方は海に面した鎌倉の中心に鎮座する、鶴岡八幡宮への初詣が地域の人たちを中心に観光客なども交えた営みとなっていることが分かる。

高德院における初詣では、元日の午前0時より拝観が可能である。大仏がライトアップされ、闇の中に浮かび上がる阿弥陀如来坐像が参詣者を迎える。日中とは異なる表情を見せるその光景は、ただ観るだけでなく、祈りの対象としての存在感を印象づけるものとなっている。



図 0-12 初詣

また、鶴岡八幡宮、高德院のほかにも、鎌倉宮、銭洗弁財天、建長寺、円覚寺、本覚寺、長谷寺など、鎌倉の社寺には初詣に訪れた多くの人々が門外まで列をなす。特に、鎌倉宮の獅子頭、銭洗弁財天宇賀福神社のお宝銭^{たからせん}が縁起物として知られている。

参拝をした人々が破魔矢や御守等の縁起物を授かり、それらを手に鎌倉市内を巡る光景は、鎌倉の信仰と年中行事が現在も市民生活に根差し、継承されていることを感じることができる。

b 建長寺・円覚寺における托鉢

建長寺、円覚寺ともに境内に修行道場があり、僧侶になろうとする者の神聖な修行の場となっている。一般の人は立ち入りできず、隔絶した空間で毎日厳しい修行が行われる。その修行の1つとして「托鉢」の修行がある。

托鉢の起源は鎌倉時代後期といわれ、托鉢は戦中も中断することなく継続されてきた。元々はインドから伝来した修行で、インドでは僧侶は自ら農業など生産活動を行うことが認められず、生活を維持するために乞食（布施）をする必要がある。見返りを求めず、善い行いを施すことで功德を積むことを布施というが、托鉢はこの一つの形態であり、布教活動である。

布施は喜捨の行為であり、布施を受ける者も布施をする者も共に修行となる。鎌倉における托鉢は、駅前などに留まるのではなく、網代笠、脚絆姿^{きゃはん}で、修行僧3～5名で全市域を廻り、一軒一軒の前で読経する。声を出して歩いているだけの場合もある。

特に、建長寺においては、日付の下一桁に1・3・6・8が付く日は托鉢の日と決まっており、月に12日間托鉢に出る。托鉢のルートは全市域を網羅している。建長寺と円覚寺の間で托鉢の経路が重複しないように工夫している。昭和50年（1975年）の写真から、托鉢が50年以上前から行われていることが分かる。

一軒一軒の前で読経する托鉢の姿は特徴的であり、布施を通じ市民も心の安寧を得ている。山稜に囲まれた鎌倉の狭い市街地を禅僧が丸笠をかぶり、袈裟に鉢を持って列を成して歩く姿は、社寺・背後の緑や山稜・細街路・生垣などが構成する鎌倉らしい景観の中に溶け込み、住民の日常に根付いている。鎌倉のいたるところで綱代笠・脚絆姿の修行僧が見られ、読経する声を聞くことができ、住民、来訪者ともに鎌倉らしさや古都としての鎌倉の雰囲気や魅力を感じることができる。



図 0-14 托鉢の様子
(昭和 50 年(1975 年))



図 0-13 托鉢の様子

c 建長寺・円覚寺などにおける参禅

建長寺、円覚寺とも、現在も禅僧の厳しい修行が継続されている他、一般の参禅も盛んに行われている。

特に、円覚寺では、近代以降、在家者（^{ざいけしや}出家せずに仏道に帰依する者）に対する布教活動を盛んに進め、居士禅の普及に努めている。

禅について英語で著し、日本の禅文化を海外に広くしらしめた仏教学者の鈴木大拙や小説家の夏目漱石など多くの著名人が円覚寺において参禅していることも知られている。昭和40年（1965年）の参禅の案内看板からも、50年以上前から参禅が行われていたことが分かる。

また、建長寺では、日時を決めて禅僧が英語による坐禅指導を行っている。報国寺でも日曜座禅会が開催され、一般の人も参加し、体験することが可能となっている。

座禅会や講座が開催される際には、早朝や夕方に、参禅する人々が寺に入っていく光景が見られ、一般の人々が鎌倉の禅文化に親しみをもち、日常の中でその教えや心構えを身近に思っていることを感じることができる。



図 0-16 日曜坐禅会の案内看板(円覚寺)
(昭和 40 年(1965 年))



図 0-15 坐禅会(円覚寺)

d 寺院の梵鐘の響き

関東最大級の釣り鐘であり、国宝である円覚寺の洪鐘のほか、建長寺、浄智寺、光明寺、長谷寺、本覚寺、杉本寺、明王院など幾つもの寺院に梵鐘がある。戦時中の金属供出などで一時中断した寺院もあるものの、多くの寺院で継続的につかれている。

寺院の梵鐘の音は、地形によって異なるものの、山稜に囲われ、谷戸の多い鎌倉では、概ね半径 500m～1 km 圏内に響き渡る。

梵鐘の音は、修行僧・地域の人へ時刻を知らせる刻の鐘であると同時に、僧侶の 1 日の修行の始まりを告げる、法要の合図や地域の安寧を祈る目的でつく場合もある。

刻の鐘としては、夕方、日没近くの決まった時間に梵鐘をつく寺院が多いが、鎌倉の街中では、鐘の音を聴き、夕方の訪れを察知した子供たちが帰宅の途に就く様子や、音の聞こえる若宮大路沿道の商店の中には鐘の音を合図に店じまいの支度にとりかかる様子も見とれる。このように、梵鐘の音は鎌倉の独自性を示すものの 1 つとなっており、住民の日常生活とも密接な関わりを感じることができる。

また、一年の締めくくりに響く除夜の鐘は、日々の暮らしの延長線上にある特別な鐘として、多くの人々に親しまれている。大晦日の夜には、市内のあちこちの寺院で百八の煩惱を祓う鐘の音が鳴り響く。複数の鐘が同時に聞こえてくる様子は、社寺が密集している鎌倉ならではの音風景であり、地元の人々や訪れた人々が静かに耳を傾ける光景を見ることができる。

鎌倉では、このように日常と非日常の双方において、梵鐘の音が人々の暮らしと結びついている。それは単なる時を告げる音ではなく、信仰と生活、歴史と現在とが常に隣り合

わせにある、鎌倉ならではの音風景といえる。



図 0-18 円覚寺 除夜の鐘
昭和 42 年(1967 年)



図 0-17 円覚寺 除夜の鐘

e まとめ

鎌倉の各地にある多くの社寺は、地域の人々の営みの中にある存在となっている。日常に溶け込む、托鉢で僧侶が列をなす光景、梵鐘の音や初詣などの年中行事は、鎌倉の人々が自然と信仰に触れ、日常の中で大切にしてきていることが感じられる。

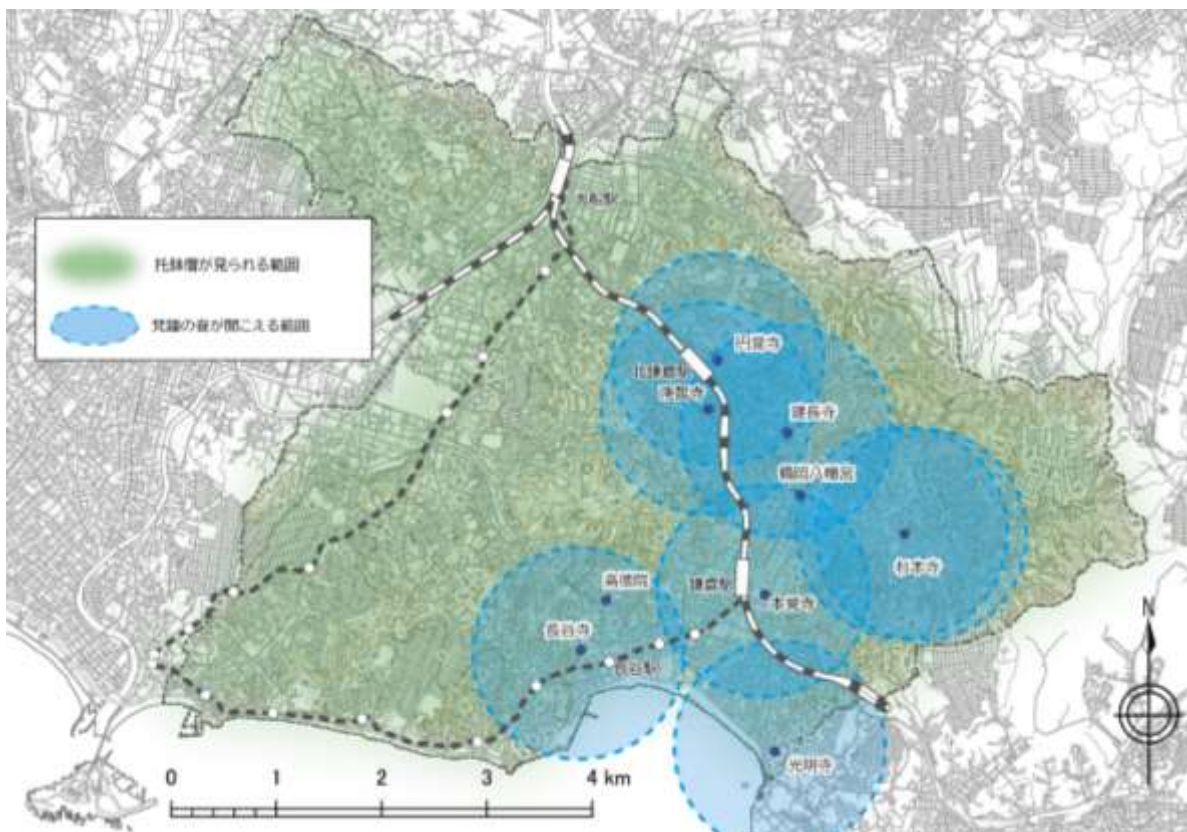


図 0-19 信仰にまつわる活動の市街地への広がり

(イ) 神社における祭礼・行事

鎌倉の神社における祭礼・行事について、その一部を示す。

表 神社における祭礼・行事※

月日		祭礼名	場所
1 月	1 日	さいたんさい 歳旦祭	鶴岡八幡宮ほか
	1～7 日	ごはんぎょうじ 御判 行事	鶴岡八幡宮
	4 日	ちよう な はじめしき 手 斧 始 式	鶴岡八幡宮
	5 日	じよ ましんじ 除魔神事	鶴岡八幡宮
	6 日	はつか ぐら 初 神 楽	八雲神社（大町）
	25 日	はつてんじん ふでくよう 初天神・筆供養	荏柄天神社
	巳の日	はつみ さい 初巳祭	銭洗弁財天宇賀福神社
2 月	午の日	はつうまさい 初午祭	佐助稻荷神社・丸山稻荷社
	17 日	きねんさい 祈年祭	鶴岡八幡宮ほか
4 月	2 日	ゆ い わかみやれいさい 由比若宮例祭	由比若宮
6 月	3 日	くずはらおか 葛原岡神社例祭	葛原岡神社
	第2日曜日	五所神社例祭	五所神社
	30 日	おおはらえ 大 祓	鶴岡八幡宮ほか
7 月	第1日曜日～第2日曜日	てんのうさい 天王祭	こゆるぎ 小 動 神社
	12 日以前の一週間	極楽寺八雲神社例祭	熊野新宮
	第2土曜日から3日間	八雲神社例祭	八雲神社（大町）
	第2日曜日から第3日曜日	八雲神社例祭	八雲神社（山ノ内）
	第2日曜日から第3日曜日	八雲神社例祭	山崎地区集会場
	第3日曜日から一週間	八雲神社例祭	八雲神社（常盤）
	25 日	荏柄天神社例大祭	荏柄天神社
8 月	立秋の前日から9日まで	ぼんぼり（雪洞）祭 立秋の前日：なごしさい 夏越祭 立秋の日：りっしゅうさい 立 秋 祭 9 日：実朝祭	鶴岡八幡宮

月日		祭礼名	場所
	19～21 日	かまくらぐう 鎌倉宮例祭	鎌倉宮
9 月	14 日	あまなわしんめい 甘縄神明宮例祭	甘縄神明宮
	14 日～16 日	例大祭 14 日：はまおりしき よいみやさい 浜降式、宵宮祭 15 日：れいたいさい しんこうさい 例大祭、神幸祭 16 日：やぶさめしんじ 流鏑馬神事 16 日：すずむしほうじょうさい 鈴虫放生祭	鶴岡八幡宮
11 月	23 日	にいなめさい 新嘗祭	鶴岡八幡宮ほか
12 月	16 日	ごちんざきねんさい 御鎮座記念祭	鶴岡八幡宮
	31 日	大祓	鶴岡八幡宮ほか

五所神社の例祭、小動神社の天王祭については、海との関わりが深いため、「海にまつわる歴史的風致」（〇ページ）に記載する。

a 鶴岡八幡宮における祭礼・行事

鶴岡八幡宮は、鎌倉幕府の守護神であり、鎌倉時代に最も重要な施設に位置付けられた神社である。

現在、境内やその周辺市街地では、通年で様々な祭礼・行事が行われている。鶴岡八幡宮は市内でもっとも訪れる人が多い場所であり、これらの祭礼・行事は、市民や来訪者、氏子や参拝者などを問わず数多くの人々が拝観・参列している。鶴岡八幡宮の祭礼・行事をとおして、鎌倉の歴史的風土や古都としての雰囲気を感じることができる。

(a) 正月に関連する祭礼・行事

新しい年が明けたばかりの元日の午前5時より「歳旦祭」が行われる。「歳旦祭」は宮中および全国の神社で行われる年頭の祭儀である。終了後の午前7時から、舞殿にて神楽始式が行われ、八乙女やおとめの舞が奉仕される。

大正4年（1915年）1月1日の鶴岡八幡宮の社務日誌に、「新年一日祭りを歳旦祭と改称し執行す」と記されていることから、50年以上の歴史がある行事であることが分かる。



写真 歳旦祭

1月4日には、「手斧始式」が行われる。手斧始神事式は古来より重要な工事に先立って行われていた。鶴岡八幡宮創建の際にも「造営事始ぞうえいことはじめ」という名で儀式が行われたというが、今日では鎌倉全体の工事始めという意味を込めて執行されている。この行事について、昭和24年（1949年）1月4日の鶴岡八幡宮保管の文献資料に「手斧始式を再興す」とあることから、50年以上



写真 手斧始式

上の歴史があることが分かる。二の鳥居より神職の先導のもと、鳶職の木遣音頭とともに御神木が段葛を進む。御神木は舞殿の祭場に安置され、神職による神事が行われた後、鎌倉の建築業者が儀式の責任者である「検知けんち」他の諸役を奉仕して、中世さながらの道具と所作で儀式を行う。

1月5日には「除魔神事」が行われる。午前10時より舞殿で神事が執行された後、その西側で装束に身を包んだ射手が大的を射る神事で、源頼朝が「御^お的^{まと}始^{はじめ}」「御^お弓^{ゆみ}始^{はじめ}」と称する武家の事始を行ったことに由来する。弓矢には古来より魔を退ける力があるとされる。なお、参拝者の多くが求める破魔矢もこのような信仰と伝統に基づくものである。神事に用いられる的は約156cmで、この神事が別名「^{おおまとしき}大的式」といわれるのはこのためである。この大的の裏に「鬼」という文字を封じ込めて約27mの距離から矢を射込む。その所作は古式に則って厳粛に行われる。この行事について、昭和21年（1946年）1月5日の鶴岡八幡宮所蔵の資料によると、「弓始神事を除魔神事と改称し、執行す」とあることから、50年以上の歴史があることが分かる。



写真 除魔神事

また、元旦より7日までの間、「御判行事」が執り行われている。御判行事とは、御神印^{ごしんいん}を額に押し当てることによって、病氣平癒、厄除、無病息災を祈念するものである。この御神印によって頭脳明晰になるともいわれ、受験を目前にした学生が行事所^{ぎょうじしよ}に並ぶ姿も見られる。この御神印は通常は本殿の奥、御神座近くに奉安されているが、正月の



写真 御判行事

時期に限り、行事所に移される。御神印を受けた人には、牛王宝印神符^{ごおうほういんしんぶ}が授けられる。この神符には神威が込められており、古くは誓約書に使われていたものといわれ、鎌倉時代、戦場に向かう武士も出陣に際して、この御神印を授かったと伝えられている。この行事について、明治12年（1879年）1月3日の鶴岡八幡宮の社務日誌によると、「元始祭を執行す、四日迄御判璽拝戴を執行す」とあることから、50年以上の歴史があることが分かる。

1月15日には、正月に飾ったしめ飾り、古いお札やお守りなどを持ち寄り「お焚き上げ」をする行事、「左義長^{さぎちょう}神事」が行われる。鎌倉では「ドンドンヤキ」、「サイトヤキ」など、地域によって様々な呼び方がある。以前は、市内の各地域にある道祖神^{どうそしん}や庚申塔などの決まった場所で行われていたが、今では、人家が増えたため防火などの理由から、町中ではこのような火焚き行事を行えなくなり、鶴岡八幡宮のほか、鎌倉宮、八雲神社（大町）などの境内や公園で行われている。

この火で焼いた団子を食べたり、火にあたったりするとその年は病気にならない、書初めの紙を燃やした炎が高く上がると字がうまくなるなどといわれている。

一般的には、13日には、米の粉で赤・白・緑の「まゆ玉」と呼ばれる小さな団子を作り、14日の朝に、この団子やミカンを木の枝にさして神棚に供え、「堅く実が結ばれるように」とお参りしたものを15日に左義長の火で焼いて食べる慣わしがある。この行事について、昭和14年（1939年）の鶴岡八幡宮所蔵の資料では、「十四日に行いし古神札焼納祭を左義長神事と改称し執行す」とあり、50年以上前から左義長という名称で行われていたことが分かる。



写真 左義長神事
(昭和38年(1963年))



写真 左義長(神事鶴岡八幡宮提供)

(b) 例大祭

例大祭は、毎年9月14日から16日までの3日間行われる、鶴岡八幡宮における最も大切な祭事である。

『吾妻鏡』²⁴にも文治3年（1187年）8月に「十五日、癸未、鶴岡放生會也、二品御出、（中略）有流鏑馬（15日、鶴岡の放生會なり。二品（源頼朝）御出。（中略）流鏑馬あり）」との記述が残されており、この放生會と流鏑馬の始行が鶴岡八幡宮の例大祭の始まりとされている。

14日の早朝に神職が由比ヶ浜において禊^{みそぎ}を行い、翌日に控えた祭りの執行を大神様に奉告する宵宮祭が行われる。15日の例大祭は、宮司以下神職、巫女、八乙女が奉仕し、大勢の参列者を迎えて厳かに執り行われる。同日の神幸祭では神輿に神様を遷しし、数百m続く行列が若宮大路を歩く。最終日の16日には流鏑馬神事が行われ、多くの参拝者が訪れる。境内には三日間、鎌倉囃子の音が流れ、参道の両側に店が並ぶ。また、茶会や舞踊・武道の奉納もある。

²⁴ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

(i) 触太鼓 (9月12日)

例大祭の2日前、9月12日には「触太鼓」が市内に響き渡る。鶴岡八幡宮において一年で最も重要とされるこの例大祭の開催を広く知らせるため、太鼓を車に積み、神職が鎌倉全域を巡りながら打ち鳴らすものである。かつては牛馬車に太鼓を載せ、道々を練り歩いたという。



写真 触太鼓

鎌倉における宗教的・歴史的中核である鶴岡八幡宮において、重要な祭礼である例大祭の開催を告げる触太鼓の音は、氏子のみならず、地域の人々に、鶴岡八幡宮の神威がまちを巡り、祭りの始まりを知らせる合図となり、鎌倉が神聖な空気に包まれていく。太鼓の音からは、祭事を迎える高揚感や鶴岡八幡宮を中心とした信仰と歴史の連なりを感じることができる。

この行事は、昭和9年（1934年）9月14日の鶴岡八幡宮所蔵の資料に、「例大祭浜降式を再興す、触太鼓を始む、前夜祭を執行す」という記述が残っていることから、50年以上の歴史があることが分かる。

(ii) ^{はまおり}浜降式 (9月14日)

14日の早朝、由比ヶ浜または材木座海岸に忌竹^{いみだけ}2本を立てて注連縄^{しめなわ}を張り、14日の早朝、宮司以下神職が白衣・白袴・白足袋をつけて海岸においてお祓いを行い、海中に入って身を清める禊^もを行う。その後、禊の印として藻塩草^{もしおぐさ}（海藻）を持ち帰り、境内各所に供える。夕方から祭を迎える儀式「宵宮祭^{よいみや}」を行う。



写真 浜降式

浜降式の当日は、鶴岡八幡宮から若宮大路では白い装束に身を包んだ神職の列を、また、海岸では禊の儀式が行われている様子が見られる。前述の昭和9年（1934年）9月14日の鶴岡八幡宮所蔵の資料における記述から、50年以上の歴史がある行事であることが分かる。

(iii) 例大祭（9月15日）

『吾妻鏡』²⁵にも記載のある例大祭は、鶴岡八幡宮において一年で最も重要な祭事である。宮司以下神職と巫女、伶人^{れいじん}・が歩調を合わせ、上宮に参進する。上宮では、宮司以下神職、巫女、八乙女が奉仕し、大勢の参列者を迎えて厳かに神事が執り行われる。神前には鈴虫も供えられ、秋らしい虫の音が響く。鎌倉における鶴岡八幡宮の歴史や存在の重みを感じることができる。

9月16日の鈴虫放生祭では、舞殿において神事が行われたあと、鶴岡八幡宮境内にある柳原神池のほとりに鈴虫が放たれる。生命の尊さや季節に対する感性を大切に守り伝えるために始められた。



図 0-20 例大祭

(iv) 神幸祭（9月15日）

例大祭が行われた日の午後からは、大神様を神輿に遷しして氏子区域を渡御する神幸祭が行われる。氏子が、神輿3基を上宮から担ぎ、宮司以下神職・錦旗^{しんめ}・神馬・高張提灯・太鼓・盾・弓矢などからなる数百メートルの行列が、若宮大路を二の鳥居まで進む。

二の鳥居で御旅所祭が行われる。御旅所祭りでは、8人の少女によって、緑の千早と緋の袴^{ちはや}という美しい姿で、「八乙女の舞」が奉される。昭和33年（1958年）の写真からも、神幸祭が50年以上前から行われていることが分かる。

この行列は、長さが250mほどにもなり、若宮大路沿いを渡る荘厳な行列は、古くから伝わる儀式の重みを伝えるとともに、氏子や地域が一体となって例大祭を盛り立てる活気も感じられる。

²⁵ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。



写真 神幸祭(境内)
(昭和 33 年(1958 年))



写真 神幸祭(あくしゃ
帳舎)



写真 神幸祭(若宮大路)
(昭和 33 年(1958 年))



写真 神幸祭(若宮大路)

(v) やぶさめ 流鏝馬神事 (9 月 16 日)

馬に乗って弓を射ることを「騎射」という。騎射三物（流鏝馬、笠懸^{かさかけ}、犬追物^{いぬおうもの}）のうち流鏝馬は、馬を馳せながら矢を射ることから「矢馳せ馬^{やばうま}」と呼ばれ、時代が下るにつれて「やぶさめ」といわれるようになったと伝えられている。

鎌倉の流鏝馬神事は、『吾妻鏡』²⁶によると、源頼朝が文治 3 年（1187 年）8 月 15 日に鶴岡八幡宮の放生会で奉納した流鏝馬が始まりとされている。

鶴岡八幡宮では現在、4 月の崇拝者大祭にて流鏝馬、9 月の鶴岡八幡宮例大祭において流鏝馬神事が行われている。

まず舞殿で儀式を行い、「馬場入りの儀」として神職の先導で順序・作法を守って馬場を一巡する。その後、鎌倉武士の狩装束に身を整えた射手が、紅白の扇の合図で馬場に駆

²⁶ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

け込み、鏑矢を抜いて約 70m 間隔で 3 か所に立てられた正方形の杉板の的を次々に射抜いていく。続いて装束を軽装に改めた射手により、やや小形の的板を射る平騎射が十数騎十数番行われるのが例である。昭和 34 年（1959 年）の写真からも、例大祭における流鏑馬神事が 50 年以上前から行われていることが分かる。

流鏑馬神事が行われる当日は、鶴岡八幡宮境内に多くの人々が訪れ、一射ごとに歓声が沸き上がり、地域の人々や参拝客の熱気を感じることができる。



図 0-21 流鏑馬神事(例大祭)(昭和 34 年(1959 年))



図 0-22 流鏑馬神事(例大祭)

(c) ぼんぼり（雪洞）祭

毎年立秋の前日から 8 月 6 日から 8 月 9 日まで開催されるぼんぼり祭では、鎌倉市内及び鶴岡八幡宮にゆかりのある文化人や著名人が揮毫した約 400 点の書画が^{きごう}ぼんぼりに仕立てられ、楼門前から大石段、舞殿周辺、参道ほか鶴岡八幡宮境内に掲揚される。

昭和 13 年（1938 年）に鎌倉文士たちの呼びかけにより、夏の間の海水浴客に鎌倉の山側の文化にも親しんでもらおうと、鶴岡八幡宮にぼんぼりを奉納し、並べたのが始まりである。現在も、鶴岡八幡宮では当時文士たちが奉納したぼんぼりの書画が保存されている。昭和 13 年（1938 年）8 月 7 日の鶴岡八幡宮所蔵の資料に「夏越祭を始む、雪洞を掲揚す、宮内省楽部による雅楽奉奏あり」と記述があることから、50 年以上の歴史がある行事であることが分かる。



図 0-23 ぼんぼり祭(昭和 33 年(1958 年))



図 0-24 ぼんぼり祭

日没の少し前に、巫女の手によりそれぞれのぼんぼりにあかりが灯される。すべてのぼんぼりが灯される頃には境内は暗くなり、ぼんぼりを見ようとする多くの人々で賑わい、石灯籠のほのかな明かりに照らされた参道段葛には、境内へと向かう浴衣姿の参拝客が行

き交う。ぼんぼり祭は、鎌倉ならではの夏の風情を感じることができる風物詩の一つであるといえる。

この期間中、鶴岡八幡宮の夏越祭・立秋祭・実朝祭が執り行われる。

立秋の前日の8月6日には、夏を無事に越すことができたことへの感謝を来る秋の豊穡を願う夏越祭が行われる。鶴岡八幡宮の源氏池のほとりで「古式祓」が行われた後、参道で「茅の輪くぐり」を行い、舞殿にて疫病・災禍を払い鎮めて天下泰平・五穀豊穡を祈る。神事では、巫女により「夏越の舞」が奉納される。

立秋の当日には立秋祭が行われる。夏の無事を感謝し、実りの秋の訪れを奉告する祭りである。

実朝祭は、源実朝の誕生日である8月9日に白旗神社にて執り行う祭で、実朝の遣徳をしのぶとともに、文芸に優れた実朝にちなみ、短歌会・俳句会が奉納される。

夏越祭で「茅の輪くぐり」が行われた後も、茅の輪が参道の中心に残され、一般参拝客もくぐることができるため、地域の人を含め多くの人が茅の輪を八の字でくぐる姿が見ることができ、鶴岡八幡宮で行われる神事が、地域の一般の人々にも根付いていることが感じられる。



図 0-25 夏越祭
(昭和 37 年(1962 年)代)



図 0-26 夏越祭



図 0-27 実朝祭

(d) 祈年祭と新嘗祭^{にいなめさい}

祈年祭は、古くは「稔^{みの}り」を表す「とし（年）」を願う祭として「としごいのまつり」と呼ばれていたことから分かるように、春のはじめに一年の五穀豊穡を祈る祭であり、全国各地の神社で行われている。当日は、上宮に氏子などから献納された多くの農作物が供えられ、神事では巫女により「浦安の舞」が奉奏される。明治6年（1873年）3月2日の鶴岡八幡宮の社務日誌に、「祈年祭を執行す」とあることから、50年以上の歴史がある行事であることが分かる。

これに対して、秋の収穫に感謝する祭が「新嘗祭」である。鶴岡八幡宮では、市内の農家から献納された稲をはじめ、野菜や果物などを神前に供え、神様に一年の五穀豊穡を感謝する。新嘗祭の当日は、上宮の楼門内には稲穂を束ねた「懸^{かけ}税^{ちから}」も供えられる。上宮では神職・巫女によって神事が執り行われる。明治8年（1875年）3月2日の鶴岡八幡宮の社務日誌に、「新嘗祭を執行す」とあることから、50年以上の歴史がある行事であることが分かる。

農耕民族であった日本人の精神性の源に通じる「祈年祭」と「新嘗祭」が、重要な神事であることを感じることができる。



図 0-28 祈年祭



図 0-29 新嘗祭

(e) まとめ

鎌倉幕府が開かれてから最も重要な施設に位置付けられていた鶴岡八幡宮は、地域と密接に結びつき、鎌倉を象徴とする存在となっていく。鶴岡八幡宮で行われる祭礼・行事は、古くは武家中心に氏子・崇拝者に大切にされ、近現代になってからは、鎌倉地域全体にも広く認知され、大切にされていることが分かる。

b その他の神社における祭礼・行事

鎌倉に在所ごとに神社があり、地域と密接に結びついている。

境内やその周辺市街地では、様々な祭礼・行事が行われている。これらの祭礼・行事は、氏子や参拝者などを問わず数多くの人々が参加、観覧している。神社の祭礼や行事を通じ、

鎌倉の歴史的風土や古都としての雰囲気や魅力を大いに感じることができる。

(a) 八雲神社（大町）の初神楽

大町の八雲神社では、年のはじめに際し、1月6日、世の平和と氏子の繁栄を願って神楽が奉納される。鎌倉における神楽は、鶴岡八幡宮の職掌^{しきしょう}と呼ばれる神楽男たちにより伝承されてきたが、鶴岡八幡宮が所蔵する文化13年（1816年）に作成された『文化度神器等焼失調書』には、八雲神社（大町）の神主が神楽を行う際に着用する装束も焼失した記録があり、鶴岡八幡宮に所属した神楽男のほかにも神楽を奉仕した神主家があったことが分かる。享徳3年（1454年）の奥書がある『鎌倉年中行事』には、6月7日に鎌倉公方足利成氏^{しげうじ}の屋敷へ八雲神社（大町）の神輿が渡御し、神楽を奏した奉幣の式が行われ、成氏一家は棧敷^{さじき}を構えて7日及び14日にこれを見たとの記載があり、古くから神楽が伝承されていたことがわかる。昭和28年（1953年）に鎌倉市観光協会から出版された『鎌倉大観』には、初神楽の記載がある。

当日境内に設けられた神楽の山は色とりどりの紙垂で飾られ、大釜には湯が沸かされる。

まず社殿内において祭儀が行われた後、神楽へと移る。初神楽の次第としては、祈念の後、打囃^{うちはやし}、初能^{はのう}、御祓^{おはらい}、御幣招^{ごへいまねき}、湯上^{ゆあげ}、中入^{なかいり}、搔湯^{かきゆ}、笹舞^{ささまい}（湯座）、弓祓^{ゆぐら}（射祓^{いはらい}）、剣舞毛止幾^{けんまいもどき}の十座が奉納される。最後の剣舞毛止幾では、舞の中で、ミカンや飴が撒かれる。

初神楽当日は、境内周辺で神楽の笛の音が聞こえるだけでなく、参列者に湯をかけるときやミカン等が撒かれるときの歓声や笑い声も聞こえ、神楽が古くからの行事として地域の人々に親しまれ、楽しまれていることが感じられる。

鎌倉神楽は、市の無形民俗文化財に指定されており、この八雲神社（大町）の初神楽以外では、御霊神社の例大祭でも見ることができる。



写真 掻湯^{かきゆ}



写真 弓祓^{いはらい}



写真 剣舞毛止幾^{けんまいもどき}

表 八雲神社(大町)初神楽での鎌倉神楽の次第

1	うちはやし 打 囃	神楽を執り行うことを神々に祈念し、一通りの楽曲を奏して調子を合わせ、奉仕者、参列者の心をたかめる。
2	はのう 初能	白米を四方に散供し、神楽が滞りなく進行することを祈念し、清めの舞を奉納する。
3	お ほうい 御 祓	斎場の四方と湯釜を祓い、旗を釜の両脇に立て、神酒を注いで清める。
4	ご へいまねき 御幣 招	うぶすなのおおかみ 産土大神・火の神・水の神を招く。舞の後、御幣を振り、神々の恩恵を参列者等に授ける。
5	ゆ あげ 湯 上	清められた湯に笹を浸し、桶に湯を汲んで神前に捧げる。
6	なかいり 中入	神楽の前段を終え、後段の神楽に備える。参列者は神酒を拝戴する。
7	かき ゆ 掻 湯	煮え立つ釜の中を御幣でかき回し、引き抜いた際に跳び上がる「湯玉」で豊凶を占ったという。
8	ささまい ゆ ぐら 笹 舞 (湯座)	湯に笹を浸し、これを振りかける所作を行う。飛び散った湯がかかると、一年間無病息災で過ごせるといわれる。
9	いはらい い ほうい 弓 祓 (射 祓)	四隅に矢を放ち、邪気を射祓う。最後に神座に向けて射定めるが、神座には悪霊がいないため、弦だけ引かれ、矢は収められる。放った矢を授かると運が開けると伝えられる。
10	けんまい も ど き 剣 舞 毛 止 幾	赤と黒の天狗面を付け、鉾を持った「剣舞」が、天下泰平を願い、邪気を払う。黒い山の神の面を付け、大きな杓子を持った「毛止幾」が途中から現れ、天狗の所作を真似るなど、滑稽な動きで笑いを誘い、雰囲気のを和ませる。散供されたみかんを食べると風邪を引かないといわれる。

(b) 荏柄天神社の初天神祭（筆供養）、絵筆塚祭と例大祭

鶴岡八幡宮の北東に位置する荏柄天神社では、1月25日に「初天神祭」という祭事を行い、あわせて筆を焚き上げる「筆供養」が行われている。

荏柄天神社の祭神、菅原道真は学問の神として全国的に信仰され、毎月25日は「天神の日」とされており、その年初めの縁日である1月25日は「初天神」と呼ばれ、合格祈願のお札を求める人や、絵馬を納める人などが多く訪れる。荏柄天神社所蔵の総代山田一

雄の日記として昭和30年頃から昭和50年頃まで書かれた『荏柄天神社日誌』には、昭和32年（1957年）、昭和49年（1974年）にそれぞれ初天神祭や筆供養を行っていたことが分かる記述がある。



写真 初天神祭・筆供養

まず社殿で祝詞奏上などの諸次第を執り行った後、参道にて筆の焚き上げを行う。参道中央に置かれた梅鉢と呼ばれる青銅製の鉢に、参拝者が持参した使い古しの筆を組み、齋主が忌火を点火する。筆の霊を供養し、学力の向上や字の上達を祈る行事である。

同じく筆を供養する祭事として、10月には「絵筆塚祭」が行われる。1月の筆供養とは異なり、昭和・平成の時代に活躍した「漫画家集団」ゆかりの「かっぱ筆塚」と「絵筆塚」の前で祭事が行われる。鳥居から続く旧参道には、毎年漫画家諸氏が奉献する「まんが絵行灯」が並び、日暮れからは点灯して、参道を温かく照らす。境内では、漫画家による似顔絵ブースやかっぱ絵コンクールなどの催しも行われる。当日は、特別な神事を見ようと多くの人が参詣する姿が見られる。

また、同社の例大祭は、毎年7月25日に行われる祭典と直近日曜日の神幸祭からなる。神職と氏子崇敬者により、神恩感謝と地域安寧の祈りが捧げられる祭事である。

同社の神輿は、かつて二階堂にあった熊野神社の神輿が享保4年（1719年）に引き継がれたもので、境内を出御してから覚園寺、瑞泉寺、第二小学校裏を通る。『荏柄天神社日誌』（山田一雄総代）には、昭和47年（1972年）7月23日に神輿の出る様子や同年7月25日には、例祭が盛大に行われたことが分かる記述がある。鎌倉らしい社寺や自然を背景に神輿が練り歩く姿からは、この祭りならではの活気や伝統を感じることができる。



写真 絵筆塚祭



写真 絵筆塚祭



写真 荏柄天神社例大祭

(c) 銭洗弁財天宇賀福神社の初巳祭

巳の日は弁財天の縁日である。銭洗弁財天宇賀福神社において一年の初めの巳の日に行われる初巳祭では、金運上昇や商売繁盛などを願う参拝者により境内が賑わう。人々は社務所で線香とろうそくの入ったざるを受け取り、社に参拝した後、洞窟内の霊水で銭を洗って帰る。霊水で洗った銭を有効に使えば、銭が数倍に増えて手元に戻ってくるといわれる。

切り立った崖と深い谷に囲まれた鎌倉特有の地形の中、岩盤をくり抜いた洞窟で行われるこの習わしは、自然と信仰が融合した鎌倉らしい光景を生み出しており、訪れた人が神

聖な静けさの中で銭を洗う姿を見ることができる。

昭和 46 年（1971 年）に発行された御所見直好著の『鎌倉祭事記』には、初巳祭に関する記述があり、50 年以上の歴史がある行事であることが分かる。

(d) 丸山稲荷社・佐助稲荷神社の初午祭^{はつうまさい}

京都の伏見稲荷大社を御本社に仰ぐ全国の稲荷社では、春の農作業開始を前にして、2 月の初午の日に豊作を祈願し、巫女の舞を奉納する「初午祭」が行われる。鎌倉市では、佐助稲荷神社や丸山稲荷社の初午祭において氏子や崇敬者で賑わう。



写真 丸山稲荷社 初午祭

丸山稲荷社では、厳かな祝詞奏上や、神様への捧げ物などの神職による神事が行われた後、巫女によって神楽が奉納される。境内にあるのぼり旗やきつねの赤い胸当てはこの日に新しいものに替えられる。また、佐助稲荷神社では、神職による神事、神楽の奉納が行われる。

当日の境内周辺では、神楽の音楽が鎌倉の自然に溶け込み、鎌倉ならではの厳かな空気を感じることができる。

昭和 43 年（1968 年）に鎌倉市観光協会が発行した『鎌倉の年中行事』には、丸山稲荷社及び佐助稲荷神社の初午祭の記載があり、50 年以上の歴史がある行事であることが分かる。

(e) 由比若宮の例祭

由比若宮では 4 月 2 日には氏子等の参列のもとで例祭を行っており、祭主は鶴岡八幡宮の宮司以下神職が奉仕する。

明治 39 年（1906 年）4 月 3 日の鶴岡八幡宮の社務日誌に、「由比若宮例祭を執行す」とあることから、50 年以上の歴史がある行事であることが分かる。



写真 由比若宮例祭

普段は、材木座のまちの中にひっそりとたたずむ由比若宮だが、この日は氏子等が多く集まり、神事の厳粛な空気を感じることができる。

(f) 葛原岡神社の例大祭

葛原岡神社では、日野俊基の命日である 6 月 3 日にあわせて例大祭が行われる。本殿で祝詞を読み上げる神前祭と、日野俊基墓前で祝詞を読み上げる墓前祭が行われる。

6 月の第一日曜日には、触太鼓・神職・唐櫃^{からびつ}・役員・手子舞・山車・子供神輿・大人神

輿の行列が、由比ガ浜・佐助周辺を渡御する。太鼓が鳴り響き、行列や神輿が渡御する様子は神社の由来や伝統を感じられるとともに、周辺地域の一大行事として、まちが一体になり祭りを盛り上げる熱気も感じることができる。前日の土曜日には、宵宮祭として、神輿の夜間渡御も行われる。



写真 葛原岡神社例大祭
(昭和 50 年代)

昭和 28 年（1953 年）に鎌倉市観光協会から出版された『鎌倉大観』にも、当時から葛原岡神社の例大祭が行われていたことが記載されており、古くからの伝統的な祭りであることが分かる。

葛原岡神社の例大祭を皮切りに、鎌倉の各地で夏の祭りが始まる。

(g) ^{てんのう}天王祭（^{ぎおん}祇園祭）

市内に数か所ある八雲神社に代表されるように、鎌倉には^{ござてんのう}牛頭天王やスサノオノミコトを祀る神社が多く見られ、夏には各所で祇園祭（天王祭）が行われる。鎌倉地域では「お天王さん」といえば神輿のことである。神輿の巡行にあわせて歌われる「天王唄」は、鶴岡八幡宮創建の際に「伊勢音頭（^{きやり}木遣音頭）」を唄いながら用材を浜から運んだことに端を発し、今に唄い継がれているといわれている。

祇園祭の行われる旧暦 6 月は^{えきびょう}疫病流行の兆しをみせる時であり、また、農村では稲に害虫が付きやすい時期でもある。このころに牛頭天王をまつり、鎮めようとしたのが始まりである。

なお、牛頭天王とスサノオノミコトは同一視されており、現在、市内では複数の八雲神社や腰越の小動神社などがスサノオノミコトを祭神としているが、その中で現在も続いている代表的な祭は次のとおりである。

なお、小動神社の天王祭については、海との結び付きが深いことから、「海にまつわる伝統行事にみる歴史的風致」（○ページ）において記載する。

(i) 熊野新宮の八雲神社（極楽寺）例祭

7 月に入ると、八雲神社（極楽寺）例祭のため極楽寺地区は神輿一色の 1 週間を迎え、内 3 日ある神輿渡御の際には、多くの担ぎ手が「ドッコイ・ドッコイ」と掛け声を挙げ、太鼓の音も相まって大いに賑わう様子にこの地域ならではの夏の訪れを感じることができる。

明治 35 年（1902 年）発行の『鎌倉大観』にも、熊野新宮の八雲神社（極楽寺）例祭は記載されており、50 年以上の歴史がある行事であることが分かる。

(ii) 八雲神社（大町）神幸祭

八雲神社例祭で執り行われる「神幸祭」は、古くは7月7日と14日の両日に行われていた。享徳3年（1454年）の奥書がある『鎌倉年中行事』には、6月7日に鎌倉公方足利成氏の屋敷へ神輿が渡御し、神楽を奏した奉幣の式が行われ、成氏一家は棧敷を構えて7日及び14日にこれを見るとの記載があり、室町時代には既に執り行われていたと考えられる。



写真 八雲神社例祭(大町)
神幸祭

現在の行列は、囃子車（鎌倉囃子）、大太鼓、猿田彦、神主、総代、一番神輿の順に行列をなし、この地域を練り歩いた後、辻の神酒所で待機していた3基の神輿とともに4基の神輿が神社へと進んでいく。この際に氏子の乳幼児が保護者に抱かれて神輿の下をくぐり、無事な成長を祈願する「みこしくぐり」の信仰が今も行われている。

夜になると4基の神輿は独特の「神輿ぶり」を披露することとなる。お祓いを受けた揃いの裃姿の担ぎ手によって、掛け声とともに提灯を付けた4基の神輿は勢いよく進み、途中一旦停止した4基の神輿が横一列になって再び動き出す。担ぎ手も拝観する者も「悪疫退散招福繁盛」が約束されると語り継がれている。4基の神輿が連結する勇壮華麗な様は全国でも珍しく、鎌倉らしい夏の風物詩として、この地域ならではの賑わいを感じることができ、訪れる人々を楽しませている。

(iii) 八雲神社（山ノ内）例祭

山ノ内の八雲神社は、もとは「牛頭天王社」と称したと伝わり、例祭は、中断されていた時期もあったが、昭和42年（1967年）ごろから再開した。古くから山崎の八雲神社の神輿とともに巡行していたことから「出合い祭」、^{ゆきあいまつり}「行合祭」などと呼ばれ、7月中旬に行われている。『新編相模国風土記稿』の明治8年（1875年）の写本にも例祭に関する記述がある。

山ノ内の神輿は男神輿、山崎の神輿は女神輿と称され、それぞれの地域を出発した後、北鎌倉駅前で出会う。しばらく山崎側にともに進み、神職による「出合い神事」が行われると、山崎の神輿に腹帯が巻かれる。神事が行われた後、また2基は共に進み、山ノ内の神輿が山崎の神輿を^{こぶくろや}小袋谷まで見送ると、それぞれの地域に戻って行く。2基の神輿が出会うと、神輿の掛け声はより一層大きくなり、大勢に囲まれた2基の神輿を担ぎ手が左右に大きく揺らす光景を見ることができ、普段は閑静な住宅街が広がるこの地域が、例祭によって高揚感で包まれる様子が感じられる。

古くは御霊神社と同様に^{めんかけ}面掛行列が行われていたことから、これに用いられていた市面

と衣装（市指定有形民俗文化財）が伝わっており、例祭に併せて面の展示が行われていた。令和5年（2023年）からはこれらの面の複製を用いて面掛行列が行われるようになった。



写真 神輿の出会い



写真 女神輿(左)と男神輿



写真 面の展示

(iv) 八雲神社（常盤）例祭

毎年7月に開催される常盤の八雲神社の例祭は、古くから継承される地域に根差した祭りであり、宵宮祭と本祭が行われる。『新編相模国風土記稿』の明治8年（1875年）の写本にも例祭に関する記述がある。

境内の石段に地元の子供会が制作した灯籠が飾られ、夜道を照らす。また、子供神輿と大人神輿が町内を練り歩き、多くの露店で賑わう様子に祭りの活気を感じられる。

(h) 鎌倉宮の例祭

例祭は鎌倉宮の最も重要な神事で、祭神護良親王が亡くなった日にちなみ8月19・20日に執り行われる。例祭の前夜に例祭前夜祭を行う。例祭後は例祭が無事に執り行われたことを祭神へ感謝を伝える神事である後鎮祭を行う。昭和41年（1966年）の写真から、50年以上前から例祭が行われていたことが分かる。

また、夜には地域の人々による盆踊りや楽市、バザーが開催され、20日の昼のみ琵琶や琴・剣道などの奉納がある。特に盆踊りでは賑やかな音楽、人々のかけ声などが境内の外まで響きわたり、祭りの活気を感じられる。



写真 鎌倉宮例祭 寄付者一覧
（昭和41年(1966年)）



写真 鎌倉宮例祭 盆踊り

(i) 甘縄神明宮例祭

長谷の鎮守である甘縄神明神社の例祭では、長谷町内の各所にお神酒所が設けられ、神輿が据えられる場所もある。毎年、9月7日に^{かりや}假屋祭として、旧長谷消防署の横にお假屋を設け、神輿の前で式典を行う。その後、長谷の東町、新宿、上町、仲町、大谷戸の5つの町内のお神酒所を祓って回る。例祭は、例年9月7日から14日にかけて行われるが、近年では9月の第2日曜日に神輿が町内を巡行するのが通例となっている。前日の夕方には子供たちの囃子が響き、夜には氏子による囃子が演奏され、露店が立ち並び、ぼんぼりが連なる様子は祭りの高揚感を引き立てる。昭和45年（1970年）の写真から、50年以上前から例祭が行われていたことが分かる。

神輿渡御の当日は、神輿は長谷の大通りを進み、由比ガ浜や坂ノ下の境、大仏のトンネルあたりまで進んだ後、再び神社へと戻る。子供たちが引く、花飾りを施した山車も祭りを彩る。神輿のかけ声が響き渡り、神輿に飾られたぼんぼりが人々の顔やまちを照らす様子は長谷の風景を一変させ、祭りの賑やかさを感じられる。

c まとめ

鎌倉の神社で行われる祭礼・行事は、氏子や地域の人々が深く関わっており、神社にとどまらず、その地域をあげての行事となっている。こうした祭礼や行事が行われている光景は、市内各所に神社があり、地域と密接な関係を築いてる鎌倉ならではの風景である。



写真 甘縄神明宮例祭のぼんぼり
(昭和45年(1970年))



写真 甘縄神明宮例祭
神輿渡御

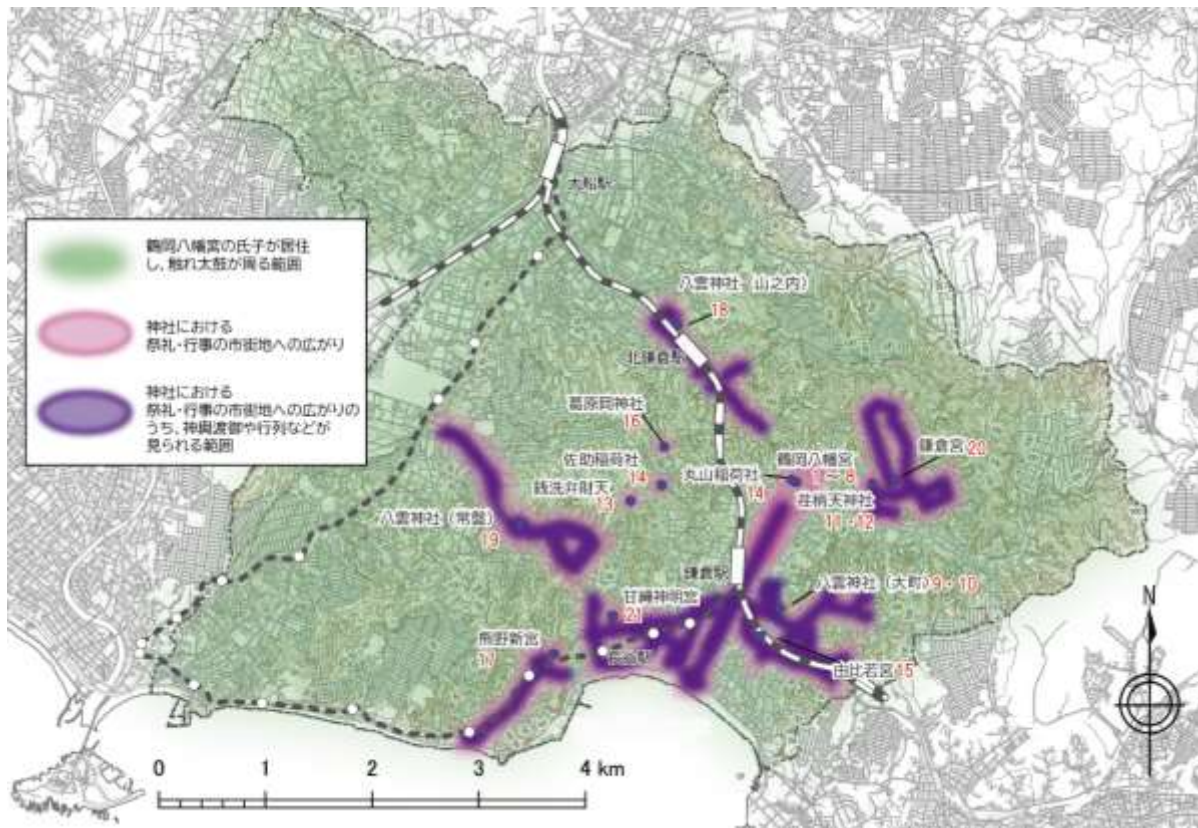


図 神社における活動の市街地への広がり

図中の祭礼・行事の図中番号・図中記号は表〇〇・〇〇に対応している

表 神社における祭礼・行事の図中番号一覧

神社名称	祭礼・行事名称	図中番号
鶴岡八幡宮	歳旦祭	1
	御判行事	2
	手斧始式	3
	除魔神事	4
	ぼんぼり祭	5
	例大祭☆	6
	新嘗祭	7
	祈年祭	8
八雲神社（大町）	初神楽	9
	八雲神社例祭☆	10
荏柄天神社	初天神祭・筆供養	11
	荏柄天神社例大祭☆	12
銭洗弁財天宇賀福神社	初巳祭	13
佐助稲荷神社・丸山稲荷社	初午祭	14
由比若宮	由比若宮例祭	15
葛原岡神社	葛原岡神社例祭☆	16
熊野新宮	極楽寺八雲神社例祭☆	17
八雲神社（山ノ内）	八雲神社（山ノ内）例祭☆	18
八雲神社（常盤）	八雲神社（常盤）例祭☆	19
鎌倉宮	鎌倉宮例祭	20
甘縄神明宮	甘縄神明宮例祭☆	21

☆が付いている行事は図中に神輿や行列の経路を示している。

(ウ) 寺院における行事

寺院における行事について、一部を示す。

表 寺院における行事等

月日		祭礼名	場所
1 月	13 日	ごまだくよう 護摩焚き供養	こくうぞうどう 虚空蔵堂
	16 日	えんま えんにち 閻魔縁日	えんのうじ 円応寺
	22 日	たいしこう 太子講	ほうかいじ 宝戒寺
	28 日	はつふどう 初不動	みょうおういん 明王院
4 月	4 日	ときむねこうまいさいき 時宗公毎歳忌	円覚寺
	8 日	こうたんえ 降誕会（花まつり）	各寺
	8 日	にんしょうとう 忍性塔特別参拝	極楽寺
5 月	16 日	えんま 閻魔縁日	円応寺
	23～24 日	開山毎歳忌	建長寺
6 月	16 日	ずいけん 瑞賢忌	建長寺
7 月	15 日	かじわらせがき 梶原施餓鬼	建長寺
	23～24 日	地藏まつり	宝戒寺
8 月	10 日	くろ えんにち 黒地藏縁日	覚園寺
	10 日	しまんろくせんにちまい 四万六千日詣り	安養院・杉本寺・長谷寺
	16 日	えんま 閻魔縁日	円応寺
	旧暦 7 月 15 日	せがきえ 施餓鬼会	各寺
10 月	2～3 日	かいさんこくし まいさいき 開山国師毎歳忌	円覚寺
	12～15 日	じゅうや お十夜	光明寺
	13 日	えしき お会式	日蓮宗の各寺
11 月	文化の日を含む 3 日間	ほうもつかざい 宝物風入れ	建長寺・円覚寺
12 月	18 日	歳の市	長谷寺

a 禅宗寺院における祭礼・行事

鎌倉時代後期に伝来する禅宗は鎌倉幕府の保護を受け、鎌倉で発展する。京都に先立ち、建長寺が中国の五山制度に倣い、五山の1つとなり、その後、室町時代の元中・至徳3年(1386年)、足利義満が京・鎌倉五山の制度を定め、これに移行していく。これらの社寺は、いつの時代も権威と威厳をもって脈々と鎌倉の文化を支え、継承してきた。境内地は公開されており、数々の講座も開催される。境内では1年を通じ様々な仏教行事が行われており、住民や来訪者、参拝者などを問わず数多くの人々が観覧している。こうした人々は、それらを通じ、鎌倉の歴史的風土や古都としての雰囲気や魅力を大いに感じている。

(a) 建長寺・円覚寺における開山毎歳忌・開山国師毎歳忌

5月23日と24日に建長寺で行われる「開山毎歳忌」は、開山の蘭溪道隆の法要で、23日の午前10時には、山門の楼上で羅漢講式という特別法要が行われる。午後2時になると、梵鐘の鐘の音が響いて全山の僧が仏殿に集まり、読経が始まる。安置されている蘭溪道隆像を輿に乗せて白衣の8人が担ぐ。御詠歌講中の御詠歌が唱えられ、たくさんの信者が手を合わせ、見守る中を、僧衆の鳴らす銅鈺鼓や太鼓などの楽奏の先導で、僧の行列が静かに奥の法堂に蘭溪道隆像を運び入れる。

24日には法要に引き続き、方丈で正式な食作法による「四ツ頭」の斎座が厳かに執り行われる。また、「万人講施餓鬼会」も営まれる。新盆の家の霊や先祖の霊を慰めるもので、多くの参拝者が訪れる。午後になると、僧が法堂に揃い、堂内外の鐘が高く低く響く「打ち合わせ」の後、読経が行われ、前日と同じように蘭溪道隆像を法堂から仏殿に戻す。昭和45年(1970年)の写真から、昔から開山毎歳忌が行われていたことが分かる。

円覚寺で行われる「開山国師毎歳忌」は、円覚寺開山の無学祖元を供養する法要で、10月2日から3日に行われる。10月3日には本山や末寺から多くの僧や信者が集まり、舍利殿や仏殿で無学祖元の法要を盛大に行う。10時前になると国宝の洪



写真 開山毎歳忌(建長寺)

写真 開山毎歳忌(建長寺)
(昭和45年(1970年))

写真 開山国師毎歳忌(円覚寺)

鐘^{かね}が打たれ、法要の始まりを告げる。法要は、まず、舍利殿で楞嚴呪^{りょうごんしゅ}という経を歩きながら唱える行道が行われ、仏殿に移動し、また読経を行う。その後、方丈で、無学祖元の掛け軸を掲げて霊膳をお供えし、参列した僧が開山とともに厳粛に会食する、「四ツ頭」という儀式を行う。

昭和 46 年（1971 年）発行の御所見直好著の『鎌倉祭事記』には、当時から建長寺及び円覚寺が開山忌を行っていたことが分かる記載がある。

(b) 円覚寺の洪鐘^{おのがね}弁天大祭

円覚寺の洪鐘弁天大祭は 60 年に一度、原則として庚子^{かのえね}の年に開催される伝統的な祭礼である。『快元僧都記』^{かいげんそうずき}の「天文九年三月六日条」（1540 年）によると、古くは文明 12 年（1480 年）に行われていたことが記録されている。近年では、令和 5 年（2023 年）に開催された。



写真 洪鐘弁天大祭
(令和5年(2023年))

洪鐘の鑄造成功に感謝した北条貞時は、円覚寺に弁天堂を建立し、江島神社の弁財天を勧請して円覚寺の鎮守とした。円覚寺と江島神社の弁財天は「夫婦弁天」と称され、弁財天と洪鐘を祀る洪鐘弁天大祭では円覚寺と地域の人々に加えて江島神社も参加する。

洪鐘弁天大祭では円覚寺弁天堂に祀られている弁財天の御神体を乗せた山ノ内八雲神社の大神輿が、鎌倉街道沿いを練り歩く。その他にも、稚児行列、面掛行列、洪鐘の張子、地元小学生の行列など、様々な団体が参加し、壮大なパレードを繰り広げる。特に、面掛行列は、明治時代の祭礼の様子を描いた明治 34 年（1901 年）成立の『円覚寺弁天堂洪鐘祭行列図（板絵）』にも描かれており、歴史的な風情を感じさせる。

(c) 建長寺・円覚寺における宝物風入れ

宝物風入れは、毎年 11 月 3 日の「文化の日」の前後に、建長寺と円覚寺で行われる恒例行事で、両寺の宝物を、虫干しを兼ねて一堂に展示する。宝物風入れの起源は、江戸時代までさかのぼると伝わる。

なお、鎌倉国宝館が寄託を受けている宝物については、この期間両寺に返却されるが、『鎌倉国宝館庶務日誌』の昭和 5 年（1930 年）11 月 14 日の項に「円覚寺宝物風入ニ陳列ノタメ…自働車ヲ雇ヒ左記ヲ同寺ニ運搬セシム」、同月 17 日の項に「宝物風入ノタメ一時返戻シタル国宝ヲ再ビ本館ニ搬入ス」と詳細な記述があることから、鎌倉国宝館の建設当初から同様のやりとりが行われていたことが分かり、社寺と博物館が連携してきた歴史をたどることができる。

期間中、建長寺では、創建以来 750 年にわたる国宝、重要文化財など宝物約 150 点の展示を行い、円覚寺では収蔵している数百点の文化財の展示と「国宝舍利殿特別公開」を行っている。人々は、展示されている国宝・文化財などの宝物の豊富さにより、臨済宗本山である二つの寺院の存在感を実感できるとともに、鎌倉における禅宗の歴史を再認識できる。



写真 宝物風入れ(建長寺)



写真 宝物風入れ(円覚寺)

b 鎌倉の寺院におけるその他の仏教行事

(a) 護摩焚き供養

虚空蔵堂では、虚空蔵菩薩を本尊として毎年1月13日に初護摩焚きと呼ばれる護摩焚き供養を実施している。

初護摩焚きは、11時と14時の2回にわたって約30分ずつ厳修している。申し込みをした参拝者の護摩札を加持し、1年の安泰、知恵と福德を願い、煩惱の浄化と仏の加護を祈る。通常非公開である本尊が身近に感じられる貴重な機会となる。



写真 初護摩焚き

堂外にも読経と護摩の炎の気配が漂い、通りすがりの人々も自然と足を止める様子が見られ、静かな日常の中に立ち現れる神聖な空気を感じることができる。

昭和46年(1971年)発行の御所見直好著の『鎌倉祭事記』には、初護摩焚きの記載があり、50年以上の歴史がある行事であることが分かる。

(b) 閻魔縁日

円応寺では、毎年1月16日、5月16日、8月16日に「閻魔縁日」が営まれている。地獄の蓋が開くとされるこの日に、檀家や信者によって執り行われ、餓鬼道に堕ちた霊を供養する法要となる。1月16日は大般若会、5月16日は大施餓鬼会といい、多くの僧が本堂に集まり儀式が行われる。8月16日は水施餓鬼会といい、^{きょうぎとうば}経木塔婆を桶に供え、水をかけて先祖供養を行う。閻魔縁日

の日には、読経の声が木立のあいだから聞こえ、境内に入らずとも閻魔王坐像を祀る寺ならではの伝統が感じられる。

昭和46年（1971年）発行の御所見直好著の『鎌倉祭事記』には、閻魔縁日の記載があり、50年以上の歴史がある行事であることが分かる。



写真 閻魔縁日

(c) 太子講

聖徳太子は、仏教の興隆に尽くすとともに、飛鳥時代における国家制度や文化の基礎を築いた人物である。その中でも、特に法隆寺の建立をはじめとする寺院建築に深く関わり、建築・木工・彫刻などの技術者集団の精神的支柱とされてきた。以来、太子は工匠の神と仰がれ、とくに社寺建築に関わる職人の間で篤い信仰を集めるようになった。

宝戒寺では、毎年1月22日に太子講が開かれ、地域の職人や商工関係者を中心に、技術の向上・商売繁盛・家内安全を願う護摩供養・読経・木遣唄の奉納が行われている。堂内に充満する香煙と読経・木遣唄の響きは、信仰と技術が交わる場としての深い意味合いを帯びている。門前にまで香の匂いが立ちこめ、古くからの伝統が感じられる。昭和43年（1968年）の写真からも、昔からの行事として地域の人々を含めて大切にされていたことが分かる。



写真 太子講(昭和43年(1968年))



写真 太子講

(d) 初不動

明王院では、不動明王の縁日である毎月 28 日に本堂で護摩焚き供養が行われている。中でも 1 月 28 日の護摩焚き供養は初不動と呼ばれ、一年の無事や息災を祈り、護摩の炎で御加持された護摩札を求めて多くの人々で境内が賑わう。

明王院は、鎌倉幕府の祈願所として鎌倉時代から護摩焚き供養が行われてきた。昭和 46 年（1971 年）の御所見直好著の『鎌倉祭事記』にも初不動が紹介されている。

護摩焚きの熱気や経を読む声、人々の活気が門前にも広がり、長く受け継がれてきた祈りのかたちが、今もこの場所に息づいていることを感じられる。



写真 護摩焚き供養の様子



写真 初不動の様子

(e) 降誕会

降誕会は「花まつり」・「^{かんぶつ え}灌仏会」・「^{ぶっしょう え}仏生会」・「^{りゅうげ え}竜華会」・「^{たんじょう え}誕生会」などといい、釈迦が生まれた 4 月 8 日に各寺院で行われる。この行事は、釈迦が生まれたときに天から竜が下って来て^{こうとう}香湯へ入浴させたという伝説がもとになっている。寺では^{はな み どう}花御堂という様々な花で飾った小さいお堂を作り、その中に甘茶をたたえた水盤を置き、中央に誕生したときの姿の釈迦像を安置する。参詣者はその釈迦像に甘茶をかけて入浴させる。寺ではたくさんの甘茶を作り、参詣者に分ける。

鎌倉の寺院の中では、極楽寺の花まつりが特に著名である。

極楽寺においては、花まつりに併せ、奥ノ院にある極楽寺開山の墓である重要文化財「忍性塔」の特別公開を行っている。本堂の裏を出て住宅街を進み、階段を上った丘の上に忍性塔がある。忍性塔は高さ 3.9m の大型の五輪塔で、参拝者からはその大きさを見て



写真 降誕会 花御堂(極楽寺)

感嘆の声が挙がる。特別公開の日には、山門前に「開山御廟特別参拝」「本尊御開帳」と書かれた大きな看板が出て、多くの参拝者が極楽寺の山門をくぐる光景を見ることができ、極楽寺の歴史と伝統を感じられる。

昭和 28 年（1953 年）に鎌倉市観光協会から出版された『鎌倉大観』にも、極楽寺や宝戒寺の花まつりについて記載されており、昔から鎌倉で行われてきたことが分かる。

(f) 地蔵まつり

宝戒寺では、毎月 24 日に所願成就を祈念し、願い事を記した護摩木を焚く本尊地蔵尊護摩供を行っている。中でも 7 月 24 日は本尊地蔵尊護摩供だけでなく、本尊地蔵大施餓鬼会が行われ、読経や法要の声が境内に響く。当日は山門の外にも護摩焚きの匂いが漂い、読経の声が響き、道行く人々にも静かな祈りの場の気配が感じられる。

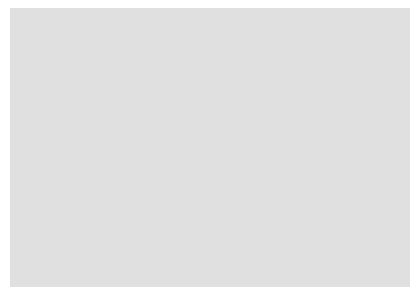


写真 地蔵まつり

昭和 28 年（1953 年）に鎌倉市観光協会から出版された『鎌倉大観』にも地蔵まつりの記載があり、昔から行われてきた行事であることが分かる。

(g) 施餓鬼会・黒地蔵縁日

餓鬼とは仏教上の言葉で、生前欲張りで食べるように食べていた人が死ぬと行くといわれている餓鬼道に生まれ変わった者をいう。餓鬼は常に飢えと乾きに苦しみ、食べ物や飲み物を手に取ると火に変わってしまうので決して満たされることがないといわれる。そのような餓鬼や、供養する人がおらず無縁となった霊に食べ物や飲み物を施し、経をあげる法要を「施餓鬼会」という。



写真 覚園寺 黒地蔵縁日
(昭和 42 年(1967 年))

施餓鬼会の日、寺では施餓鬼壇に亡くなってから初めて迎える新盆の人の位牌と、先祖代々や無縁仏の位牌を飾り、新鮮な野菜や果物をあげて供養する。新盆のときは三角の袋に米を入れ、ほかに麻ひも・ぞうり・扇子をこの世に戻る旅の支度として備えるところもある。

鎌倉では、8 月 10 日に「黒地蔵縁日」として行われる、覚園寺の施餓鬼会が特に著名である。同日、黒地蔵（重要文化財木造地蔵菩薩立像）の縁日も行われる。昭和 42 年（1967 年）の写真から、50 年以上前から黒地蔵縁日が行われていることが分かる。「くらやみ参り」とも呼ばれ、真夜中に、黒地蔵が祀られている地蔵堂で、亡くなられた方々の

冥福と現在生きている我々の健勝を祈願する法要が行われる。大きな香炉に参拝者の捧げる線香の煙が盛んに上がる。お参りは早いほど良いといわれており、暗いうちから朝参りをする人々の列を見ることができる。お堂の奥に、^{しゃくじょう}錫杖と^{ほうじゅ}宝珠を持って立っているこの黒地蔵は、地獄に堕ちた罪人の苦しみを少しでも和らげようと、地獄の役人に代わって火を焚いたといわれ、そのために黒くすすけていて、いくら彩色しても一夜のうちに黒くなってしまうと伝えられており、「火焚き地蔵」とも呼ばれている。

(h) 四万六千日詣り

室町時代以降、月に一日設けられた「功德日」と呼ばれる縁日に参拝すると観音菩薩の多大なご利益が得られるとの信仰が広がり、特に千日分の功德が受けられるとされた旧暦7月10日の参拝は「千日詣り」と呼ばれた。さらに江戸時代になるとその御利益は四万六千日（約126年分）に相当するといわれるようになり、現在の鎌倉では、8月10日になると、早朝から杉本寺、長谷寺、安養院等をはじめとする市内の観音霊場を巡礼する「四万六千日詣り」を行う多くの人々を見ることができる。



写真 四万六千日詣り
(長谷寺)

昭和46年（1971年）刊行で御所見直好著の『鎌倉祭事記 史都の行事めぐり』に、四万六千日詣りに関する杉本寺、長谷寺、安養院の記載があり、50年以上前から行われていることが分かる。

(i) お^{じゅうや}十夜

お十夜は、10月12日の午後から15日の朝まで続けられる盛大な念仏会^{ねんぶつえ}で、鎌倉では光明寺で行われる。

「お十夜」は、もともとは宮中で行われる行事であったが、光明寺の観譽祐崇が、宮中での十夜法要を勤めたことにより、後土御門天皇が光明寺で十夜法要を行うことを許したものである。



写真 お十夜
(昭和49年(1974年))



写真 お十夜(現在)

この十夜法要は平安時代に唐から比叡山に伝わったもので、「人間の住む世の中で、十日十夜の間念仏を唱えれば、仏の住む極楽にいて千年間修行を实践するよりもまさる。」という念仏会の教えを基にするものと考えられている。

昭和 49 年（1974 年）の写真から、50 年以上前から行事が行われてきたことが分かる。

光明寺の「お十夜」は特に著名で、12 日午後の献茶に始まり、15 日朝の結願法要で終わる。その間に様々な法要や説経、施餓鬼会や練行列、雅楽奉奏や稚児礼讃舞などが行われ、境内には露店が並び、光明寺の歴史と行事の活気を感じられる。

（j）歳の市

長谷寺では、本尊である十一面観音菩薩立像の 1 年の最後の縁日あたる、12 月 18 日に納めの観音として「観音御足参り」を行っており、この日は、1 年でこの日のみ、観音堂内陣に入り、長谷寺の本尊である十一面観音菩薩立像の足に触れ、お参りすることができる。

また、参道では、神棚、だるま、暦、熊手などの縁起物を中心とした正月用品などが売られる歳の市が行われる。かつては、鶴岡八幡宮などでも行われていたが、現在鎌倉市内に残るのは、長谷寺のみである。

1 年の締めくくりとして、参詣する人や歳の市で縁起物を買求める人が多く訪れ、年の瀬の活気を感じさせる鎌倉の冬の風物詩であり、鎌倉市教育委員会から昭和 46 年（1971 年）に刊行した『としよりのはなし』の中でも、歳の市が往時より大変な賑わいであったことが語られている他、昭和 38 年（1963 年）の写真からも、50 年以上前からだるまや熊手などが売られていたことが分かる。



写真 歳の市
（昭和 38 年（1963 年））



写真 歳の市

c まとめ

鎌倉時代に伝来した禅宗をはじめ、古くから鎌倉の文化や信仰を守り続けてきた寺院で行われる仏教行事は、鎌倉に住む人々や参拝者など多くの人に親しまれ、大切にされている。

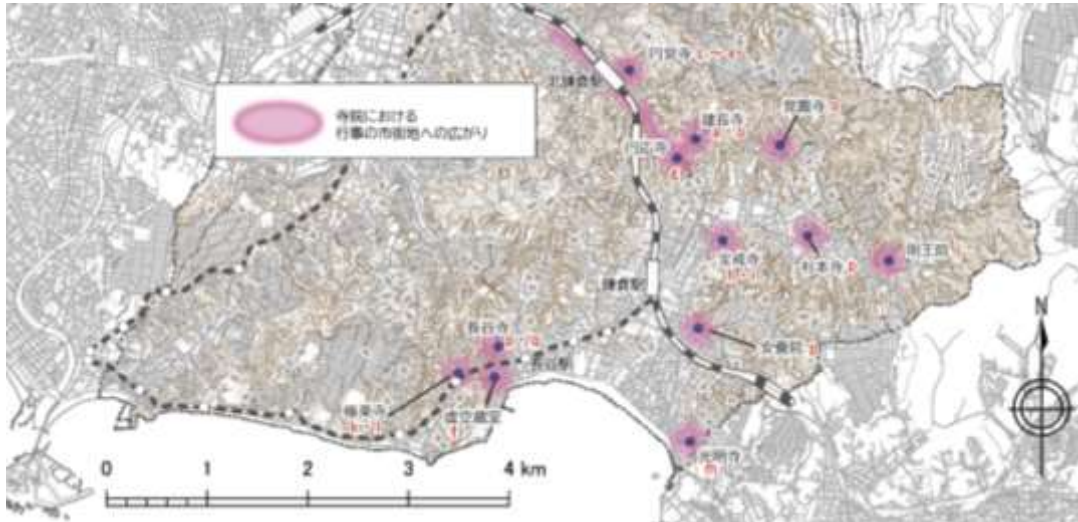


図 寺院における活動の市街地への広がり

図中の祭礼・行事の図中番号・図中記号は表○・○に対応している

表 寺院における行事の図中記号一覧

寺院名称	祭礼・行事名称	図中記号
建長寺	開山毎歳忌	a
	宝物風入れ	b
円覚寺	開山国師毎歳忌	c
	洪鐘弁天大祭	d
	宝物風入れ	e
虚空蔵堂	護摩焼き供養	f
円応寺	閻魔縁日	g
宝戒寺	太子講	h
	地藏まつり	i
明王院	初不動	j
極楽寺	降誕会（花まつり）	k
	忍性塔特別参拝	l
光明寺	お十夜	m
覚園寺	黒地藏縁日	o
杉本寺・長谷寺・安養院	四万六千日詣り	p
長谷寺	歳の市	q

オ おわりに

源頼朝が現在の位置に鶴岡八幡宮を遷し、この場所を中心として各方面に延びる道路網を整備する中で、周囲の山稜部に造営した切通が交通の要衝として整備され、主要な街道の山際には多くの社寺が配置されていった。加えて、この時代の社寺は、幕府と強いつながりを持っており、周囲の山稜部に入組む谷戸が幕府関係者の領地であったことから、鎌倉各所の谷戸は境内地として開削され、多くの寺院が建立された。一方、民衆の間で広がりを見せた宗派の寺院については、主に庶民の生活の場となる街中に境内地を確保し、寺院を建立していった。これらの社寺の多くは、大正 12 年（1923 年）の関東大震災や昭和 16 年（1941 年）に始まる太平洋戦争など、度重なる困難を乗り越え、今もなお「生きている歴史的遺産」として面的な広がりを見せながら、鎌倉の各所で宗教活動を続けている。

さらに、社寺は、一つの歴史的風致を形成する重要な要素であることだけに止まらず、古来この地で行われてきた漁業に関連する伝統行事の担い手として、近世には参詣旅に始まる遊山の対象として、近代以降は別荘地や常住の地における古都の風情を醸し出す歴史的遺産として、戦後には緑地保全運動のきっかけの場として、それぞれの時代における人々の活動と密接な関わりを持ちながら、鎌倉における全ての歴史的風致の礎となっている。

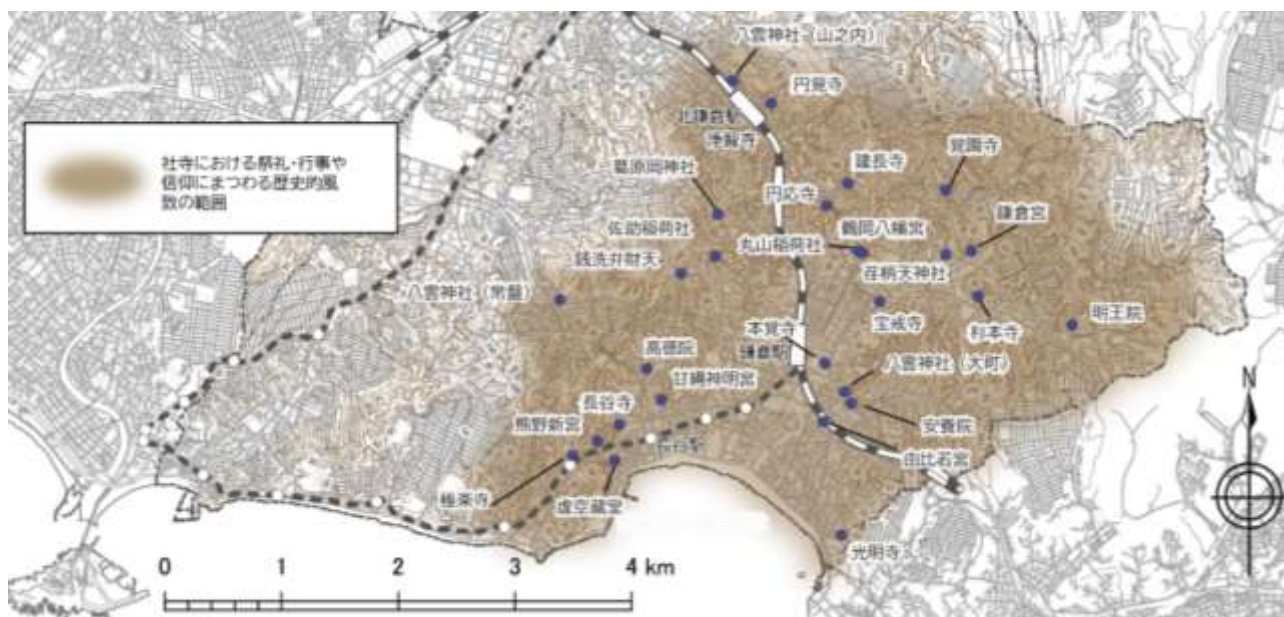


図 0-30 社寺における祭礼・行事や信仰にまつわる歴史的風致の範囲

コラム 十日えびす

十日えびすの行われる本覚寺の境内は、鎌倉時代後期に成立したとみられる『吾妻鏡』に見られる^{えびすどう}夷堂の地といわれている。当初は天台宗の寺院であったが、日蓮がここに留まったことから改宗し、日蓮宗の寺院になったと伝わっている。

えびすというと、一般的にはにこやかな顔で右手に釣竿、左手に鯛を持っている姿で知られているが、本覚寺のえびすは源頼朝が幕府の守り神として祀ったもので、岩に腰をおろして手を合わせ、厳しい顔をしている。

鎌倉・江の島七福神の一つである「えびす神」をまつる本覚寺では、正月の三が日に「鎌倉えびす」、1月9日に「宵えびす」、10日に「本えびす」が行われる。

夷堂^{たてえぼし}では祈祷の声が絶え間なく続き、金色の立烏帽子を付けて美しく着飾った福娘の姿が境内のあちこちに見られ、福銭やお神酒が参拝者に振舞われる。



写真 鎌倉えびす



写真 本えびす

コラム 宗教の垣根を超えた行事

「3・11追悼・復興祈願祭」（主催：鎌倉宗教者会議）は、鎌倉の神道、仏教、キリスト教の3つの宗教関係者が協力して毎年3月11日に開催しているもので、平成23年（2011年）に起きた東日本大震災から1か月後の4月11日に鶴岡八幡宮で始まり、2年目以降は3月11日に開催している。開催の会場は3つの宗教の持ち回りで毎年変更となる。令和5年（2023年）は円覚寺、令和6年（2024年）はカトリック雪ノ下教会、令和7年（2025年）は鶴岡八幡宮で行われた。

また、葛原岡神社では、平成9年（1997年）から祭神である日野俊基を当社とその位牌を保管する浄光明寺が合同で、日野俊基を偲び、また、隠れた鎌倉の魅力を伝えていくために「日野俊基卿祭」を行っている。葛原岡神社や浄光明寺の関係者が一列になり、本殿、墓前を巡る行列は、宗教の垣根を超えた鎌倉ならではの光景といえる。

鎌倉には、神社・寺院・教会といった多様な宗教施設が比較的近接して集積しており、それぞれが長い歴史を背景にまちのなかに位置づけられている。宗教の垣根を越えて共に祈るという行為が、自然に成立している点は、鎌倉の宗教文化の独自性を物語っている。



写真 日野俊基卿祭

(2) 海にまつわる歴史的風致

ア はじめに

鶴岡八幡宮の上宮に続く石段を上り、背後を振り返ると、南に向かって真っ直ぐに伸びる若宮大路と扇形に広がる市街地、その先に相模湾の水平線を見下ろすことができる。

古都保存法において「古都」と定められている10市町村のうち、海浜を有する都市は鎌倉市とその南東に位置する逗子市のみであり、緑豊かな自然環境、貴重な歴史的遺産と併せて海浜の風景が広がっていることで、鎌倉は古都の風格を保ちながらも開放感が漂い、訪れる人々に親しみを感じさせている。

江戸時代に入ると、和賀江嶋が位置する材木座と共に、坂ノ下、腰越、片瀬（藤沢市）、江ノ島（藤沢市）、新宿（逗子市）が「鎌倉六カ浦」と呼ばれ、日本橋の新着場付属の漁場として徳川家康の入国以来種々の御役（義務）を勤め、その対価として人々は漁業権を保証された。

中でも江戸城をはじめ、藤沢宿、戸塚宿などに魚を献上することが最も重要な役であり、特に有名であった鰹は、鎌倉に水揚げされるとすぐに六丁櫓の早舟で江戸などに急送された。松尾芭蕉が「鎌倉を生きて出でけん初鰹」、山口素堂が「目には青葉山ほととぎす初がつを」と詠んだことから、当時、鎌倉の鰹がいかに関西に愛好されていたかが分かる。こうした沿岸漁業は、近世以降、地域の活力ともなる生業として営まれ、現在は海産物の加工・販売なども含めた水産業として引き継がれている。

鎌倉海岸を拠点とする漁業者は、主に小型定置網、刺網、しらす船曳網、みづき²⁷、わかめ養殖などの沿岸漁業を行っている。



写真 鎌倉海岸と市街地



写真 材木座漁師町(明治時代)



写真 材木座での漁業
(昭和36年(1961年))

²⁷ みづきとは、鎌倉で古くからおこなわれている漁法「視突漁」に由来する。箱メガネという道具を使い、海中・海底をのぞき、長い竿で魚介類を獲る漁法である。

このうち、わかめ養殖は11月初旬に^{いかだ}筏を設置して種糸を植込むところから始まる。採捕は2月初旬～3月末までで、釜ゆで、水洗い、天日干しの順に2日かけて行う。浜で湯がいて干すのが特徴で、天日干しの風景は冬から初春にかけての風物詩となっている。



写真 わかめ干し

また、いわしの稚魚として知られるしらすについても、生しらす・天日干し・釜揚げしらす・タタミイワシとして加工し、直接販売する方法を殆どの網元が行っている。

鎌倉の市街地に沿って弓なりに約2km続く鎌倉海岸（材木座から坂ノ下）は、海が遠浅で漁港がないことから、砂浜に漁具倉庫を建て、漁を終えるたびに滑車などを利用して漁船を砂浜まで引き上げている。このため、砂浜には漁を終えた漁船が並び、近世から営まれてきた沿岸漁業が今も続いていることを伝えている。

これに対して昭和39年（1964年）10月に開港した漁港を持つ腰越の漁業者は、定置網、刺網、しらす船曳網、一本釣り、採貝藻等の沿岸漁業を行なうとともに、わかめ養殖のほか、サザエ、マダイ等の種^{しゅびょう}苗放流を継続的に実施するなど、作り育てる漁業を推進している。

表 主な漁法と漁期

時期	漁法
3月11日～12月末	しらす船曳網漁業
10月～4月	わかめ養殖（筏）漁業
11月～4月	みづき漁業
1月～12月	定置網漁業
1月～12月	たこつぼ・籠漁業
1月～12月	刺網漁業
1月～12月	一本釣漁業
1月～12月	遊漁案内業

漁業に関連した生業を営む人々が住まう材木座、坂ノ下、腰越には、網元や船宿、鮮魚店の他、のりなどの海産物の販売店、新鮮な海の幸を使った料理を提供する飲食店などが軒を並べ、大通りから外れた路地には、漁師町の面影を残す昭和期の木造住宅等が点在している。こうしたまち並みを背景として、古くから漁業が生活に根付いているこれらの地域では、海に関連する様々な伝統行事が営まれている。



写真 坂ノ下のまち並み(路地)



写真 坂ノ下のまち並み(海を臨む)

イ 建造物

(ア) 和賀江嶋²⁸

鎌倉において、海にまつわる歴史を語る上で欠かせないのが、中世に建造された和賀江嶋である。和賀江嶋は、鎌倉海岸の東端に位置しており、日本に現存する最古の築港遺跡として史跡に指定されている。

島は陸部から東西方向へ約 240m、幅 100m にわたって延びており、その形は直径 40～50 cm の玉石を積み上げた築堤の様を呈し、陸部に横たわる巨大な岩石上には大正 13 年（1924 年）に鎌倉青年団が建立した史跡顕彰碑が見える。

古くからこの海岸は、和賀江又は和賀江津と呼ばれており、鎌倉幕府直轄の港として栄え、和賀江を含む湾には数百艘の船が常に碇泊していたといわれている。しかし、大風による破損や転覆が多く、海岸が遠浅のため荷の揚げおろしに極めて不便であったことから、かんじんしょうにんおう あ み だ ぶつ 勧進 聖 人往阿弥陀仏が船着場建造の必要性を幕府に説き、第三代執権北条泰時を中心として幕府がこれに協力した。貞永元年（1232 年）7 月 1 日に着工し、8 月 9 日に完成した和賀江嶋には、その後、関が設けられ、極楽寺が関米（税）を徴集して和賀江嶋の修築、維持管理を行うこととなり、中国や国内各地と文物や人の交流が行われる海の玄関口としても中世都市鎌倉の発展に重要な役割を果たした。

遠浅の浜辺に積まれた玉石が大潮の干潮時に全容をあらわし、漁船が係留されているその風景は、史跡和賀江嶋が往時に港であったことを想起させる。



写真 和賀江嶋(昭和36年(1961年))



写真 夕暮れの和賀江嶋



写真 史跡顕彰碑と和賀江嶋

²⁸ 和賀江嶋のふりがなは、史跡としては「わかえのしま」であるものの、「わかえじま」や「わがえじま」と読む場合もある。

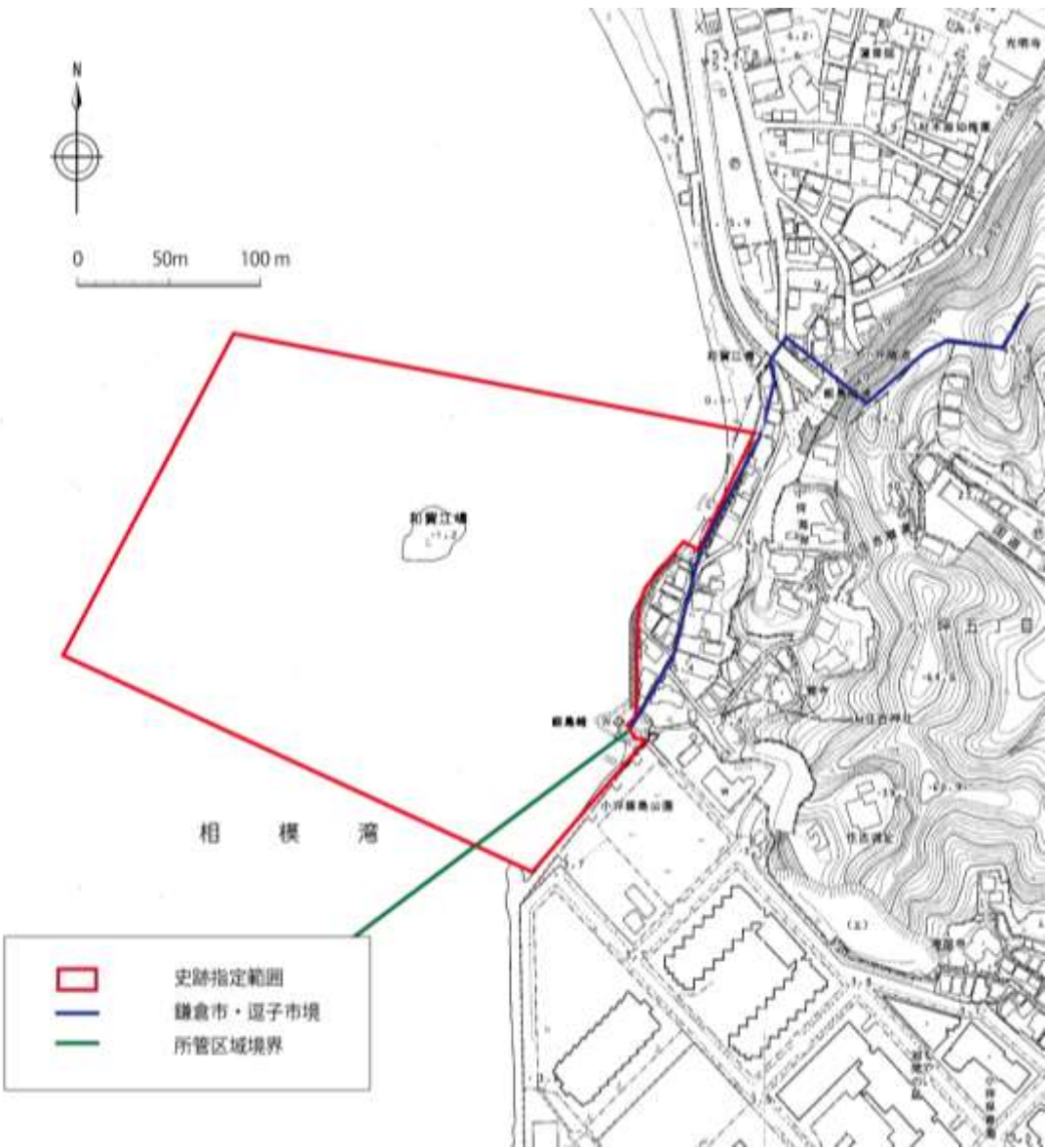


図 史跡和賀江嶋指定範囲図

(イ) 五所神社

五所神社は、明治 41 年（1908 年）に町内にあった三島神社の地に、八雲神社・諏訪神社・金比羅神社・見女八坂神社の 4 つの神社を合祀した神社である。合祀時に諏訪神社本殿を移建したものの、関東大震災の山崩れで埋没し、全壊した。現在の社殿は、昭和 6 年（1931 年）7 月に新築したもの²⁹で、入母屋造瓦葺屋根である。



写真 五所神社

境内の神輿庫には、3 基の神輿が安置されており、「寛永十九年」（1642 年）の棟札がかかっている。

神輿庫の右手の小さな建物には「弘長二年」（1262 年）の年号が刻まれた板碑が完全な姿で残され、鎌倉時代の貴重な文化財として、昭和 16 年（1941 年）に国指定重要美術品に認定、昭和 46 年（1971 年）に市指定有形民俗資料に指定されている。境内には、「寛文十二年」（1672 年）の年号がある庚申塔などが 13 基ある。

そのほか、大きな石を祀った三光尊石上稲荷（石祠は昭和 12 年（1937 年）4 月に建立）などがあり、海上安全の守護神として祀っている。

(ウ) 小動神社

小動神社は八王子宮はちおうじのみや、八王子大権現だいごんげんなどと称されていたが、明治時代の神仏分離に際し、地名の小動をとって社名を小動神社と改称した。『八王子宮縁起』によれば、文治年中（1185～1189 年）に佐々木盛綱が平家追討中、備州児島の戦いにおいて神のお告げを夢の中で感じ、大勝したことから、お礼参りのために長く尊崇してきた八王子宮を勧請したことが起源といわれている。また元弘 3 年（1333 年）5 月、新田義貞が鎌倉攻めの折に戦勝を祈願し、後に祈願成就のお礼として剣一振に黄金を添えて寄進したことにより社殿が再興されたことから、新田義貞の功績を大いに称えている。

石造りの明神鳥居みょうじんとりいの先に参道が伸びており、鳥居をくぐり参道を進むと石段があり、2 つめの石造りの鳥居が建っている。その右奥に社殿がある。現在の社殿は、拝殿はいでんの後方に幣殿へいでんを張出し、さらに短い廊で本殿を繋ぐ権現造ごんげんづくりの社殿がある。

本殿は文政 2 年（1819 年）の建築³⁰とみられる。現在は一部改修されている。形式は、桁行三間、梁間二間の流権現造で、屋根は切妻造棧瓦葺となっている。拝殿は、関東大震

²⁹ 昭和 47 年（1972 年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

³⁰ 昭和 62 年（1987 年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

災で破損し、昭和4年（1929年）に再建されたもので、これも改修されている。海に面した展望台があり、江の島、伊豆、箱根などを眺めることができる。



写真 お正月の小動神社
昭和49年(1974年)



写真 小動神社

(工) 御霊神社・石上神社

御霊神社は、海岸と並行に東西方向へ走る星の井通りから「力餅家」の角を曲がり、参道を進んだ山際にひっそりと佇んでいる。御霊神社の創建年代は明らかではないが、文治元年（1185年）にはすでにあったことが、『吾妻鏡』³¹の記述に明らかであるため、鎌倉時代以前に遡ると推測される。

御霊神社鳥居の手前には、江ノ電の踏切が見える。江ノ電の踏切を渡って



写真 石の道標



写真 力餅家

境内に入ると、入口に明神鳥居、入口東側に社務所と宝物庫がある。階段を上り、奥中央に銅板葺権現造の社殿、それを挟むように東側に末社群、西側に神輿舎二棟がある。

社殿は、明治45年（1912年）の改築、大正3年（1914年）の竣工で、腰越の大工棟梁によるもので、銅板葺権現造である。昭和49年（1974年）の写真からも、現在の社殿が50年以上前から建っていることが分かる。覆^{おおい}屋内の本殿は、貞享4年（1687年）の棟札がある。本殿の周囲には「かながわの銘木100選」に選定されたタブの木をはじめ、緑が生い茂り、社殿の裏に切り立つ崖が鎌倉特有の境内空間を形成している。

³¹ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

境内には、社殿の東側に石上神社が建っている。石上神社の御神体は、かつて由比ガ浜の沖にあった石であり、小さな祠に祀られている。昭和 40 年（1965 年）の写真と現在の写真を比較し、少なくともこの時期には現在の場所にあったことが分かる。



写真 御霊神社の参道
昭和 49 年(1974 年)



写真 御霊神社前を通る江ノ電



写真 石上神社
(昭和 49 年(1974 年))



写真 石上神社



図 0-31 御霊神社 境内図

ウ 活動

(ア) 五所神社・和賀江嶋での伝統行事

a 例祭

6月の第2日曜日に行われる五所神社の例祭では、古式に則った神輿の海上渡御が執り行われる。猿田彦や手^て古舞^{こまい}の少女たち、囃子山車などの前導に続き、3基の神輿が五所神社を出発し、材木座のまちを威勢よく練り歩く。このうち三番神輿は、白張烏帽子を被った氏子たちによって「天王唄」を歌いながら担がれ、祭礼の古風な趣を今に伝えている。昭和44年（1969年）に鎌倉市が作成した『図説鎌倉回顧』に掲載の写真からも、50年以上前から例祭が行われていることが分かる。



写真 五所神社例祭

行列は光明寺の入口で化粧直しを行い、やがて材木座海岸に到着する。浜辺では、四方に竹を立て、注連縄を張った神聖な空間に3基の神輿が据えられ、神幸所祭が厳かに執り行われる。祝詞奏上の後、神輿と参集者、そして海へ向かっての祓いが行われる。続いて、三番神輿を浜に残し、残る2基が海へと入っていくという、神輿渡御の見どころが展開される。



写真 五所神社例祭

（昭和44年（1969年）作成）

例祭の日には、材木座のまちでは、「天王唄」や囃子の音、神輿の掛け声があたり一帯に響き渡り、祭りの活気と高揚感を感じられる。

また、神輿渡御は材木座海岸だけでなく、和賀江嶋や由比ガ浜海岸からは、海へ進んでいく神輿とそれを担ぐ人々の熱気で普段は静かな海辺が一気に活気づく様子を見ることができる。この地域の人々も一大イベントとして神輿渡御の日には見物する人々で浜辺が埋まる。

b ^{しお}汐まつり

1月11日の「汐まつり」では、材木座地区の海岸において、「潮神楽（鎌倉神楽、湯立神楽）」の奉納と「ドンドンヤキ（ドンドヤキ、左義長）」と呼ばれる正月のお飾りを焚き上げる行事が行われる。

当日は波打ち際からやや上がった砂浜に^{ごさ}莫盛を敷き、四方に笹竹を立てて注連縄を張り、海に^{しおかぐら}対面して魚や野菜、お神酒などを供えた祭壇を設け、祭壇の隅にカマドを置いて神楽で使用する湯を沸かす。併せて祭場に隣り合う西側の平地では、ドンドンヤキの準備が始まり、正月飾りやだるまを納める場所として四方に笹竹が立てられ、集まった人々は役目

を終えた正月飾りなどを笹竹の内側に高く積んでいく。

全ての準備が調い、関係者が席につくと、神事に先立ち、保存会によって天王唄が奉納される。揃いの法被^{はっぴ}を着た保存会の面々が祭壇の先の海を臨んで座り、声をそろえて天王唄を奉納し終わると祭儀が始まり、神職による祝詞奏上、関係者による玉串奉納に続き、いよいよ神楽が始められる。昭和40年（1965年）頃の写真からも、50年以上前から潮神楽が行われていたことが分かる。

鎌倉神楽は笛、太鼓で音頭を取りながら、打囃、初能、御祓、御幣招、湯上、中入、搔湯、笹舞（湯座）、弓祓（射祓）、剣舞毛止幾の演目が進められ、祭儀が終わると、すぐにドンドンヤキが始められる。

祭儀を終えたばかりの宮司が、積み上げられたお飾りの山の前に立ち、湯釜の火を遷して火を点け、お焚き上げを行う。火は点火された下部から上部へと燃え移り、その周りを取り囲む人々は皆、一年の無病息災や家内安全を願いながら、煙が高く上がっていく様子を見守っている。

「潮神楽」、「ドンドンヤキ」は、元々は漁師が主催する大漁祈願の儀式であったと伝えられており、現在では漁師の数が減ったことなどから、主催者は五所神社の氏子役員となっている。

なお、同日同時刻には坂ノ下海岸においても神事が行われ、神楽が奉納される。

神楽の奉納が行われる様子や、ドンドン焼きの様子を海岸沿いからも望むことができる。特に神楽の音楽は、波音とともに海沿いに響き渡り、周囲に祭りの情緒を漂わせる。音と風景が一体となり、地域に暮らす人々や訪れる人々にとって、海と結びついた信仰・文化を感じられる機会となっている。



写真 潮神楽(材木座海岸)



写真 材木座 汐神楽
(昭和40年(1965年)頃)



写真 潮神楽(坂ノ下海岸)



写真 ドンドンヤキ(材木座海岸)

(イ) 小動神社天王祭

小動神社天王祭は、一般に「天王祭」と呼ばれており、7月7日・14日の両日にわたる祭礼であり、近年は14日に近い日曜日に行われている。この神事は、江戸幕府が編纂した地誌『新編相模国風土記稿』の明治8年（1875年）の写本に「六月十四日ニ天皇ノ祭事ヲ行ヘリ。」という記述があり、古くから行われている神事であることが分かる。

神事は、7日に近い日曜日の夕方に氏子五か町（浜上、神戸、土橋、中原、下町）の囃子屋台が小動神社に集まり、総代及び祭典委員等が参列の上、神幸祭を執り行う。その後、出御、囃子屋台、賽銭唐櫃所後、神主、総代、神輿の順に行列を組んで氏子区五か町を練り歩く。午後7時には神社参道に設けられた御仮屋前に到着し、関係者一同による手締めの後、各町囃子屋台は解散し各々の町内へ帰り、神輿は御仮屋内に安置して神幸祭を終える。

翌週日曜日の還幸祭では、江島神社の末社の八坂神社の神輿との行合祭が行われる。早朝から腰越町の花番（その年の当番）と下番（前年の当番）に当たる2町内の総代、祭典委員、囃子屋台が迎えの使いとして江の島に出向する。小動側は御仮屋前に各町の囃子屋台が集合し、総代、祭典委員、各町内代表が参列して御動座祭を執り行った後、町内を練り歩く。行列は、各町の囃子屋台、獅子頭、大榎、舂太鼓、賽銭唐櫃、神主、総代、神輿の順となる。一行は先ず浜上海岸に出て、四方に立てた竹に注連縄を廻らした所定の位置へ神輿を据え、神幸所祭を執り行う。祝詞奏上、御幣にて総代、祭典委員、参集者を祓った後、海に向い大きく祓う。そして、再び同行列は各町を練り歩き、下町海岸へと至り、同じく四方に立てた竹に注連縄を廻らした所定の位置へ神輿を据え、神幸所祭を執行する。次いで神輿は海の中まで担がれ、少しの間激しく揺さぶられた後、海から上がり引き続き町内を練り歩き、昼休憩を挟んで龍口寺前で八坂神社の神輿を出迎える。

江の島側の一行は、島での行事を済ませ、腰越側からの使者の迎えを待って、花番、下番の先導で金棒、高張り、通り囃子などの各囃子に太鼓、五所幟、提灯、天狗、神輿、総代、宮司等による行列を組んで腰越に入る。神輿が小動神社御仮屋前の祭庭に到着すると、両社の神輿が並んで据えられ、腰越側が準備した神饌を備え、神幸所祭が行われる。少しの休憩を挟んで再び一行は動きだし、夕刻に差し掛かった龍口寺の前で、腰越側の一行は横列に並び、江の島側の行列を見送る。この後小動の神輿はもと来た道を引き返し、一通りの神事を終えた後、役員一同の手締めで祭礼は終了する。



写真 神輿(小動岬付近)



写真 神輿(満福寺付近)

以前は、各町から飾り人形付きの山車 5 台が勢揃いして運行していたが、昭和 37 年（1962 年）に山車が 5 台のうち 4 台が焼失してしまった。現在は、各町内会で再建をし、令和 7 年（2025 年）には、浜上、土橋、中原の山車が神輿と巡行し、神戸と下町はそれぞれの町内で展示等が行われた。人形は浜上が義経と弁慶、神戸が八幡太郎義家と鎌倉権五郎景正、土橋が源頼朝と御所五郎丸、中原がスサノオノミコト、下町が神功皇后と武内宿禰である。

江ノ電の併用軌道の脇を神輿や山車が練り歩き、祭りの法被や浴衣姿の人々の合間を江ノ電が走る様子は腰越地域ならではの風景であり、夏の風物詩として地域の人に大切にされている。

(ウ) 御霊神社・石上神社の伝統行事

a 面掛行列

実りの秋を迎える頃になると、御霊神社では、鎌倉権五郎景政の命日である 9 月 18 日に「面掛行列」が行われる。この行事は、地域の豊年と豊漁を祈願し、子孫繁栄を願う祭で、神奈川県指定無形民俗文化財にも指定されているほか、「面と衣装（45 点）」と「神輿」は市指定有形民俗文化財に指定されている。

9 月 18 日当日は、面掛行列の前に「例祭」が執り行われ、「鎌倉神楽（湯立神楽）」が十二座、奉納される。神楽の基本的な構成は汐神楽と同じであり、社殿東側の平場に青竹を四方に立てて注連縄を張り、五穀豊穰を祈って神楽が奉納され、その後、面掛行列が始まる。

御霊神社の面掛行列の起源は定かではないが、天保 12 年（1841 年）の『相模 国風土記稿』に「例祭九月十八日巡行ノ儀アリ。祭祀ノ式鶴岡ノ巡行ノ式ニ倣ヘリ。祭器モ鶴岡ノ神器ニ模倣シテ造レリ」とあり、また、面裏の「明和五戌子年」の年代からも、200 年以上前には行われていたことが明らかである。

神社と氏子の結びつきが強く、町内の氏子は祭のときに一軒で一役を受け持ち、奉仕するしきたりがある。



写真 鎌倉神楽(御霊神社)



写真 猿田彦



写真（左から）火吹男、
阿亀、女、福祿寿

行列は同心・金棒を先頭に、囃子連、幟^{のぼり}、神宝類、猿田彦、獅子頭が列をなして歩き、その後を爺、鬼、異形、鼻長^{はななが}、翁、烏天狗、福祿寿、火吹男、阿亀^{お かめ}、女の面の 10 人と神輿が行列を成し、ゆっくりと歩を進めていく。この内、妊婦役の阿亀のお腹は、豊年・豊漁の象徴として大きく膨らんでいる。



写真 面の10人

最後の 2 人は女装であるが、全て男性が扮しており、前の 8 人は揃いの頭巾に赤い袴姿で、着物の上に赤や金の美しい模様が入った袖なしの羽織を着ている。阿亀は、大きくふくらませたお腹を両手で抱えながら歩き、産婆役の女が阿亀の腹をなでたり扇であおいだりと、おどけた動きをして見物人を笑わせる。この他、赤の狩衣に黒烏帽子^{かりぎぬ}の宮司、うす紫やうす茶色の狩衣に黒烏帽子の神職たち、そして、袴姿で白足袋を履き、菅笠^{すげがさ}をかぶった役員などを供とした行列がゆっくりと移動していく様は、往時の人々の願いが営々と続いていることを表している。

囃子の音色がまちに響き渡り、人々は阿亀と産婆役などの愛嬌のある所作や色鮮やかな装束を楽しむなど、200 年以上続く伝統行事の神事としての厳粛さと行列を見る人々の活気が共存する独特の雰囲気を感じることができる。

面掛行列は、奈良時代に盛んであった仏教布教のための仮面劇である「伎楽」の面を用いて演じられるが、伎楽はその後衰退したため、現在伎楽の面を祭礼に用いる例は全国的に類を見ない。宝物館に保管されている市指定文化財の面には、明和 5 年（1768 年）の年号があり、鶴岡八幡宮の祭りで「放生会」を行ったときに、舞楽面の行列があったものをまねて、坂ノ下村民が作らせたものだといわれている。その後、鶴岡八幡宮の行列は、江戸時代の終わりに面が焼失したことをきっかけに行われなくなった。また、山ノ内の八雲神社にも裏に天保 11 年の銘がある面が残り、市指定の有形民俗文化財となっているが、こちらも現在行列は行われていない。このことから、御霊神社の面掛行列は大変貴重な文化財といえる。

なお、面掛行列の一行は、平成 20 年（2008 年）に大韓民国の安東市で毎年開催されている「安東国際仮面舞フェスティバル」へ参加するなど、伎楽についての理解を深める活動も積極的に行っている。

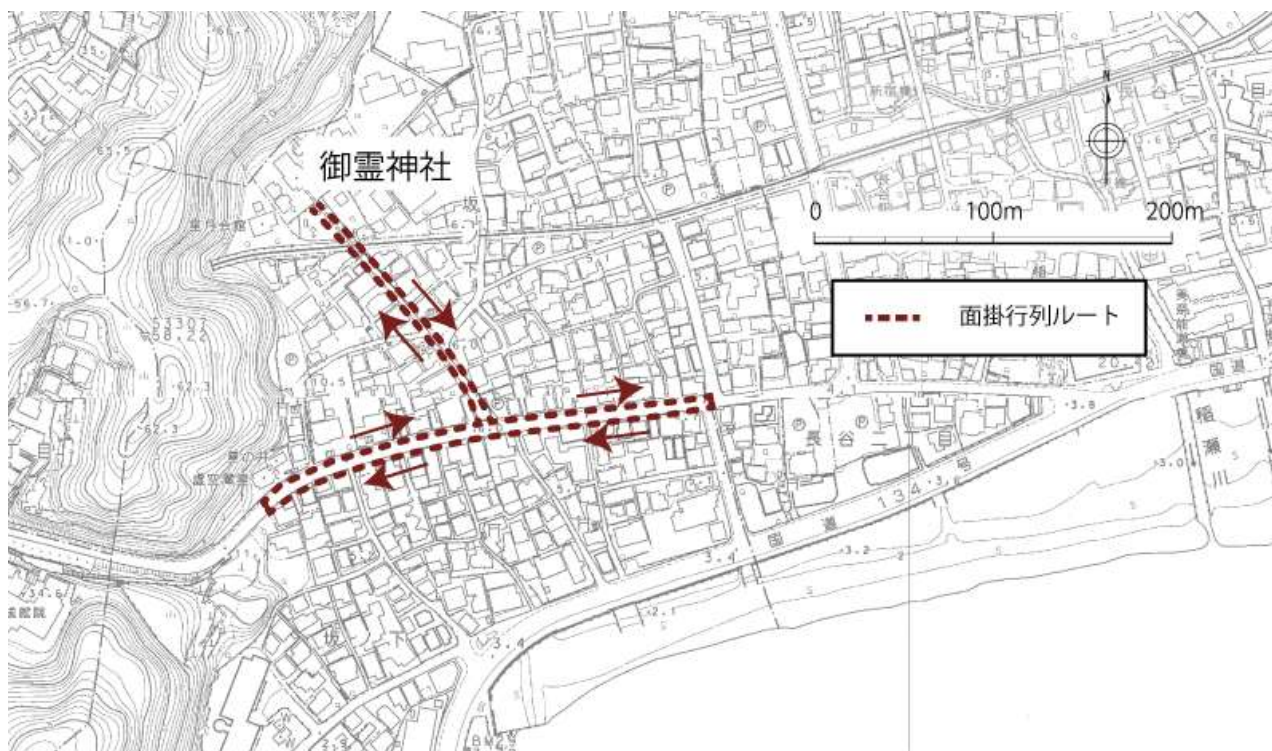


図 面掛行列ルート図

b 石上神社例祭

石上神社の例祭は海の日（7月の第3月曜日）に行われる。例祭の当日は、先ず御霊神社の境内に神輿を安置し、白い和紙の御幣を赤飯に立てた「ゴック（御供）」と神酒を供え、神事が執り行われる。次いで神輿は浜に運ばれ、再び神事を行った後に船へと移される。神輿と神職を乗せた船は、囃子方を乗せた漁船を従えて沖へと向かい、さらにゴックを片手に掲げた一人の若者が、十人前後を従えて船の後を泳ぎ追って行く。この一団が1km程沖合の石上神社に祀られた岩礁さかきのあった場所に到着すると、神職が祝詞を奏上してさかきを海へ投げ入れ、これを合図に泳いでいた者たちが、一口ずつゴックを食べた後、残りを海中に投げ入れて、海神に供えることで船の安全を祈願する。



写真 神輿と御供



写真 沖へ向かう神輿

第二次大戦直後まで地元住民の間では、祭礼が終わるまで海水浴をしない風習があったほどであり、石上神社の例祭は、海と共に暮らしてきた地域住民によって大切に受け継がれてきた祭礼である。昭和44年（1969年）に鎌倉市が作成した『図説鎌倉回顧』に掲載の写真からも、50年以上前から例祭が行われていることが分かる。

例祭の様子は由比ガ浜海岸周辺から眺めることができ、神輿を載せた船が沖へ向かう様子や、若者たちが泳ぐ姿は、海と共に暮らしてきた地域の歴史・伝統を感じることができる。

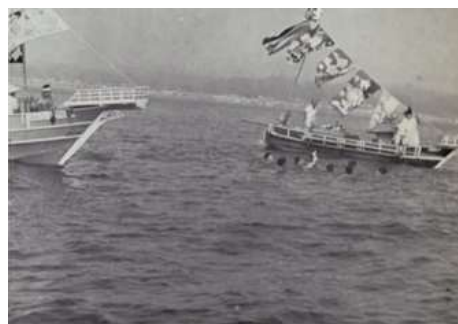


写真 沖へ向かう神輿
(昭和44年(1969年)作成)

(エ) 船おろし・船祝い

新年になって初めて海に漁船を出す日に行われる「船おろし（腰越地区では船祝い）」では、漁師たちが海岸へ出向き、大漁旗に飾られた漁船を勢ぞろいさせ、船を守る神様である「船霊さま^{ふなだま}」に大漁と安全を祈り、日ごろの海へのお礼と大漁への願いを込めて、船主がそれぞれ船の上から海の方へミカンや菓子をまく。

材木座と坂ノ下では毎年1月2日10時頃から、腰越では毎年1月4日8時頃から始まるこの行事には、地域の人々の他にも、市内各所から大勢の見物客が集まる。砂浜に引き上げられた船の上から、海側の浜辺にいる人々にミカンや菓子などがまかれる際には、縁起物を受け取ろうと手を伸ばす様子や、方々からわき上がる参加者の歓声から、行事の活気を感じることができる。

腰越漁港の船祝いは、昭和46年（1971年）代の写真から、50年以上前から行われていたことが分かる。ミカンや菓子などをまき終わった後、漁師とその親戚縁者が乗船して新年最初の航海に出る。沖合の船上から江島神社、小動神社^{ようはい}を遥拝した後、腰越漁港に戻ってくる。海に浮かんだ船の上から初詣を行うという、海に面する古都鎌倉らしい正月の風景を見ることができる。



写真 船おろし(材木座海岸)



写真 腰越港の船祝
(昭和46年(1971年))



写真 船祝い(腰越漁港)

(オ) 鎌倉花火大会

鎌倉の花火大会は、昭和 24 年（1949 年）8 月 5 日の新聞に花火大会の開催を知らせる記事が載っていることから、70 年以上の歴史を持つことが分かる。昭和 60 年（1985 年）の新聞には、昭和 23 年（1948 年）に、鎌倉文士の一人であり当時の観光協会会長を務めていた久米正雄が、鎌倉に大勢の人を呼びたいと、催し物を模索していた中、花火大会の開催に至った経緯が記載されている。記事によると、当時は坂の下の埋め立て地が会場となっていた。戦後の復興と戦没者の鎮魂を祈って始まった鎌倉の花火大会は、鎌倉の夏を代表する風物詩として親しまれてきた。コロナ禍により一時休止されたが、令和 4 年（2024 年）7 月に再開され、多くの市民や観光客に再び感動を届けている。

花火の打ち上げは由比ガ浜海岸沖約 400m に停泊させた打ち上げ用の船から行われる。中でも、鎌倉花火大会の象徴ともいえる水中花火は、海面に扇状に広がる幻想的な光景を創り出し、訪れた人々を魅了する。

毎年、多くの観客が市内外から訪れ、材木座海岸や由比ガ浜海岸の砂浜は人々で賑わいを見せる。花火の音は鎌倉市内に響き渡り、その光は谷戸の奥深くにまで届く。花火の光が鎌倉の社寺や歴史ある市街地や周囲の山並みを照らし出し、社寺や市街地のシルエットが浮かび上がるなど、古都ならではの情緒ある風景が広がる。

とりわけ、海と山に囲まれた鎌倉ならではの地形や社寺・市街地が、花火の光と共に映し出される鎌倉らしい光景を見ることができ、まち全体が一体となった景観を構成している。鎌倉花火大会は、鎌倉の海・山稜・谷戸・まちなみが織りなす、夏の鎌倉らしい風物詩として、まちの景観的魅力の重要な一要素となっている。



鎌倉花火大会
昭和 29 年(1954 年)



鎌倉花火大会



「鎌倉」プロモーションフォトコンテスト 2016 年 入選作品
「Kamakura Summer」



一の鳥居と花火

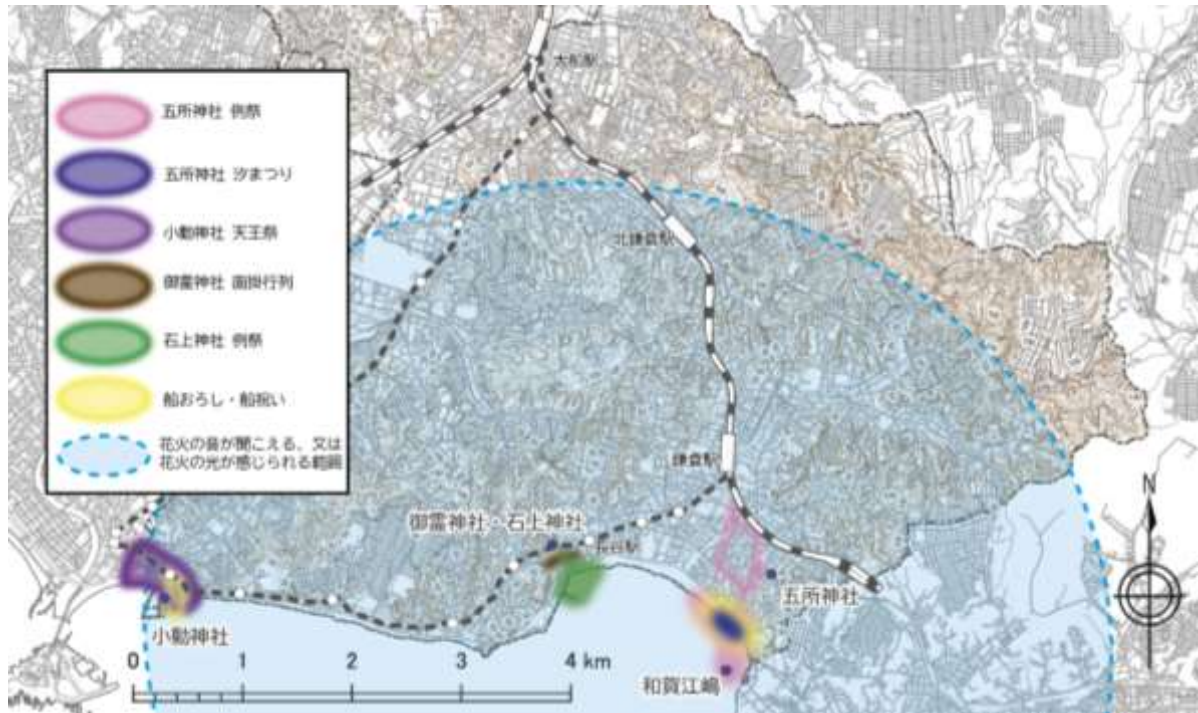


図 海にまつわる行事の市街地への広がり

エ まとめ

鎌倉の海浜地域においては、沿岸漁業などの生業とともに、古来より神社仏閣との深い関わりの中で、漁の安全や豊漁を願う伝統行事が脈々と受け継がれてきた。これらの祭礼や神事は、地域の信仰や暮らしと密接に結びつき、海と共に生きてきた人々の営みを今に伝えている。また、地域の内外や訪れた人々との交流を育み、鎌倉の海辺に根ざした文化的景観を形づくっている。

こうした伝統に加え、現代においても夏の風物詩として親しまれている花火大会など、海を舞台とした行事が継続されており、地域の暮らしと海との結びつきが今なお息づいている。海岸に響く音や広がる光景は、古くからの風習や祭礼と同様に、鎌倉らしい海の景観の一部となっている。

このように、信仰・生業・行事が一体となって育まれてきた海と人との関係は、鎌倉の海浜地域における歴史的風致の重要な構成要素となっており、今日においてもその価値が継承されている。

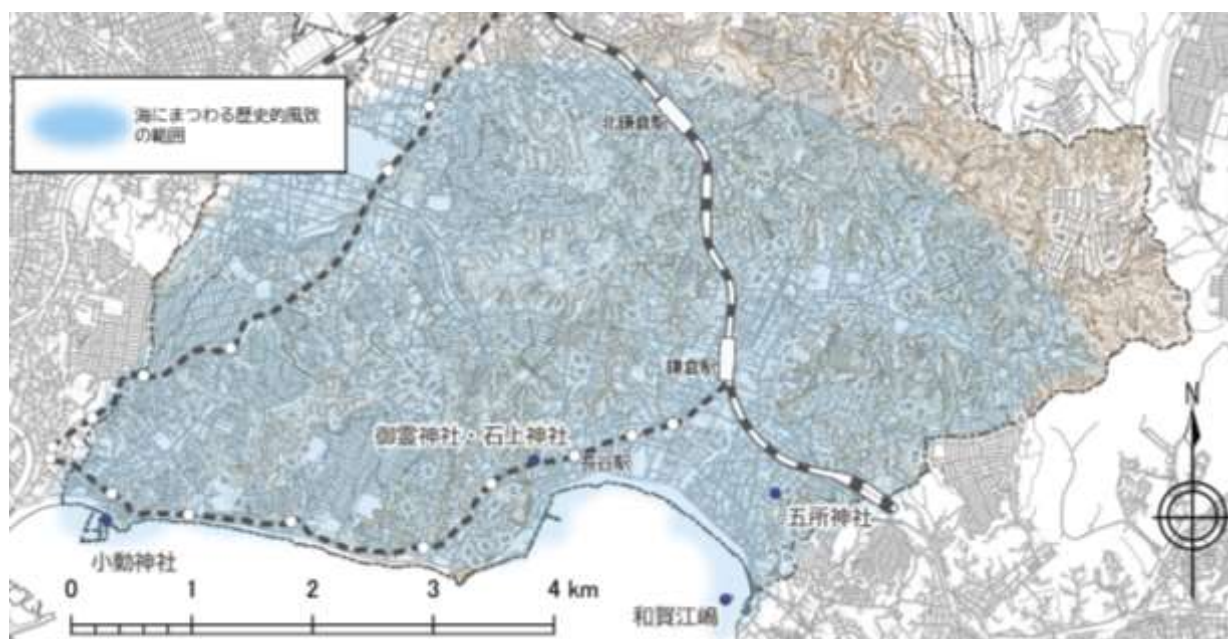


図 海にまつわる歴史的風致の範囲

(3) 若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致

ア はじめに

若宮大路と鶴岡八幡宮を中心としたこの地域は、栄華を極めた鎌倉時代から現代に至るまでの 800 有余年の時の流れをありありと想像することができる代表的な場所であり、段葛^{だんかつら}を挟んで両側に商店が並ぶ風景は鎌倉独特のものである。

そして、若宮大路に点在する昭和初期の建物を活用した商店は、こうした時代の流れの中で観光地として発展した鎌倉の姿を想起させる証人である。特に、若宮大路の中ほどに位置する湯浅物産館と三河屋本店はその代表的な例といえる。

若宮大路沿道では、これらの歴史的建造物が鎌倉を代表する土産物店、鎌倉彫などの老舗、教会などが立地し、現代的な店舗と一緒に並んでいる風情から、日本遺産で「「いざ、鎌倉」～歴史と文化が描くモザイク画のまちへ～」としてストーリーが語られているモザイク状の鎌倉の歴史、魅力を体感できる。

鶴岡八幡宮を訪れる人々や若宮大路沿道の商店などが織りなす賑わいや営みは、小町通りや若宮大路とこれを結ぶ路地、JR 鎌倉駅前にまで広がっている。

イ 鎌倉における遊山の歴史

鎌倉幕府滅亡後の鎌倉には、室町幕府によって東国支配の拠点「鎌倉府」が置かれていた。その長官である鎌倉公方足利氏は禅宗に帰依し、京都とは別の五山制度を確立させるなど社寺を積極的に保護していたが、15 世紀半ばに鎌倉公方が鎌倉支配を放棄したことで、まちは衰退し、中世都市の活気は失われ、鎌倉は静かな農漁村へと変貌していった。

しかし、16 世紀に入ると、鎌倉は武家政権発祥の聖地として重視されるようになり、戦国大名の後北条氏が鶴岡八幡宮の修造を行うとともに太平寺仏殿を円覚寺に移築して舍利殿を建立、17 世紀には徳川家康が鶴岡八幡宮や建長寺など主要な社寺の復興を進めるなど、時の権力者や政権による支援などもあり、社寺も再び脚光を浴びるようになった。

そして江戸時代、泰平の世が続く中、鎌倉は、現在も知られる浄瑠璃、歌舞伎の代表的な演目の舞台として取り上げられるようになった。鎌倉時代の曾我兄弟の仇討^{あだうち}を題材とする『寿 曾我対面^{ことぶき そ がのたいめん}』などで舞台となるほか、『仮名手本忠臣蔵^{か な で ほんちゅうしんぐら}』のように江戸幕府をはばかりて舞台を江戸から鎌倉へ置き換えて上演するものも多く、これらを通じて庶民に知られる場所となり、社寺も信仰の対象としてのみならず、江の島など景勝地の見物と結びついて遊山の対象となりはじめる。こうして鎌倉には江戸やその近郊から武士や町人など多くの遊山客が訪れることとなり、さらに賑わいを取り戻していくこととなる。



図 曾我物語を題材とした錦絵

江戸時代にまとめられた鎌倉の地誌としては、徳川光圀が鎌倉を巡覧した際の記録である『鎌倉日記』や、それをもとに光圀の命で編纂された『新編鎌倉志』^{しんぺんかまくらし}のほか、幕府の昌平坂学問所編纂の『新編相模国風土記稿』^{しょうへいざかがくもんじょへんさん}などが挙げられる。また、江戸時代中期に庶民が鎌倉に盛んに訪れるようになると、『鎌倉名所記』、『鎌倉絵図』など、名所めぐりに携帯するためのいわゆるガイドブックやガイドマップが盛んに出版されるようになった。



図 鎌倉名所記

当時、鎌倉への参詣は、江の島詣に組み入れられることが多く、江戸を発って東海道を下り、程ヶ谷（横浜市保土ヶ谷区）から「金沢道」に入ると、梅の名所「杉田」や景勝地「金沢八景」を見物、朝夷奈切通を越えた先の「鎌倉」では、絵図を手に社寺を巡り、極楽寺坂から七里ヶ浜を抜けて「江の島」へ詣でる、あるいは、藤沢から「江の島」を詣で、海沿いを鎌倉へ向かい、その後「金沢八景」へと抜けるという道のりが一般的であった。なお、鎌倉から極楽寺坂を抜け、七里ヶ浜、腰越を通り江の島へ至る道は「江嶋道」^{えのしまち}と呼ばれ、今と変わらぬ風光明媚な景色が広がっていた。このほか、江戸から鎌倉へ至るには、東海道の戸塚宿から大船、山ノ内、巨福呂坂を経て鎌倉へと入り、名越切通を抜けて大津（横須賀市）へと続く「浦賀道」を通る場合もあった。

また、江の島は、江戸や関東一円から講を組織して大山を参詣する「大山詣（大山参り）」^{おおやまもうで}と対で巡拝されることも多かった。これは、大山阿夫利神社の本尊である不動明王^{あふり}

を男神、江の島の江島神社の本尊である弁財天を女神に例え、片方だけ参拝することを忌む風潮があったためといわれる。

庶民の間に遊山が定着した文化文政期（1804～1829年）以降、東海道の名所が浮世絵に描かれるようになり、その中で度々題材となったのが、七里ヶ浜から江の島を望む風景である。七里ヶ浜から海を挟んで江の島と富士山を望むという構図が人々に好まれ、葛飾北斎^{うたがわひろしげ}や歌川広重をはじめ、様々な絵師がこの題材を取り上げている。

このように、鎌倉を画題とした浮世絵も頻繁に制作された。なお、遊山については、「鎌倉遊山にみる歴史的風致」でさらに詳しく記載する。

ウ 若宮大路沿道の賑わいと発展

こうしたことを背景に、江戸やその近郊から遊山客が多く訪れるようになると、鶴岡八幡宮の参道である若宮大路の沿道には、遊山客を対象とした商店、茶屋、旅籠屋^{はたごや}が軒を連ねるようになった。天保4年（1833年）に発行された十返舎一九の『諸国道中金の草鞋』（第十九編）の雪ノ下・段葛の項には、「八幡宮の前の道を雪の下といふ。茶屋、旅籠屋おほし。」とあり、挿絵からも多くの人々が通りを行き交い、往時の賑わいがうかがえる。

さらに近代に入ると、明治21年（1888年）に東海道線大船駅が開業、同22年（1889年）に横須賀線鎌倉駅が開業、同35年（1902年）には江之島電気鉄道（現江ノ島電鉄）が開業するなど鉄道網の整備が進み、若宮大路の沿道には、観光客を対象とした宿泊、飲食、土産店が増え、観光地の賑わいを支える商業活動がさらに発展していった。これに伴い、地域の団体による段葛の桜並木の手入れ、鎌倉の特徴であった松並木の保存、清掃活動などが行われるようになった。



図 往時の雪ノ下・段葛の様子(『諸国道中金の草鞋』より)

エ 建造物

(ア) 若宮大路・段葛

鎌倉時代から都市の基軸線とされていた若宮大路は、源頼朝が寿永元年（1182年）に妻である北条政子の安産祈願のため造ったものであり、史跡に指定されている。

若宮大路の中央には、「段葛」と呼ばれる一段高い参道が築かれており、当初は鶴岡八幡宮から鎌倉海岸に程近い一の鳥居までであったようだが、時代の流れとともに一部は平坦地となった。大正6年（1917年）には段葛の現存部分が鶴岡八幡宮境内に改めて編入され、史跡若宮大路とは別に、史跡鶴岡八幡宮境内の一部として史跡に指定されている。

また、昭和61年（1986年）には、「日本の道100選」のひとつに選定されている。

段葛では、平成27年（2015年）11月から平成28年（2016年）2月にかけて、参道としての風致、景観の向上、桜並木の景観の回復等を目的とし、環境整備工事を実施した。大改修により、中世の骨格を踏襲する鎌倉の都市の中心線である若宮大路の歴史的景観の質が高まり、若宮大路沿道に新たな魅力と賑わいを加えている。



写真 若宮大路(明治時代)



写真 若宮大路
(昭和34年(1959年))



写真 若宮大路と
二の鳥居

(イ) 鶴岡八幡宮 一の鳥居 二の鳥居

鶴岡八幡宮の一の鳥居・二の鳥居は段葛と並ぶ若宮大路のシンボルである。鳥居は、単なる入口を示すものではなく、神域と現世を隔てる結界であり、神聖な場所であることを示す意味を有している。

一の鳥居は若宮大路南端側に位置し、「浜の大鳥居」とも呼ばれる。国の重要文化財に指定されており、高さ約 8.5m、柱の太さは約 92cm の石造りの明神鳥居である。関東大震災で上部が破損したものの、昭和初期に一部の石を補って復旧された。柱上部には「寛文八年戊申八月十五日 御再興 鶴岡八幡宮石雙華表」(1668 年)の刻銘がある。それまでは、長らく木造だったが、寛文 8 年(1668 年)に徳川四代将軍家綱によって寄進され、石造になった。



写真 一の鳥居



写真 二の鳥居と段葛
(昭和 48 年(1973 年))

二の鳥居は現在の段葛の入り口に位置し、若宮大路を通じて鶴岡八幡宮を参拝する人々を出迎える。一の鳥居と同様に、徳川四代将軍家綱によって寄進され、石造になった。関東大震災により倒壊したため、昭和 2 年(1927 年)に鉄筋コンクリート造りに再建された。昭和 48 年(1973 年)の写真からも、50 年以上前から現在の鳥居が建っていることが分かる。二の鳥居手前の狛犬は、昭和 36 年(1961 年)に奉納されたものである。なお、白旗神社脇の鎌倉国宝館の前庭にある「源実朝歌碑」は、関東大震災で倒壊した二の鳥居の西柱を利用している。

(ウ) 湯浅物産館

湯浅物産館は、明治 30 年(1897 年)に貝細工の製造加工・卸売りの店舗として創業し、現在の建物は昭和 11 年(1936 年)に店舗兼住宅として建築されたもので、間口六間、奥行十一間半の 2 階建ての建築物で、若宮大路沿いの戦前の創建となる商業建築としては最大の規模のものである。

令和 3 年(2021 年)に登録有形文化財となった。棟札は桁行の中央、正面から 3 本目の棟束にくぎ打ちされており、その裏面に「上棟 昭和十一年七月十日 湯浅新三郎住宅」と墨書がある。また、座机はその甲板裏面に「昭和十一年十一月十五日 祝新築出入職一同」と記されている。これらにより、この建物が昭和 11 年(1936 年)7 月に上棟し、同年 11 月に竣工したことが分かる。加えて、縮尺 50 分の 1 で 1・2 階の平面図を和紙に墨入れして描いた「店舗新築工事設計図」が残されており、創建時の姿を知ることができる。

横浜の貿易商社を模したという外観は、木造の建物の前に装飾を施した「看板建築」と呼ばれる形式をとっており、道路に向かって広く開放された店舗空間や店舗中央に設けられたトップライトなどの建物内部も、往時の建築的特徴をよく示している。



写真 湯浅物産館



写真 店舗天井・吹抜

(工) 三河屋本店

三河屋本店は、明治 33 年（1900 年）創業の酒店で、伝統的な出桁造りの店構えが、若宮大路の沿道でひととき目を引く存在である。この建物は、この地で酒店を営んでいた竹内福蔵^{だしげた}が、関東大震災で倒壊した建物に代えて昭和 2 年（1927 年）に建てたものであり、建設年の根拠は、棟木の墨書および「昭和二年 新築工事控 弍月より」と表書きされた和綴の帳面の存在である。墨書は、住宅棟の南北に通る棟木の下端部に北側から「上棟昭和二年六月二日 竹内福蔵」と記されたものであり、「新築工事控」は、昭和 2 年（1927 年）2 月から 10 月までの各月の工事経費を項目別に細かに記したものである。この二つの史料により、三河屋酒店が昭和 2 年（1927 年）2 月に起工、6 月に上棟し、同年 10 月に竣工したことが分かる。



写真 三河屋本店



写真 トロッコ用レール

伝統的な出桁造りの母屋、蔵、そしてトロッコ及びトロッコ用レールなど、戦前の商店の姿がそろって残り、使われている三河屋本店は、建築史的・民俗史的に見ても、鎌倉の戦前の商店建築を代表する貴重な建物といえる。平成 18 年（2006 年）に登録有形文化財となっている。

オ 活動

(ア) 若宮大路沿道の賑わいと商店の営み

若宮大路沿道周辺は、1年を通して修学旅行や遠足に来た学生、観光客で賑わっている。若宮大路の中央に位置する段葛を通り、鶴岡八幡宮に参拝し、帰りに若宮大路や小町通りに並ぶ土産物店、飲食店などに立ち寄る人々の様子は、若宮大路周辺の賑わいを感じられる鎌倉らしい光景である。昭和45年（1970年）の写真からもその活気を感じることができ、50年以上前から若宮大路周辺が大いに賑わっていたことが分かる。



写真 賑わう若宮大路
(昭和45年(1970年))

特に、若宮大路沿道には、古くから営業を続ける老舗店舗があり、鎌倉らしい風情を醸し出している。例えば、鶴岡八幡宮の一の鳥居横にある鎌倉彫の老舗の博古堂は、明治3年（1900年）頃から現在の場所で店舗兼工房を構えている。職人の手仕事による鎌倉彫の美しさと伝統技術を今に伝える店舗として地域に深く根ざしている。



写真 若宮大路の土産物屋に立ち寄る人々(昭和42年(1967年))

また、明治27年（1894年）創業の和菓子店の豊島屋は、関東大震災後から若宮大路の現在の地に本店を構えている。豊島屋の代表銘菓で120年以上の歴史がある「鳩サブレ」は、観光客をはじめ多くの人々に親しまれており、目印の鳩が描かれた袋を提げて観光を楽しむ観光客の姿を鎌倉の各地で見ることができる。

若宮大路沿道には、このような鎌倉を代表する老舗店舗や、三河屋本店や湯浅物産館などの歴史的建造物が現代的な店舗と一緒に並んでおり、その風情から、日本遺産のコンセプトであるモザイク画のような鎌倉の歴史、魅力を体感できる。



写真 豊島屋本店（昭和20年代
(1945年頃)後半）



写真 豊島屋の袋を提げて若宮大路を歩く人々

(イ) 若宮大路沿道における住民・沿道における活動

鶴岡八幡宮から海に至る軸線となる若宮大路の環境や風格を保とうと、住民や地域のボランティア団体による美化活動が継続して行われている。昭和54年（1979年）発行の『ふるさとの思い出 写真集明大昭鎌倉』によると、戦時には、小学生が道路清掃を行っていた様子などが写真で残されており、鎌倉市民にとって、昔から若宮大路が特別な存在であったことがうかがえる。



写真 小学生の道路清掃(戦時中)

鎌倉のシンボルともいえる若宮大路やその周辺における活動の先駆けとしては、鎌倉同人会による松並木の保全活動が挙げられる。明治時代の終わり頃の若宮大路の絵ハガキには、巨木の松が鬱蒼と続く「松並木」の風景が記録されている。しかし、虫害による松枯れが急増したため、当時鎌倉でまちづくり活動をしていた鎌倉同人会（詳細は「別荘文化に由来する歴史的風致」に記載）は大正4年（1915年）から、踏み荒らされてしまった根方を玉石と芝で土寄せし、周囲を焼き丸太と太い針金で囲うなどの保護活動を開始した。大正12年（1923年）の関東大震災により若宮大路の松並木の大半が焼失してしまったことを受け、同会は大正14年（1925年）に若木100本を植栽し、さらに昭和6年（1931年）には、松の根方を守るための囲いを、鉄筋コンクリート製の柱と太い鉄製の鎖による防護柵に改修した。昭和30年（1955年）に人や自動車の往来が急増したため、若宮大路に歩道を作る計画が持ち上がり、防護柵の石柱は一部を除き撤去された。平成26年（2014年）から始まった段葛の改修工事の際、当時の石柱が発見され、段葛に記念碑として残されている。



写真 鎌倉八幡宮前松並木
(明治時代)



写真 鎌倉同人会による松並木防護柵の石柱跡(昭和55年(1980年))



写真 若宮大路の松

その後、若宮大路の松並木は、数本を残すのみとなってしまったが、近年、市民団体や地元町内会により松並木の植樹が行われ、往時を思わせるような

景色を見ることができるようになった。昭和 55 年（1980 年）の新聞記事には、当時豊島屋の社長であった久保田雅彦が豊島屋本店前の若宮大路沿道に自費で黒松を植えたことが書かれており、若宮大路の景観が地域の人に大切にされていたことが分かる。

こうした活動はその後も受け継がれ、昭和 49 年（1974 年）からは商店会メンバーを軸とした鎌倉みどりの会により若宮大路の桜並木の保全・若宮大路の美化活動が行われた。その功績を踏まえ、平成 13 年（2001 年）の緑の都市賞では、同会の長年の若宮大路周辺での緑化活動に対し、「都市緑化基金賞」を受けた。

現在は、さらに同じ志を持つ団体や企業などが加わり、若宮大路において定期的な清掃や植栽の手入れなどの美化活動が継続して実施されている。なお、若宮大路では、グリーンバード鎌倉などの市民等の有志による団体が、市のアダプトプログラムの登録を得て、清掃活動や花植え活動などを継続的に行っている。

若宮大路沿道では、これらの市民団体や地元商店街、地域の人々による清掃活動、美化活動を見ることができ、鎌倉の財産として若宮大路の景観や風情を残そうとする人々の思いを感じることができる。

（ウ）ぼんぼり祭

a 鶴岡八幡宮（段葛・参道）・小町通り

鶴岡八幡宮のぼんぼり祭は、毎年立秋の前日から 8 月 9 日まで、境内がぼんぼりのあたたかな光で照らされ、幻想的な光景を見ることができる。また、夕刻頃からぼんぼりを見ようと鶴岡八幡宮へ向かう人が多く集まり、若宮大路周辺は、賑わいを感じることができる。なお、鶴岡八幡宮のぼんぼり祭については、社寺の祭礼・行事であることから、「社寺における祭礼・行事・信仰にみる歴史的風致」（〇ページ）において詳しく記載している。



写真2-82 小町通りのぼんぼり祭

同時期に小町通りでも、地域の学生が書いたぼんぼりが掲出される。鶴岡八幡宮のぼんぼり祭は、小町通り沿道にも裾野が広がり、地域の賑わいを演出している。

b 御成通り

御成通りで行われるぼんぼり祭は、鶴岡八幡宮や小町通りとは異なり、毎年 7 月末の週末に開催される。ぼんぼりの柄は一般公募で集められた力作が揃い、約 260 枚の絵柄を使用した約 90 基のぼんぼりが通りを彩る。昭和 48 年（1973 年）から始まり、幻想的な夏の

夜を演出する。御成通りのぼんぼり祭では、祭りを協賛する店舗が気に入ったぼんぼりに店舗名の入った賞札を付ける。後日、賞札が付けられた絵柄の作成者には協賛の店舗の賞品が配られる。また、ぼんぼりの掲出だけでなく、昼間から子供向けのイベントが開催される。当時の写真からも、その盛況ぶりがうかがえる。

御成通りのぼんぼり祭は、鎌倉の夏の風物詩として地域の人々に親しまれており、祭りの時期には、昼には子供たちの楽しそうな声が聞こえ、夜には賑わう人々がぼんぼりの光でオレンジ色に照らされる光景が見られる。

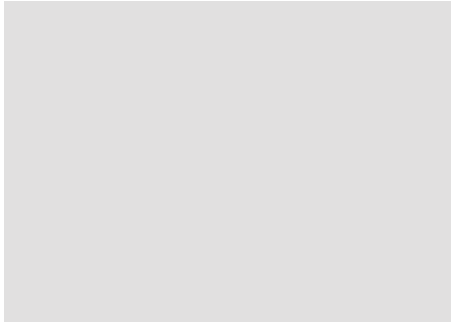


写真 御成通りのぼんぼり祭
(昭和 48 年(1973 年))



写真 御成通りのぼんぼり祭

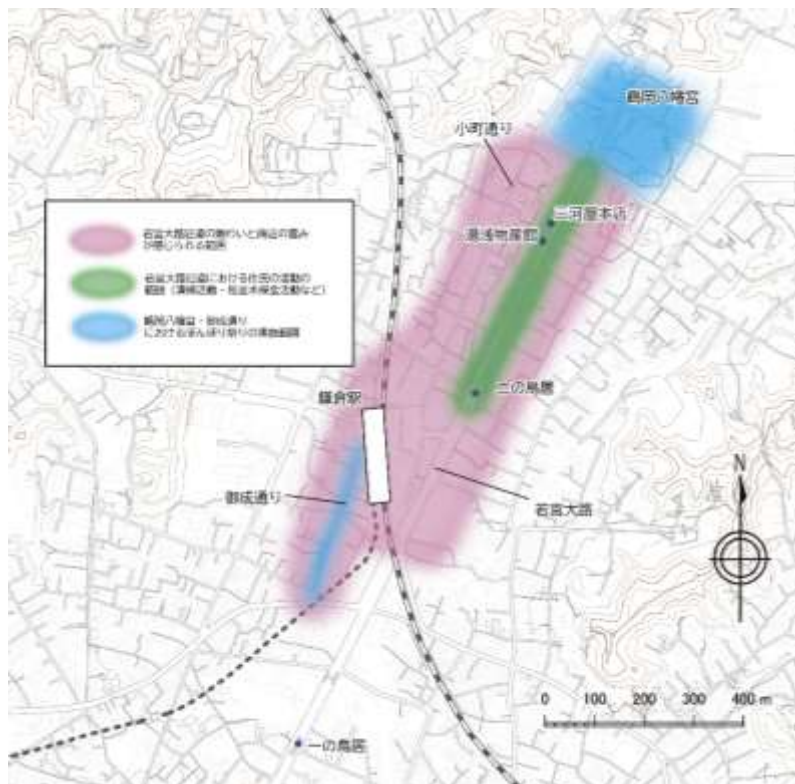


図 若宮大路周辺における営みの市街地への広がり

表 若宮大路沿道における営みに関する主な活動の年表 要差し替え

活動 種別	実施主体	大正9年以前 1920年以前	昭和5年 1930年	昭和15年 1940年	昭和25年 1950年	昭和35年 1960年	昭和45年 1970年	昭和55年 1980年	平成2年 1990年	平成12年 2000年	平成22年 2010年	令和2年 2020年	現在
販 わ い と 大 路 沿 道 の 営 み	各商店	湯浅物産館の土産物店としての商い											
		三河屋本店の酒屋としての商い											
		博古堂 鎌倉彫店としての商い											
		豊島屋 菓子店としての商い											
民 ・ 大 路 沿 道 に お け る 住 民 ・ 商 店 会 な ど の 営 み	鎌倉同人会	丸太等による松の保護活動											
		松の防護柵の改修											
	鎌倉みどりの会												
	アダプトプログラム 登録団体など												
ぼ ん ぼ り 祭 り	鶴岡八幡宮												
	鎌倉御成商店街協 同組合												

カ まとめ

このように多くの観光客が訪れる鎌倉駅東口から鶴岡八幡宮に至る地域には、参道である若宮大路を基軸として、格子状に路地が交わり、市景観重要建築物をはじめとする多くの人に愛される「鎌倉らしい建物」が存在している。新旧の建築物等が調和する形で多くの商店が軒を連ね、古くから観光地として発展してきた鎌倉の人々の営みの歴史を今に伝えている。その設えと営みは、通りを歩く人々を惹きつける魅力をもっている。

若宮大路沿道では、これらの歴史的建造物や鎌倉を代表する土産物店、鎌倉彫などの老舗などが立地し、現代的な店舗と一緒に並んでいる風情は日本遺産のストーリーにも描かれているような、モザイク画のような鎌倉の歴史、魅力を体感できる場所である。

鎌倉の夏の風物詩の1つである「ぼんぼり祭」は、鎌倉の風情を強く感じられるものであり、幻想的な情景は訪れる人に深い感銘を与えている。

また、若宮大路沿道の商いは、これとほぼ平行に走る小町通りや鎌倉駅前、鎌倉駅西口側の御成通りなどにも面的な広がりを見せ、観光客を対象とした土産物店・飲食店が多く立ち並び、年間を通じて賑わいをみせており、地域で営まれている商業活動はまさに活力を与え、首都圏屈指の一大観光都市として年間約1,600万人もの人々が訪れる鎌倉を支えている。

こうした若宮大路沿道における営みが調和することにより、訪れる人々にとっても、鎌倉ならではの歴史と暮らしが重なり合う歴史的風致が形づくられている。

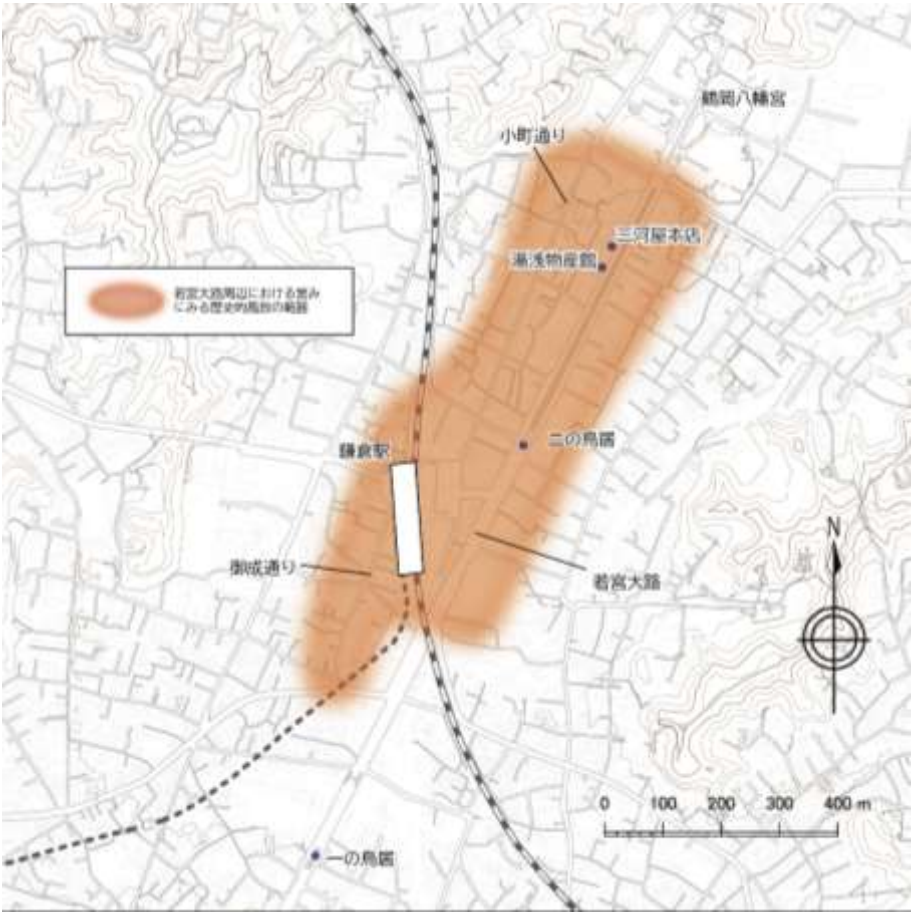


図 12 若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致の範囲

(4) 鎌倉遊山にみる歴史的風致

ア はじめに

「若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致」に記載したように、鎌倉は江の島参詣の折の通り道である江の島～金沢間の観光地として、近世の中期以降発展した。

江戸時代に入ると、貞享2年（1685年）成立の『新編鎌倉志』をもとに、江戸時代中期に作成された『鎌倉名所記』や『鎌倉絵図』といった案内書や絵図が庶民の間に広まり、鎌倉は遊山（行楽）の目的地として多くの人々に親しまれるようになった。これらのガイドブックやガイドマップに記載された社寺や旧跡は、遊山客の訪問によって徐々に「名所」として認識されていくようになった。

明治以降、開港地の横浜近郊にあることから、多くの外国人観光客が訪れた。『鎌倉絵図』をはじめとして、江戸時代のガイドブックは縦長の冊子が主流であったが、明治以降に横長の冊子に姿を変え、明治20年（1887年）に刊行された『鎌倉江嶋一覧』には、題名が英字で入れられるなど、多くの外国人が訪れたことがうかがえる。また、明治から昭和にかけて療養地、海浜保養の別荘地として栄えるなど、鎌倉は江戸時代の庶民の物見遊山・参詣としての対象から、別荘地・観光地として変化していった。鎌倉に訪れる目的が変わっていく中でも、江戸時代に名所として多くの人が訪れた社寺や史跡は地域の人々や関係者らによって今日まで大切に残されてきた。

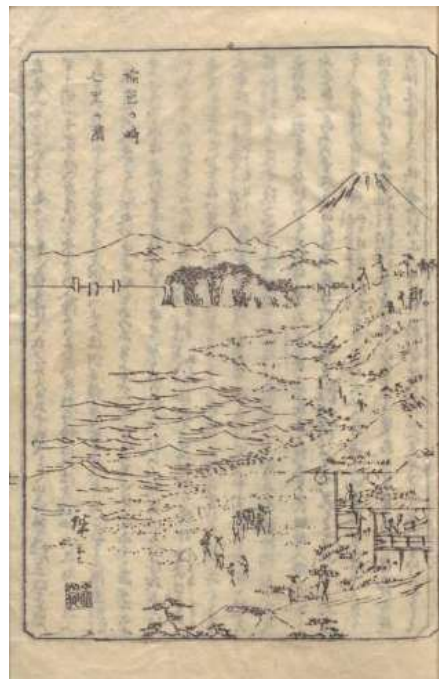


写真 鎌倉名所記
稲村つ崎 七里つ濱

イ 建造物

(ア) 社寺

『新編鎌倉志』や『鎌倉絵図』、その他の紀行文などに記載され、江戸時代の物見遊山の対象となっていた社寺のうち、今日まで残る社寺を一部紹介する。各建造物の詳細は第1章や「社寺における祭礼・行事や信仰にまつわる歴史的風致」、「海にまつわる歴史的風致」に記載している。

表 2-1 遊山の名所(社寺)

図中番号	名称	記載されている主な文献
1	英勝寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行 ³² 』他
2	浄光明寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
3	鶴岡八幡宮	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
4	八雲神社（大町）	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉日記 ³³ 』他
5	荏柄天神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記 ³⁴ 』他
6	銭洗弁財天宇賀福神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
7	佐助稲荷神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
8	由比若宮	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
9	葛原岡神社・日野俊基墓	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』他
10	熊野新宮	『鎌倉絵図』他
11	鎌倉宮・護良親王土牢	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀 ³⁵ 』他
12	甘縄神明宮	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
13	建長寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
14	円覚寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
15	高德院	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
16	本覚寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
17	虚空蔵堂	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
18	円応寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉記』他
19	宝戒寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
20	明王院	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
21	極楽寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
23	光明寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
24	覚園寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
25	長谷寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
26	杉本寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
27	安養院	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
28	寿福寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
29	浄智寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他

³² 寛政9年（1797年）成立。田良道子明甫著。

³³ 文化6年（1809年）成立。扇雀亭陶枝著。

³⁴ 万治年間（1658年～61年）頃成立。浅井了意著。

³⁵ 延宝8年（1680年）成立。自住軒一器子著。

図中番号	名称	記載されている主な文献
30	浄妙寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
31	小動神社	『新編鎌倉志』他
32	御霊神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
33	永福寺（永福寺跡）	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他

図中番号は図〇と対応している。

(イ)史跡・旧跡

a 切通

鎌倉七口と呼ばれた七切通の「名越切通」^{ななきりどおし}、「朝夷奈切通」^{あさひなきりどおし}³⁶、「巨福路坂」^{こぶくろ}、「亀ヶ谷坂」^{かめがやつ}、「仮粧坂」^{けはい}、「大仏切通」^{だぶつ}、「極楽寺坂切通」は、中世～近世にかけて鎌倉の出入口として、鎌倉を訪れる人にとって重要な目印となっていた。

『新編鎌倉志』で記載されていることはもちろん、『鎌倉絵図』においても多く描かれており、鎌倉市内外だけでなく、鎌倉を周遊するうえでも重要であったことが分かる。（それぞれの切通の詳細については、後述の「歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史的風致」に記載する。）



写真 朝夷奈切通

b やぐら

鎌倉の丘陵部や斜面に造られた横穴式の墳墓であるやぐらも名所として江戸時代に遊山の対象となった。

鎌倉時代草創期の有力御家人の一人である千葉常胤^{つねたね}の次男であった相馬師常^{そうまもろつね}の墓といわれる「相馬師常墓やぐら」は、『新編鎌倉志』や『鎌倉絵図』で紹介されている。

また、北条家最後の地と言われる「高時腹切りやぐら」は、「東勝寺跡」とともに『新編鎌倉志』で紹介され、その後刊行された多くの『鎌倉絵図』では「北条高時腹切やぐら」として記載されている。（詳細については、後述の「歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史



写真 相馬師常墓やぐら

³⁶ 「朝夷奈切通」の史跡の指定名称は「朝夷奈切通」であるものの、「あさひなきりどおし」と読む場合や、「朝比奈切通」^{あさひな}という表記を用いる場合もある。

的風致」に記載する。)

c その他の旧跡

鎌倉幕府ゆかりの屋敷跡などの旧跡は、建造物などの形としては、そのほとんどが中世の時代に消失しており、残ったものも近世時点で多くが消失している。しかしながら、源頼朝や北条家など鎌倉幕府との結びつきが強い旧跡は、往時をしのばせる場所として江戸時代の人々は多く訪れたと推察される。その証拠として、『新編鎌倉志』で取り上げられたことはもちろん、『鎌倉絵図』にも多く記載されている。

代表的なものとして、十一人塚を紹介する。それ以外の主な旧跡・名所は表〇に示す。

十一人塚は稲村ヶ崎から江ノ電「極楽寺駅」へ向かう道沿いにひっそりとたたずむ供養塔である。この地域には、元弘3年(1333年)の新田義貞による鎌倉攻めの際に、極楽寺坂切通の北条側の守りを突破した新田軍の大將の大館宗が、その後の猛反撃により、奮戦むなしく最後まで残った11人とともに討死したという話が残っている。この十一人塚は、そのときの11人を弔うため設けられた。鎌倉市指定の史跡である。

敷地内には、供養塔のほかに昭和6年(1931年)3月に鎌倉町青年団により建てられた史跡指導標という石碑が建っている。高さ約6尺、幅約2尺5寸の仙台石で作られている。一覧表で紹介した旧跡や名所にあったであろう建造物は、前述したようにすでに失われてしまっているが、鎌倉のまちの至るところでこのような石碑を目にすることができる。江戸時代の人々が巡っていた旧跡・名所の説明板として、鎌倉独自の景観を生み出している。



写真 十一人塚



写真 十一人塚の史跡指導標

表 名所(史跡・旧跡等)

図中記号	名称	記載されている主な文献
a	和賀江嶋	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
b	段葛	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
c	北条高時腹切りやぐら	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
d	十一人塚	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他

図中記号	名称	記載されている主な文献
e	稲村ヶ崎	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『鎌倉紀』 他
f	星ノ井	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『東海道名所記』 他
g	稲瀬川	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『鎌倉紀』 他
h	阿佛邸旧跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『三浦紀行 ³⁷ 』 他
i	大蔵幕府旧跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『諸国道中金の草鞋』 他
j	盛久頸座	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『東海道名所記』 他
k	東御門	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
l	西御門	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『東海道名所記』 他
m	永福寺跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『鎌倉紀』 他
n	若宮大路幕府旧跡	『諸国道中金の草鞋』 『東海紀行 ³⁸ 』 他
o	安達盛長邸跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『鎌倉紀』
p	畠山重忠邸跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』
q	二十五坊跡	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
r	歌ノ橋	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
s	夷堂橋	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
t	筋替橋	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
u	乱橋	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』 『相中紀行』 他
v	相馬師常墓やぐら	『新編鎌倉志』 『鎌倉絵図』
w	和田塚	『鎌倉絵図』

図中記号は図〇と対応している。

ウ 活動

(ア) 鎌倉遊山

江戸時代、鎌倉は江戸から気軽に訪れることのできる遊山の地として親しまれ、多くの人が鎌倉を訪れた。主な旅の経路は、江の島から腰越、七里ガ浜、稲村ガ崎、長谷を経て若宮大路へと至り、さらに朝夷奈切通を通過して金沢方面へと抜ける経路や、江戸から東海道を經由、または船で金沢まで来て、金沢から朝夷奈切通を通り、鎌倉に入り、江の島へ至る経路であった。これらの道筋は古くから参詣・行楽の旅路として多くの人々が行き交ったルートであり、江戸時代の紀行文に繰り返し登場する風景である。

寛政9年（1797年）成立の田浦道子明甫の『相中紀行』には、「稲村ヶ崎の出さきを袖ヶうらと云、様々の旧跡あり。いなむらの崎の茶屋に休。ばゞが茶屋といふ由。ここにて鎌倉の絵図をひさぐ。家とじ我は顔に古都の講談す。」とあり、文化6年（1809年）成立の扇雀亭陶枝の『鎌倉日記』にも、「よこてが原なんどいへる所は、いにしへの戦場なる

³⁷ 享和元年（1801年）成立。一鶴堂白英著。

³⁸ 安政6年（1859年）成立。小田切日新著。

由、土人（十一人カ）の口（塚カ）ほそき道の片はらに、小高くつきたるうへに、石の印をたてあり。」と記されているように、中世鎌倉の歴史や文化、風景を楽しむ様子が数多く描かれている。

現在でも、当時の人々が歩いたとされる道筋には、葛飾北斎や歌川広重などが描いた富士山と江の島を望む風光明媚な景観や、数々の紀行文、『新編鎌倉誌』、『鎌倉名所記』、『鎌倉名所絵図』等の文献に書かれた鶴岡八幡宮をはじめとする歴史的な社寺、切通などの史跡・旧跡が数多く点在している。これらを巡りながら、往時の旅人の心に思いを馳せることができる環境が江戸時代から続いている。

明治時代以降、横須賀線や江ノ島電鉄、路線バスといった交通機関の整備により、日帰りで訪れる人々も増え、季節の見頃の花々が咲く社寺巡りや鎌倉のハイキングコース散策、別荘建築めぐりなどテーマ別観光の多様化が進展し、遊山から観光へと形は変化しながらも、多くの人々が鎌倉を訪れている。さらに、明治時代から広がった海浜レジャーの地として、海水浴や磯遊び、海辺の散策といったレジャー活動と古くからの社寺や史跡、別荘建築物めぐりを組み合わせる来訪者や、江の島、富士山を望む海辺の景観を楽しむ来訪者も見ることができる。

季節ごとに表情を変える緑や海の景観と、長い時を経て現在に伝わる社寺等の歴史的遺産によって、各所において鎌倉ならではの歴史や自然に触れることを楽しむ人々を見ることができる。



図 富士三十六景 相州七里浜 葛飾北斎
天保元年(1830年)～天保3年(1832年)頃



図 富士三十六景 相模七里ヶ濱
歌川広重 江戸時代

(イ) 歴史的遺産の顕彰・保護活動

中世の時代から現在まで残った社寺や史跡の名所の数々は、美しい緑や海岸地域の景観とともに多くの人々を引きつけてきた。しかし、来訪者が求める鎌倉固有の景観や歴史的資源は、必ずしも常に安泰であったわけではなく、何度も喪失の危機に見舞われてきた。

武家の都として栄えた鎌倉は、鎌倉幕府の滅亡や室町時代の鎌倉府の消滅によって荒廃し、明治時代の神仏分離令による廃仏毀釈の風潮により社寺は大きな打撃を受けた。加えて、関東大震災では多くの歴史的建造物が損壊し、貴重な文化資源の多くが失われた。

このような危機的状況に直面しながらも、今もなお中世の趣や自然、景観が残っていることは、各時代における地域の人々や関係者の保全活動によるものが大きい。

『新編鎌倉志』に紹介され、その後江戸時代の遊山の対象となった名所では、鎌倉の歴史が風化しないよう顕彰活動が行われ、その場所の案内や歴史などを刻んだ史跡指導標などが建てられた。これらは、大正6年(1917年)から昭和31年(1956年)の間に鎌倉町青年会³⁹や鎌倉町青年団、鎌倉同人会などの民間の団体により、鎌倉に対する郷土愛の具体化と鎌倉の発展を目的として建立された。大正時代以降に建立された後、現在まで定期的に地域の人々やボランティアによる周囲の清掃や草刈りが行われており、風化など経年劣化は見られるが、十一人塚をはじめとして、建立当初の姿を残しているものが多い。



写真 十一人塚の史跡指導標
(昭和48年(1973年))



写真 十一人塚の史跡指導標

³⁹ 鎌倉町青年会は、鎌倉に住む人々により結成され、その後、「鎌倉町青年団」、「鎌倉市青年団」と名称を変えながら、鎌倉の教育、社会奉仕、文化振興など多岐にわたる活動を展開した。

近年では、NPO法人鎌倉ガイド協会が主体となり、史跡指導標を3基建立している鎌倉同人会とともに、史跡指導標の文字の塗料を塗りなおすなど、その保全に努めている様子が折々で見られる。

このような歴史的遺産の顕彰・保全活動により、鎌倉を訪れた人々は、江の島から稲村ヶ崎、由比ヶ浜といった海沿いの道筋から、若宮大路、朝夷奈切通に至るまで、江戸時代の遊山客が親しんだ名所やその歴史を知ることができるとともに、それらを大切を守ろうとした先人たちの思いに触れることができ、江戸の遊山文化から現在までの鎌倉の重層的な歴史を体感することができる。



写真 史跡指導標の清掃活動

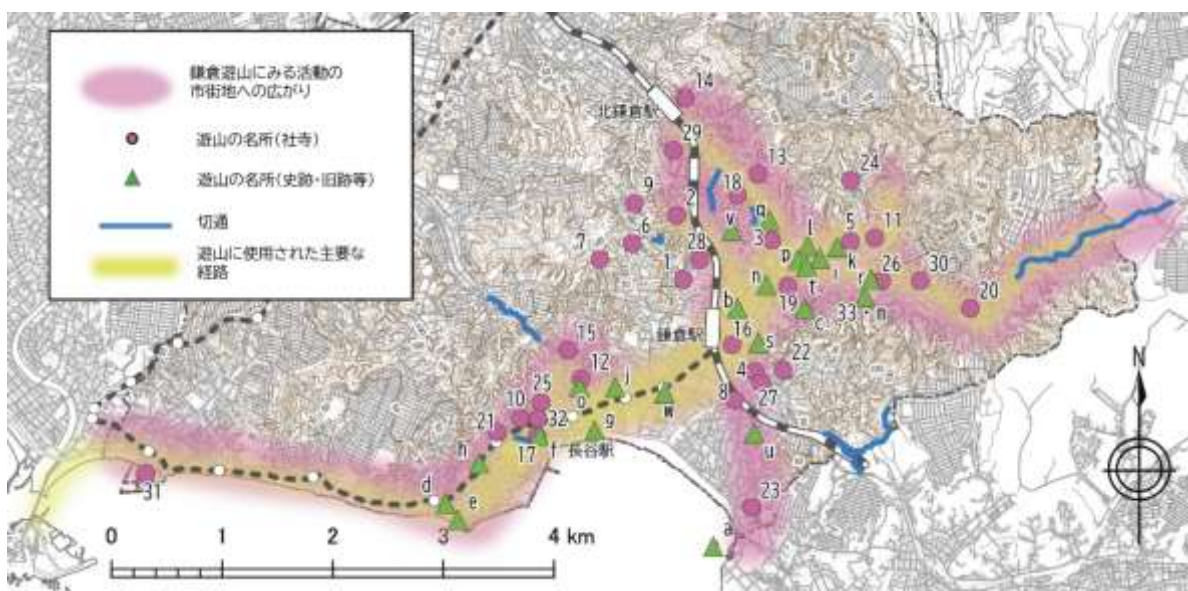


図 鎌倉遊山にみる活動の市街地への広がり(仮)

社寺と史跡・旧跡等における図中番号・記号はそれぞれ表○と表○に対応している。

エ まとめ

近世以降、庶民による鎌倉遊山の広がりを通じて鎌倉の景観や数多くの社寺・史跡が名所として親しまれるようになった鎌倉では、そこに残る歴史的遺産や昔から変わらない風光明媚な景観を見ることができ、今でも往時の遊山を体感できる。すでに姿を消してしまった史跡も少なくないが、大正期以降に設置された史跡指導標などにより、かつて中世に武家の都として栄えた鎌倉の歴史や記憶を、現在の私たちに語り継いでいる。

これらの歴史的遺産が残っている背景には、その歴史を顕彰し、後世へ伝えていこうとする人々の思いが込められており、その精神は、鎌倉に住む多くの市民に受け継がれ、市民主体の保全活動につながっている。

江戸時代の人々が遊山を通じて味わった鎌倉の自然や風情は、現代においてもなお、変わらぬ魅力として体験することができ、鎌倉独自の歴史的風致を形成している。

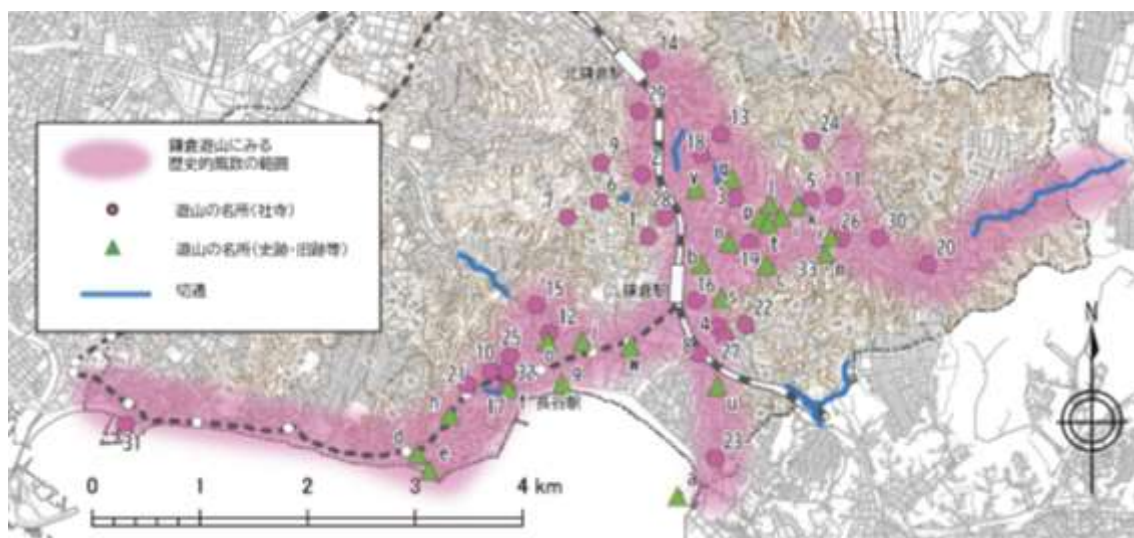


図 鎌倉遊山による歴史的風致の範囲

社寺と史跡・旧跡等における図中番号・記号はそれぞれ表○と表○に対応している。

(5) 周遊観光にはじまる「江ノ電」にみる歴史的風致

ア はじめに

風光明媚な湘南のまちをゆったりと走る江ノ島電鉄（以下、江ノ電と記す）の歴史は、明治 35 年（1902 年）9 月 1 日に江之島電気鉄道（現江ノ島電鉄株式会社）が開業したことに始まる。

以来 120 年以上にわたり、江ノ電は単なる交通手段を超え、地域の暮らしと観光、そして文化を支える存在として、鎌倉の風景の中に溶け込んできた。



写真 まちなかを走る江ノ電

イ 建造物

(ア) 鉄道関連施設

江ノ電の開業当初の軌道は、東海道線の藤沢停車場と江の島を結ぶ藤沢～片瀬間 3.42km であったが、延伸工事を進め、明治 36 年（1903 年）6 月の片瀬～行合（^{ゆきあい}現七里ヶ浜付近）間開業を皮切りに、追揚（^{おいあげ}現七里ヶ浜～稲村ヶ崎間）・極楽寺・大町（^{だいぎょうじ}現和田塚～鎌倉間）と延伸された。

明治 43 年（1910 年）11 月 4 日には藤沢～小町（鶴岡八幡宮二の鳥居前）間 10.27km 全線が開通したが、当時の終点は若宮大路の大巧寺付近にあり、現在のように鎌倉駅西口へ乗入を開始したのは、昭和 24 年（1949 年）になってからであった。この当時から変わらぬ単線の軌道は、現在藤沢駅から鎌倉駅までの全長 10.0km で、そのうち約 6 km が鎌倉市内を通っている。

江ノ電の鉄道設備は、随時新しいものに更新されており、開通当初から残るものは少ない。しかしながら、音無川（稲村ヶ崎）、行合川（七里ヶ浜）、神戸川（^{こうど}腰越）などの川や水路に架かる橋梁や暗渠・開渠などの構造物は長く江ノ電の運行を支えるものとして残っているものもある。

神戸川橋は、神戸川にまたがる国内で唯一の鉄道と道路との併用橋である。明治 36 年（1903 年）に架けられた橋梁が、昭和 4 年（1929 年）に、道路との併用橋に改築された。竣工当時の写真と比較し、橋脚や桁は改築当初のものが現在も残っていることが分かる。構造は、橋台、橋脚の基礎が杭打コンクリート造りで、本体は鉄筋コンクリート造りである。



写真 神戸橋(昭和 42 年(1967 年))

音無川橋梁は、音無川にまたがるもので、明治 40 年（1907 年）8 月 16 日の開業に合わせて整備され、江ノ電の内部資料によると、昭和 59

年（1984年）に架け替えられたものの、橋台の一部は建築当時のものが残っている。兩岸に短い橋台を設けた桁橋であり、江ノ電、橋梁、音無川と周辺の緑が一体となった風景を見ることができる。

行合川橋梁は、明治36年（1903年）4月に完成し、大正13年（1924年）に補強工事が行われた後、昭和22年（1947年）、昭和30年（1955年）に路線近代化計画の一環で架替工事が行われ、現在に至る。

極楽寺駅の軌道の付近には、暗渠となっている箇所があり、江ノ電株式会社の内部資料によると、極楽寺駅付近の暗渠は、明治42年（1909年）に竣工し、修復が行われ現在に至る。

大町開渠は江ノ電の内部資料によると、昭和40年（1965年）架け替えで、橋台は当時のものと考えられている。

橋梁や暗渠・開渠といった構造物以外にも、手動遮断機などが軌道上の構造物として残っている。

このように、軌道についてはレール等ほとんどの設備は更新されているものの、昭和38年（1963年）の航空写真から分かるように、軌道の位置はほとんど変わらず、また、軌道沿線の水路をまたぐ橋梁や暗渠、手動遮断器などの一部の設備は、部材の状態からも相応の年代を経ていることから、50年以上前から昔のままの姿を残していることが分かる。



写真 行合川の橋梁
(昭和42年(1967年))



写真 手動遮断機(鎌倉駅～和田塚駅)
(昭和48年(1973年))



図 江ノ電の軌道の航空写真(全体図)
図中の番号①～④はそれぞれ図〇～〇の範囲を示している。

①神戸橋



写真 神戸橋の航空写真と江ノ電の軌道(点線)
現在(左)と昭和 38 年(1963 年)(右)

②行合川橋梁

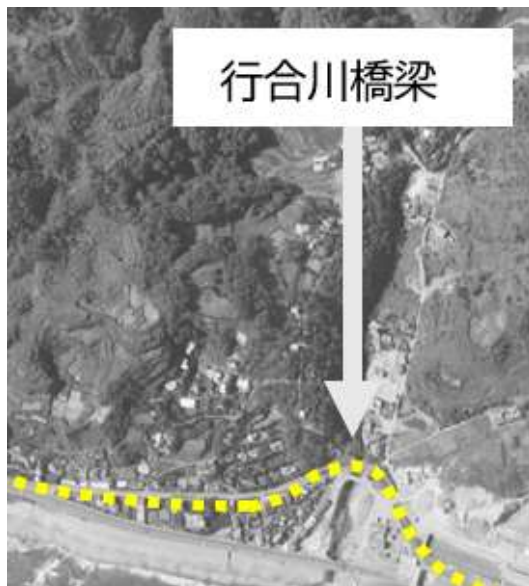


写真 行合川橋梁の航空写真と江ノ電の軌道(点線)
現在(左)と昭和 38 年(1963 年)(右)

③音無川橋梁～極楽洞

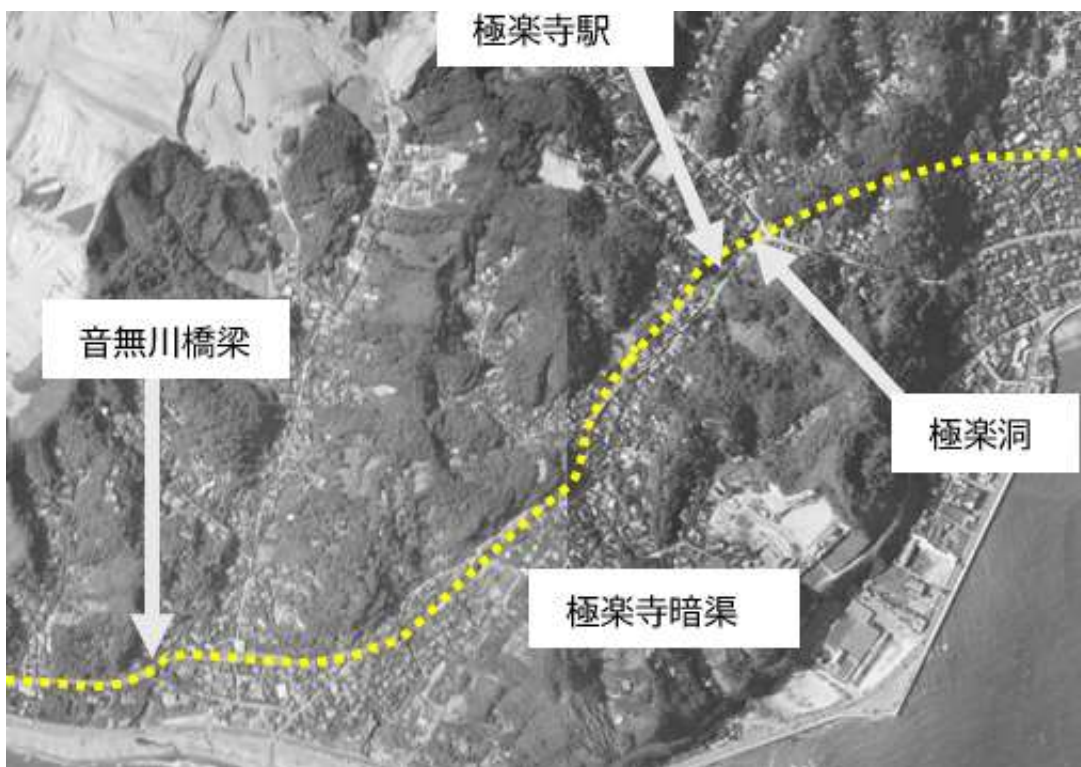


写真 極楽寺駅周辺の鉄道関係構造物の航空写真と江ノ電の軌道(点線)
現在(上)と昭和 38 年(1963 年)(下)

④手動遮断機・大町開渠

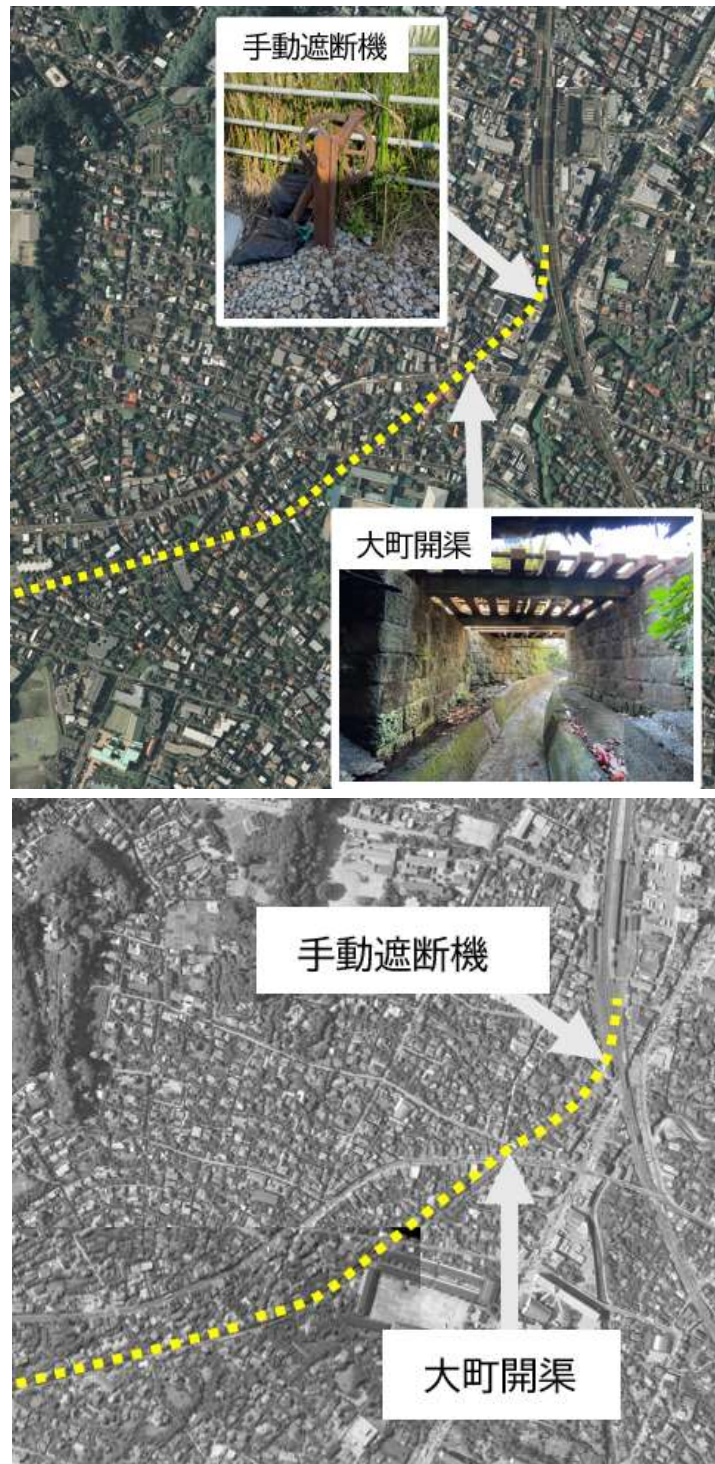


写真 鎌倉駅・長谷駅周辺の鉄道関係構造物の航空写真と江ノ電軌道(点線)
現在(上)と昭和 38 年(1963 年)(下)

(イ) 極楽洞^{ごくらくどう}

煉瓦造りの坑門が特徴的な江ノ電唯一のトンネルである「極楽洞」は、明治 40 年（1907 年）8 月 16 日に開業した区間のうち極楽寺～長谷間に位置する全長 209m に及ぶ鉄道トンネルである。この工区の工事は、明治 39 年（1906 年）に起工され、用地買収のために一時中断されたものの、翌年の明治 40 年（1907 年）に開業した⁴⁰。坑門のデザインは、明治時代の煉瓦・石積みによるトンネルの基本的な要素を引き継いでおり、胸壁（パラペット）^{きょうへき}に扁額^{へんがく}をはめている。扁額は極楽寺側に曾禰荒助^{そねあらすけ}の揮毫^{きごう}による「極楽洞」、長谷側に松方正義^{まつまさよし}の揮毫による「千歳開道^{ちとせ}」の文字が掲げられている。当時、曾禰荒助は片瀬に、松方正義は由比ヶ浜にそれぞれ別荘を構えていたことから、地元の有力者の縁で書き分けられたと推測される。「極楽洞」は建設当時の原型をとどめている極めて希少な例であることから、市景観重要建築物等に指定されており、極楽寺駅に隣接する桜橋から極楽洞を見下ろす景観は、古都鎌倉に近代化の息吹を伝えた江ノ電の歴史をしのばせている。



写真 極楽洞



写真 鎌倉市図書館デジタルアーカイブ「極楽寺トンネル」
(昭和 41 年(1966 年))

(ウ) 極楽寺駅

江ノ電は、藤沢駅から鎌倉駅間の総延長 10.0 km を約 37 分間で運行する。単線であり、全線開通時に 39 駅だった路線内駅数は現在 15 駅となっている。街中を走る路面電車のような区間もあり、信号待ちやカーブも多いため、平均速度は時速 20 km 程度となっており、ゆっくりとした速度で沿線の景色に溶け込みながら走る姿は鎌倉を代表する歴史的遺産の一つといえる。車両は 2 両または 4 両編成であるため、駅舎も総じてそのサイズに合わせて小さいことなども個性的であり、「極楽寺駅（明治 37 年（1904 年）開業）」と「鎌倉高

⁴⁰ 平成 25 年（2013 年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

校前駅（明治36年（1903年）開業）」の2つの駅舎は運輸省（現国土交通省）関東運輸局管轄内の特徴ある駅を選定した「関東の駅100選」に選ばれるなど、江ノ電の駅舎を代表するものといえる。

特に、極楽寺駅は、明治37年（1904年）の開業で、平成31年（2019年）に新駅舎を竣工し、駅前の公衆トイレ・広場の整備がなされているものの、旧駅舎はモニュメントとして保存されている。昭和40年（1965年）の写真からも、旧駅舎が保存されていることが分かる。旧駅舎は、平屋建ての木造建築で、現在は使われていないが、開業当時の窓口なども残されている。谷戸の緑に包まれて佇む駅舎は風情や安らぎが感じられ、鎌倉を代表する景観を形成している。その周辺には、前述の極楽洞をはじめ、極楽寺、成就院、虚空蔵堂、星ノ井、御霊神社など、観光客に人気の見どころも多い。

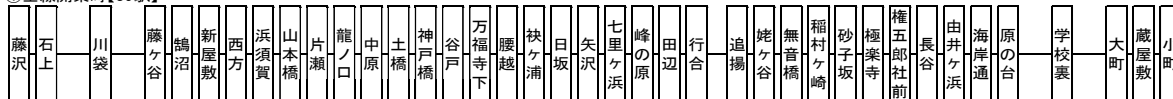


写真 極楽寺駅
(昭和40年(1965年))

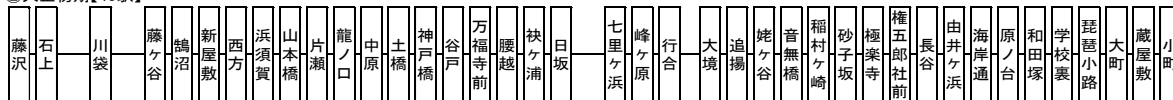


写真極楽寺駅(旧駅舎)

①全線開業時【39駅】



②大正初期【40駅】



③昭和初期【39駅】



④現在【15駅】



※駅については、「昇降場」、「停留所」、「駅」など、歴史上様々な表現が使われているが、ここでは全て「駅」とした。

図 江ノ電の駅の変遷

ウ 活動

江ノ電は 120 年以上にわたり、住民・観光客の移動手段として人々を輸送してきた。藤沢で東海道線、大町（鎌倉）で横須賀線と両終点で鉄道院線（現 JR 東日本線）と接続し、沿線全域が観光地、別荘地という好条件に恵まれていたこともあり、明治 42 年（1909 年）7 月 1 日からは鉄道院との間で片道乗車券を発売、9 月 11 日からは、往復乗車券及び回遊乗車券による連帯運輸を開始している。

このことは、明治 42 年（1909 年）7 月 30 日の「横浜貿易新報」（現神奈川新聞）に、「鉄道院にては、平民的避暑旅行を企て 8 月 1 日の日曜日より毎日曜毎に江の島鎌倉遊覧回遊列車運転するに取極めたるが、是れに付き江の島電鉄会社にては割引券を発売し之れと連絡せしめ…」と掲載されていることから分かる。また、同記事によると「江の島鎌倉遊覧回遊」にあたり、「鎌倉由井ヶ浜及び片瀬海岸へ休憩所を設け海水浴を為す人々の便宜に供し、余興には煙火を打ち揚げ蓄音器を備え置き及び紀念の為め団扇若くは扇子を会員に頒つといふ。」とあり、内閣の直属機関であった鉄道院が積極的にこの地域への観光を推し進めていたことがうかがえる。



写真 七里ヶ浜に沿って走る江ノ電
（明治末～大正）



図 路線図の絵葉書（明治 44 年）

その後、戦後の高度経済成長の中で、全国各地のローカル電車が周辺の道路開通やバス路線の整備、国民のマイカー指向に押されて苦境に追い込まれ、次々と廃止されていく中、江ノ電もこの波にのまれ、一時は廃止論まで浮上するようになっていた。しかし、鎌倉はこの時期に住宅地としての人気が高まり、沿線に住宅地が増えたことで道路事情に課題を抱えるようになったことから、定時性の高い鉄道が再び見直され、江ノ電は息を吹き返した。

現在の江ノ電は、朝夕の通勤・通学時間帯に沿線住民や学生などが、また平日の昼間や休日には修学旅行生や観光客が年間を通じて利用するなど、昼夜を問わず多くの利用客で賑わっており、地域の人々の足として、また、観光鉄道として鎌倉らしさを形作る大きな要素である。

緑色と白で塗装されたレトロな車両が富士山や腰越、七里ガ浜、稲村ガ崎の海岸線、御霊神社などの沿線の社寺、鎌倉の山々を背景に、あるいは民家の間をすり抜けて走る姿は市民や来訪者に鎌倉らしい情緒を感じさせる景観の一つとなっている。平成 26 年（2014 年）には「明治期の日本における鉄道黎明期^{れいめいき}の雰囲気^きを今に伝え、地元密着型の軌道として湘南の風景の一部となっている貴重な土木遺産」として、公益社団法人土木学会が選出する「2014 年度選奨土木遺産」にも選出された。

また、通常の車両の運行以外で、特別なデザインや広告を施した車両が運行することがあり、その姿もまた鎌倉独自の景観を生み出している。昭和 6 年（1931 年）に江ノ電開業 30 周年イベントの一環として運行された初の納涼電車は、夏季限定の青色の電車で、運転席のガラス窓以外の窓は無く、風通しを良くしていた。観光客は納涼電車に乗り、由比ガ浜と藤沢市片瀬の海水浴場を行き来することができることから、運行を開始するや否や、たちまち人気を博し、鎌倉の夏の風物詩として定着した。納涼電車は、その後戦争で中断してしまったが、平成 4 年（1992 年）に 300 形の車両に納涼電車のデザインを施し、再現された。また、昭和 57 年（1982 年）の資生堂の広告から始まる広告電車は、今でも数多く運行されている。近年では、沿線にある長谷寺の本尊造立 1300 年を記念し、車内を極楽土と境内の枯山水をイメージしデザインされた「観音列車」が運行されるなど、地域との繋がりのある取り組みにも発展している。これらの車両が走る姿もまた、鎌倉らしい風景として、地域の人々や鎌倉を訪れた人々に親しまれている。



写真 御霊神社前を通る江ノ電



写真 納涼電車(銀波号)
(昭和 12 年(1937 年))



写真 観音電車
(令和 3 年(2021 年))



写真 特別仕様の電車
(令和 7 年(2025 年))

江ノ電が地域の交通手段だけでなく、観光鉄道として根付いたことは、近世から鎌倉や江の島が遊山の地として人々の間に定着していたことも一つの理由として挙げられる。既に「若宮大路周辺における商いにみる歴史的風致」(〇ページ)で記載したとおり、七里ヶ浜から海を挟んで江の島と富士山を望む景観は近世の様々な浮世絵に描かれた。江ノ電の線路が七里ヶ浜を臨む海岸線と並行に敷設されていることによって、稲村ヶ崎駅から腰越駅へと向かう車窓からは、目の前に広がる相模湾、その東に江の島や富士山を望むことができ、今も近世の浮世絵と同じ構図を電車に乗りながら楽しむことができる。



図 歌川広重『相州江のしま詣の図 七里が浜真景』(弘化年間(1844～1848年)頃成立)



写真 七里ヶ浜に沿って走る江ノ電

さらに、鎌倉市内の駅から腰越駅まで全ての駅付近に観光名所が所在しており、「鎌倉

遊山にみる歴史的風致」(○ページ)で記載したような江戸時代の人々が楽しんだ鎌倉遊山の周遊観光ルートを、江ノ電に乗って楽しむことができる。

ゴールデンウィークや紫陽花の時期など鎌倉の四季折々で、江ノ電に乗車するための観光客が列を成す光景が見られ、単なる移動手段ではなく、江ノ電に乗ること自体が一種の観光となっていることが分かる。



図 周遊観光にはじまる「江ノ電」に関する活動の市街地への広がり(仮)

エ まとめ

風光明媚な鎌倉の景観の中を走り抜ける江ノ電は、車窓から刻々と移り変わる海や山の景観を楽しめるほか、駅舎、トンネル、橋梁などの個性ある建造物や車両が調和し、独自の魅力を醸し出している。こうした景観と一体となった鉄道の姿は、沿線に暮らす住民にとっては日常の景観であり、来訪者にとっては鎌倉らしさを体感できる象徴的な存在となっている。

江ノ電は観光と日常、景観と暮らし、まちづくりと交通の接点としてこの地に深く根付いており、鎌倉の歴史的風致の一つを形成する存在として、今も人々に愛され続けている。



図 周遊観光にはじまる「江ノ電」にみる歴史的風致の範囲図

コラム 地域から愛され続ける車両“タンコロ”

江ノ電では沿線住民の足の確保と観光客の輸送を円滑に行うため、増車対応が求められてきた。これらの需要増に対して、昭和 46 年（1971 年）頃までは、既存 100 形車両の改良や他の電鉄から譲り受けた旧車両を江ノ電に就役させることが多かったが、さらなる需要増が見込まれ、その後、新車両の導入が進められた。



写真 100 形車両(タンコロ)

50 年にわたって活躍した 100 形車両（通称「タンコロ」）のうち、鎌倉市に寄贈された一車両は、鎌倉海浜公園において保存され、公園のシンボルとして人々に親しまれており、江ノ島電鉄株式会社が所有する一両は極楽寺の検車区においても動態保存されている。

平成元年（1989 年）から極楽寺検車区で開催される「タンコロまつり」は、鉄道ファンだけでなく、江ノ電の公式キャラクター「えのん」に会うことを目的とした沿線に住む親子連れなどで大変賑わっている。

コラム 江ノ電廃線の危機とメディアで描かれた江ノ電

昭和 27 年（1952 年）頃、自家用車を保有している人は少なく、バス利用者が多かったため、江ノ電を廃線にする計画が浮上した。しかし、昭和 15 年（1940 年）頃になると自家用車の所有者が増え、渋滞などの課題が発生し、バス事業にもそれらの課題が波及した。また、沿線に住宅地が増えたことや、江ノ電沿線を題材としたテレビドラマの影響もあり、江ノ電の乗客は増加に転じ、廃線計画は撤回され、新型車両 1000 形の導入に繋がっていく。その後は「観光電車」として乗客がさらに増加し、人々の移動に不可欠な存在なものとしての存在感を確立した。

具体的には、日本テレビ系ドラマ「俺たちの朝」の放映や、NHK「新日本紀行」で「湘南・電車通り」として江ノ電が取り上げられたことをきっかけとして、江ノ電が再度注目されるようになった。「俺たちの朝」は、極楽寺駅とその周辺が舞台となった。

近年では、フジテレビ系ドラマとして「最後から二番目の恋」が放映され、続編・続々編までが制作された。また、東宝映画「海街 diary」、「Destiny 鎌倉ものがたり」など、沿線や江ノ電そのものがモチーフとなった作品が公開され、それらの影響により、従来の社寺参拝を目的とした観光だけではなく、ロケ地を巡るロケーションツーリズムという新たな観光スタイルも生まれている。

コラム 文化人と江ノ電

湘南の風景とともに走る江ノ電は、鎌倉・由比ヶ浜の地域文化に深く刻まれた歴史の一部である。江ノ電沿線には、明治から昭和にかけて多くの文化人が住み、鎌倉の情景に加えて、江ノ電もその作品に描かれている。

鎌倉に長く住んだ俳人・高浜虚子が「波音の 由比ガ濱より 初電車」と詠んだのは、波に寄せる音とともに走る電車の音が、暮らしの息遣いと詩情とを結びつけた瞬間である。

この一句は虚子旧居近くに句碑として残され、風景としての江ノ電が時間を超えて受け継がれている。

太宰治の短編『狂言の神』には、江ノ電に乗った描写がある。主人公が入水を図ったのちに「ふらふら鎌倉行の電車に乗った」、「ごっとな、ごっとな、のろすぎる電車にゆられながら…」と、主人公の心の静謐でも激情でもない感情と江ノ電のゆったりと走る様が混ざり合い、象徴的に描かれている。

鎌倉には、高浜虚子や太宰治をはじめ、多くの文化人が住み、訪れ、創作の場としてこの沿線の風情を愛した。当時と変わらない姿で走り続ける江ノ電は、文化人たちが見たであろう景色を今に残し続けている。



写真 高浜虚子句碑と江ノ電

(6) 別荘文化に由来する歴史的風致

ア はじめに

明治時代から大正時代にかけて、避暑・避寒・保養の適地として知られるようになった鎌倉では、この地に別荘を構えた貴顕紳士の中で生まれた価値観が広がり始め、知識、道德、習慣、作法、生業、芸術といった人々の精神や営みに大きな影響を与えるようになった。

別荘地化に端を発し、地域固有の自然的・歴史的背景や人的・物的交流を通じて洗練されたこれらの文化は、鎌倉のまちの発展に大きく寄与した「別荘文化」といわれており、現代の鎌倉に住まう人々の趣向やライフスタイルにも、その諸相を見ることができる。

イ 別荘文化の背景

(ア) 別荘地としての鎌倉

明治9年(1876年)、東京医学校に招かれたドイツのエルウィン・ベルツ博士は、予防医学の観点から「保養の思想」を普及させた医師であり、早くから海浜保養地(別荘地)としての湘南の地域特性を認めた一人であった。ベルツは明治13年(1880年)の日記に、健康管理を依頼されていた知人の子供たちを片瀬へ海水浴に行かせたことや、七里ヶ浜の海岸が自分にとっては日本で一番美しい地点であると感じていることなどを書き残している。

また、ベルツ博士が招かれた東京医学校で当時校長を務めていた医政家の長與専斎は、明治17年(1884年)に鎌倉の海を海水浴の適地として紹介するとともに自身も由比ガ浜に別荘を持ち、明治20年(1887年)には海浜のサナトリウムである「かいひんいん海濱院」の建設に深く携わるなど、海浜保養を推奨した。



写真 由比ヶ浜(明治時代)



写真 三橋旅館

当時の海水浴は、医療行為として「潮湯治」^{しおとうじ}とも呼ばれ、決まった時間に海に入ることを繰り返すというものであったが、明治 18 年（1885 年）に、長谷で営業していた三橋旅館が「海水浴御馳走」なる広告を「東京横浜毎日新聞」に掲載し、明治 21 年（1888 年）には、前年に療養所としてオープンした「海濱院」が「海濱ホテル」へ衣替えすると、商売として海水浴客を受け入れる体制が整い、医療としての海水浴は瞬く間にレジャーとして定着していった。



写真 海濱ホテル

当時この地域は、水の便が悪く農業には不向きとされ、価値の低い土地であったが、小高く展望が良いこと、松林が陽を遮って涼風を送ってくれること、何より海水浴に便利なこと等夏向きの別荘地としては適地であり、次第に土地の価値が見直されるようになっていった。

さらに、明治 20 年（1887 年）に東海道線横浜・国府津駅間が開通し、明治 22 年（1889 年）に当時軍港のあった横須賀までの連絡路として横須賀線が開業すると、土地の利用価値が一気に高まり、明治 32 年（1899 年）には、鎌倉駅の近傍に御用邸が造営されたこともあいまって、東京に住まう政界、財界、官僚、軍人、皇族、華族などが競って別荘を構えるようになった。現存する鎌倉文学館（旧前田家別邸）、鎌倉市長谷子ども会館（平成 30 年（2018 年）4 月閉館、（以下、旧諸戸邸（旧鎌倉市長谷子ども会館）という。）、旧華頂宮邸、古我邸（旧 ^{こが} 荘邸 ^{しょうてい}）などは、その代表的な建物であり、この他にも往時をしのばせる別荘建築が数多く残されている。

また、別荘地としての人気が高まる中、一時的な滞在とは別に、この地を常住の地を選び、新しく転入してくる富裕層も含めて、彼らはいつしか「別荘族」とも呼ばれるようになった。そして、彼らの生活に密着していたのが、下馬交差点から長谷寺に至る由比ガ浜通り沿いや坂ノ下地区などに展開した商店であった。当時別荘に暮らしていた人々を相手に展開していった商業が、別荘文化の発展とともに拡大していき、今では、この地域は、商店街として活気のあるまちなみを形成しており、別荘文化が花開いた明治～大正時代からの商店もいくつか残っている。

別荘文化が花開いた鎌倉には、「日本基督教団鎌倉教会附属ハリス記念幼稚園」や「日本基督教団鎌倉教会会堂」、「鎌倉聖ミカエル教会聖堂」などのキリスト教関連の施設が残されている。これらは、鎌倉に別荘を持った人々の中に、キリスト教の信者が多くおり、鎌倉の地で礼拝を守りたいとの願いから建てられたものであるといわれている。現存する建物は、いずれも関東大震災以降の建築であるが、伝道の歴史はさらに古く明治 30 年

(1897 年) 頃といわれており、別荘の人々との関りがうかがえる。

(イ) 鎌倉山における分譲別荘地開発への広がり

海浜部から始まった鎌倉の別荘の歴史は、鎌倉市のほぼ中心に位置する「鎌倉山」での高級分譲地の開発にも繋がっていくこととなる。当時の実業家であった菅原通済は、ドイツ人の貿易商クルト・マイスナーの着想から、眺望の良いこの丘陵を別荘地にしようと考え、その構想は、最小一区画 500 坪という高級住宅地の分譲販売へと発展していった。大正 15 年（1925 年）に我が国初の自動車専用道路である「大船江の島自動車専用道路（京急道路）」の建設が認可されると、通済は道路建設と併せて乗合自動車の運行を計画するとともに、深沢村の山林を「鎌倉山」と命名し、昭和 4 年（1929 年）から分譲を開始した。鎌倉山には、現在も分譲当初に建てられた瀟洒な住宅や大区画の敷地が残されており、往時と変わらぬ高級住宅街の佇まいをうかがい知ることができる。

また、分譲当初に植えられたと伝わる数百本もの桜の木がまちのいたるところに立ち並び、特に住宅街の中央を走る通称「バス通り」の沿道に並ぶ桜並木は、「かまくら景観百景」に選ばれ、毎年桜の時期ともなると桜並木のトンネルを目当てに多くの人々が訪れる。

(ウ) 鎌倉と文化人

別荘地としての鎌倉の発展は、明治中期から大正初期まで続き、大正元年（1912 年）には町の総人口の約 3 分の 1 が転入した人々で占められ、一部の有力者が有志による地域団体を組織し、より積極的に町政へ参加するようになった。「鎌倉同人会」はその象徴的な組織であり、現在もなお、その活動は続いており、令和 7 年（2025 年）に設立 110 周年を迎えた。

また、鎌倉は明治から昭和にかけて、「鎌倉文士」と呼ばれた多くの作家や詩人、歌人、俳人などが移り住み、文学との関わりが深いまちである。明治・大正期の文学史上、重要な位置を占めた文学同人誌『白樺』は、そこに集る同人の多くが富裕階級の出身であり、長與専斎の子である長與善郎の家などを拠点に活動していた。その後、関東大震災で東京が大きな被害に遭ったことをきっかけに、文学者の一部が温暖な気候に恵まれ、歴史と緑に包まれた環境に惹かれ、東京から鎌倉へと移住した。大正 13 年（1924 年）、14 年（1925 年）に相次いで鎌倉に移り住んだ里見弴と久米正雄は、昭和 11 年（1936 年）に「鎌倉ペンクラブ」を発足させ、永井龍男、大佛次郎、川端康成、横山隆一、小林秀雄、島木健作、川喜多長政、川喜多かしこら 42 人の作家、文化人が名を連ねた。また、久米正雄と大佛次郎は、昭和 9 年（1934 年）から約 30 年にわたって続いた、夏の風物詩「鎌倉カーニバル」を発案するなど、地域に大きく貢献した。こうして昭和の文壇史に大きな足跡を残す「鎌倉文士」たちを生み出した鎌倉は、今も多くの文学者を受け入れ、新しい文学をこの

地から世に送り出している。

平成2年（1990年）に市教育委員会が発行した『鎌倉文学碑めぐり』によると、鎌倉には七十数基に及ぶ文学碑があり、その中には由比ガ浜に住んだ俳人の高浜虚子庵趾・句碑、長谷寺境内に建つ久米正雄の胸像など、鎌倉文士ゆかりのものが多く、これら市内各所に点在する文学碑からも鎌倉が文学のまちといわれる由来が感じられる。加えて鎌倉文士の作品の中には、鎌倉のまちを取り上げたものも多く存在し、作品に登場する市街地を歩くことで、当時のまちの息づかいを今も感じることができる。日本人で初めてノーベル文学賞を受賞した川端康成は長く鎌倉に住んだことから、『山の音』で長谷の自宅付近をモデルとするなど、作品にも多く鎌倉を登場させている。

ウ 建造物

(ア) 歴史的風致の形成を担っている建造物

a 別荘建築物

(a) 鎌倉文学館(旧前田家別邸)

鎌倉文学館は、昭和11年（1936年）に旧加賀藩前田家第十六代当主前田利為^{まへだとしなり}によって建てられた鎌倉の別荘を代表する建物の一つといえる。設計は渡辺栄治、施工は竹中工務店によって建てられた。海岸線と並行に走る由比ヶ浜通りを山側に折れた高台に位置し、眼下に相模湾を一望することのできるこの建物は、佐藤栄作元首相が別荘として利用したほか、作家三島由紀夫の小説『春の雪』の一場面にも登場する。昭和58年（1983年）7月、前田家より市が譲り受け、昭和60年（1985年）10月に鎌倉文学館として開館した。登録有形文化財である。



写真 鎌倉文学館(旧前田家別邸)

この建物は、1階は鉄筋コンクリート造で、2階と3階は木造である。外壁は当時鎌倉の別荘建築物に多く用いられた二丁掛タイルで、半六角形の張り出し窓に、半円形の欄間の飾り窓、パラペットの装飾、ベランダの手すり等洋風デザインの導入をみることができる。一方、瓦葺きの切妻屋根と深い軒の出等和風デザインも見られ、全体的には和洋折衷の外観を呈している。内部は、アールデコの様式が随所に見られ、当時入手が難しかった大理石を用いた玄関や暖炉、床のモザイク模様の寄木貼り、ステンドグラス等はこの建物の重厚さを伝える要素となっている。

(b) 旧諸戸邸（旧鎌倉市長谷子ども会館）

旧鎌倉市長谷子ども会館は、鎌倉文学館の南西の閑静な住宅街に佇む小さな洋館である。明治 41 年（1908 年）に株式仲買人として財を成した福島浪蔵^{ふくしまなみぞう}別邸として建てられ、当時は現存の洋館部分の北側及び北東部に和風棟が建ち、広大な敷地に庭園が設けられていたと考えられている。これらの建物は、大正 10 年（1921 年）に実業家の諸戸清六別邸となり、関東大震災に遭っても建物は健在であったが、昭和 51 年（1976 年）頃から建物が使用されなくなると、広大な土地はその殆どが分割され、23 の宅地に姿を変えてしまった。昭和 55 年（1980 年）に寄贈を受けた鎌倉市がここを鎌倉市長谷子ども会館とする



写真 鎌倉市長谷子ども会館
（旧諸戸邸）

ため改修工事を始めた際には、和風棟は殆ど姿を消しており、代わりに市は洋館部北側へ鉤型に建物を増築し、洋館と一体化させて子ども会館とした。現在、創建当初の建物は 2 階建ての洋館とその北側の廊下部分、及び蔵のみであるが、市による改修時も旧状に復するよう注意深く工事が行われている。

この建物の外観は、バルコニーの柱にギリシア建築の様式を取り入れ、メダリオン飾りが付けられており、ドア枠と窓枠には手の込んだ装飾が施されるなど、きわめて華麗である。また、内部も古典的な雰囲気が感じられ、明治期の貴重な遺構である。登録有形文化財である。

(c) 古我邸（旧荘邸）

扇ガ谷にある古我邸は、鎌倉文学館、後述する旧華頂宮邸とともに鎌倉三大洋館と呼ばれている。大正 5 年（1916 年）、三菱合資会社の専務理事であった荘清次郎の別荘として建てられ、その後、日本土地建物を経営していた古我貞周^{はまぐち おさち}が昭和 12 年（1937 年）に取得した。首相を務めた近衛文麿や浜口雄幸なども別荘として利用し、現在は飲食店として活用されている。屋組



写真 古我邸(旧荘邸)

みに釘打ちされている棟札の表面に「奉齋 屋船久々能知神 大地主神 屋船豊受姫神 手置帆負命 彦狭知命 大正五年丙辰七月十一日」、裏面に「願主 荘清次郎 設計主任 櫻井工學博士 現場主任 南邦政 請負人 植村喜三郎 棟梁 加藤源治 副 杉崎榮太郎」と墨書されていることから大正 5 年（1916 年）に建築されたことが分かる。

この建物は、宅地部分だけでもおよそ 2,300 m²、山林部分を含めると 5,000 m²にも及ぶ扇ガ谷の一つの谷戸全体を敷地として建っており、延床面積も 500 m²を超える稀に見る大規模別荘である。西側が洋風の主要部、東側が和風のサービス部分に大きく分けられ、八角形の突出部分の屋根の反りを除けば、内外ともすべて直線・平面で構成されており、非常にシンプルで簡素な造りといえる。ほぼ外壁の全面を覆うシングル（柿板）張りが特徴的で、見かけ上は正方形に近い柿板で覆われているように見える。屋根もまた天然スレート葺であり、全体が鱗で覆われたような印象のある意匠をしている。鎌倉の別荘地時代を伝える貴重な遺産の一つである。

(d) 御成小学校旧講堂・旧鎌倉図書館

現在も鎌倉駅の西側一帯に地名として残る「御成町」は、この地に御用邸が存在していたことに由来する。御用邸の存在は、貴顕紳士の集まる高級別荘地として認知されていた鎌倉にとって、ステータスシンボルともいえるものであった。

その後、御用邸は関東大震災によって殆どの建築物が倒壊したため廃止となり、昭和 6 年（1931 年）に小学校等の教育施設建設用地として鎌倉町に払い下げられた。

御用邸の跡地に現存する御成小学校旧講堂は、洋風建築と和風建築のそれぞれの特徴を取り入れ、昭和 8 年（1933 年）に建てられた木造平屋建てであり、屋根は鋼板葺で建築面積は 684 m²となっている。

旧講堂の近傍には、市民の寄付によって建てられた旧鎌倉図書館も残されている。旧鎌倉図書館は、昭和 11 年（1936 年）10 月に開館した 2 代目鎌倉図書館の建築を基本とし、令和 5 年（2023 年）3 月に改修された建物で、建築竣工年や設計者、施行者が定かではないが、開館日より、昭和 11 年（1936 年）には建っていたことが分かる。建物は、木造（一部鉄筋コンクリート造、鉄骨造）2 階建て、洋小屋組の造りをしている。改修後も、モダンな意匠に和風の味わいを加えた竣工当時の建築物の外観と構造形式の特徴を



写真 御成小学校旧講堂



写真 御成小学校校門の冠木門



写真 旧鎌倉図書館

よく留めている。昭和初期の鎌倉中心部における、関東大震災後の復興の様相を今に伝える建築物として、景観の形成に大いに寄与している。

さらに、これらの建物に挟まれるように往時の面影を残す御成小学校校門の冠木門^{かぶきもん}が建っており、校内の豊かな緑と相まって道行く人の心を和ませる風景を形成している。登録有形文化財である。

(e) 旧華頂宮邸^{きゅう か ちょうのみやてい}

旧華頂宮邸は、文治4年（1188年）創建の浄妙寺や竹林の庭で有名な報国寺^{ほうこく じ}にほど近い、衣張山東側の静かな谷戸の奥に位置する登録有形文化財である。昭和4年（1929年）春、華頂博信侯爵邸として建てられ、当時から常住の住宅として用いられていたというが、華頂夫妻が生活したのは数年のみであった。その後、



写真 旧華頂宮邸

たびたび持ち主が変わり、昭和42年（1967年）頃実業家の松崎貞治郎が購入、昭和45年（1970年）頃から松崎夫婦が常住するところとなり、敷地の最南端の茶室、門及び和風平屋がこのとき東京から移築された。外観は、洋風民家に設けられるハーフティンバースタイルで、洋風の門、敷地内の樹木、幾何学式庭園と一体となり、往時の華やかな暮らしを彷彿とさせる。緑に囲まれた落ち着いたある谷戸の景観を形成する貴重な洋風建築物及び庭園で、平成19年（2007年）には、「日本の歴史公園100選」にも選ばれている。

(f) 坂井家住宅

扇ガ谷の奥に所在する坂井家住宅は、東京大学理学博士であった坂井英太郎の鎌倉別邸として昭和2年（1927年）に建築された。

建物は、和館部分と洋館部分からなり、和館は、木造2階建てで、南面して建ち、正面東寄りに玄関を構え、背面東寄りに家政部を張出す。和瓦葺き屋根であり、寄棟・入母屋・切妻など複雑な屋根形状をしている。南面の開口を広めて採光するほか、玄関や取次の間、背面廊下を広めに作り、家政部分にも配慮がみられる別邸建築となっている。



写真 坂井家住宅

洋館は、和館の南東隅に接続して建つ木造2階建ての建物である。敷地の高低差を利用し、洋館の2階に和館の1階を接続する。外観は、スレート葺き屋根、モルタル塗りシン

吹付とし、2階出窓の上下に見切を入れるなど、和館と対照的に見せる。2階を洋風の応接室として、洋館併設住宅の特徴を伝える。

和館、洋館ともに登録有形文化財である。

b 別荘文化に関連する商店・施設

(a) 寸松堂^{すんしょうどう}

寸松堂は、昭和11年（1936年）9月1日起工、同年12月25日竣工であることが、現存する建築届出書で確認されている。設計・施工者は西井喜一と記載されているが、喜一の子息である西井正二もまた大工であったことから、父子で建設業を営んでいたといわれている。主屋と蔵が登録有形文化財である。

3階建ての塔の頂部に相輪^{そうりん}を載せた姿は、寺院建築を思わせるが、窓は城郭建築に見られる武者窓^{むしやまど}であり、寺院建築と城郭建築が町家と合体したような建物である。由比ガ浜通りのほぼ中間地点に位置し、三方向を通りに開いた角地に建っていることから、その特徴的な外観は周辺のランドマーク的な存在となっており、由比ガ浜通りを行き交う人々がしばしば足を止めて建物に見入っている。



写真 寸松堂

(b) 白日堂^{はくじつどう}

由比ガ浜通りと交わる県道32号（藤沢鎌倉線）にも鎌倉彫の商店兼住宅である「白日堂」が建っている。江ノ電の長谷駅と鎌倉大仏が鎮座する高德院とを結び、年間を通じて多くの観光客が行き交うこの通りにおいて、白日堂は、一際目を引く存在である。設計・施工を担当したのは、寸松堂と同じ西井父子で、寸松堂をモデルに建築されたと考えられ、より民家に近い外観であるが、寺院と城郭の意匠を加えた独特の風貌が保たれている。1階の床面積は127.02㎡、中2階は36.63㎡、2階は41.54㎡である。棧瓦葺（一部亜鉛引鉄板葺）の入母屋で、片側が妻切となっている。昭和15年（1940年）の建築⁴¹である。



写真 白日堂

⁴¹ 平成25年（2013年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

c 鎌倉山に関連する建造物

(a) 榑亭^{らいてい}

「榑亭」は、相模湾を見下ろす敷地とその門構えから、個々の区画が広大な鎌倉山にあって今もなお人目を引く存在である。榑亭は、鎌倉山の分譲を行った菅原通済の父であり、鉄道事業家・土木技術者として知られる菅原恒覧^{すがわらこうらん}の別荘として建てられたものである。当初は「清香園^{せいこうえん}」と称しており、分譲地略図昭和7年（1932年）発行の「鎌倉山住宅株式会社分譲地略図（以下「分譲知略図」という。）」に建物の配置がひとときわ詳しく書



写真 榑亭

かれていることから、いち早く具体の建築計画が固まっていたことがうかがえる。恒覧は、当時の戸塚（横浜市）において関東大震災で倒壊した農家を昭和4年（1929年）7月に購入して移築し、同じく震災で倒壊した鎌倉の青蓮寺の玄関の材料を買い付けてこれも移築した。恒覧自らが著し、昭和10年（1935年）9月20日に発行された『清香園誌^{せいこうえん し}』には、2,400坪と記されている広大な敷地内に、当時造営された建物がいくつも示されている。登録有形文化財である。

建物は、前述のとおり大規模養蚕農家と寺院の玄関を改造し、合体させ、1階を増築して2階建てにしたてあげたものである。個々の素材は江戸時代にさかのぼるものもある。もとは土間であった洋室は、高い梁を交差させた天井をもち、壁はサークル塗りの粗面モルタル仕上げで、西壁には9枚のステンドグラスが置かれ、和洋の混在した雰囲気が出されている。

(b) 扇湖山荘

鎌倉山に所在する建物の中でもひとときわ存在感を有する「扇湖山荘^{せんこさんそう}」は、製薬会社「ワカモト製薬^{ながおきんや}」創業者の長尾欣彌の別荘として建てられたもので、分譲地略図の東南に「長尾」の文字が見えることから、分譲当初から建設が予定されていたことが分かる。



写真 扇湖山荘

扇湖山荘という名は、建物から一望できる相模湾が扇型をした湖のように見えることから付けられたものであり、東京大学名誉教授で建築史などが専門の鈴木博之が平成 14 年（2002 年）に著した『長尾欽彌旧別邸 扇湖山荘』によると、飛騨高山から昭和 9 年（1934 年）に移築した民家に手を加えた建物と、高名な作庭家によってデザインされた日本庭園を持つ戦前の和風文化を画す代表的な大型遺構である。



写真 扇湖山荘から望む海

る。建物は、地下階がある 2 階建てで、鉄筋コンクリート造りの地下室の上に移築改造された民家が載っており、1 階の南面・東面はテラスとし、砕いた陶器が敷きつめられている。太い梁や入母屋屋根など民家の構造を残しながら、近代和風建築の要素も備えている。

平成 22 年（2010 年）10 月に鎌倉市が寄付を受けた。

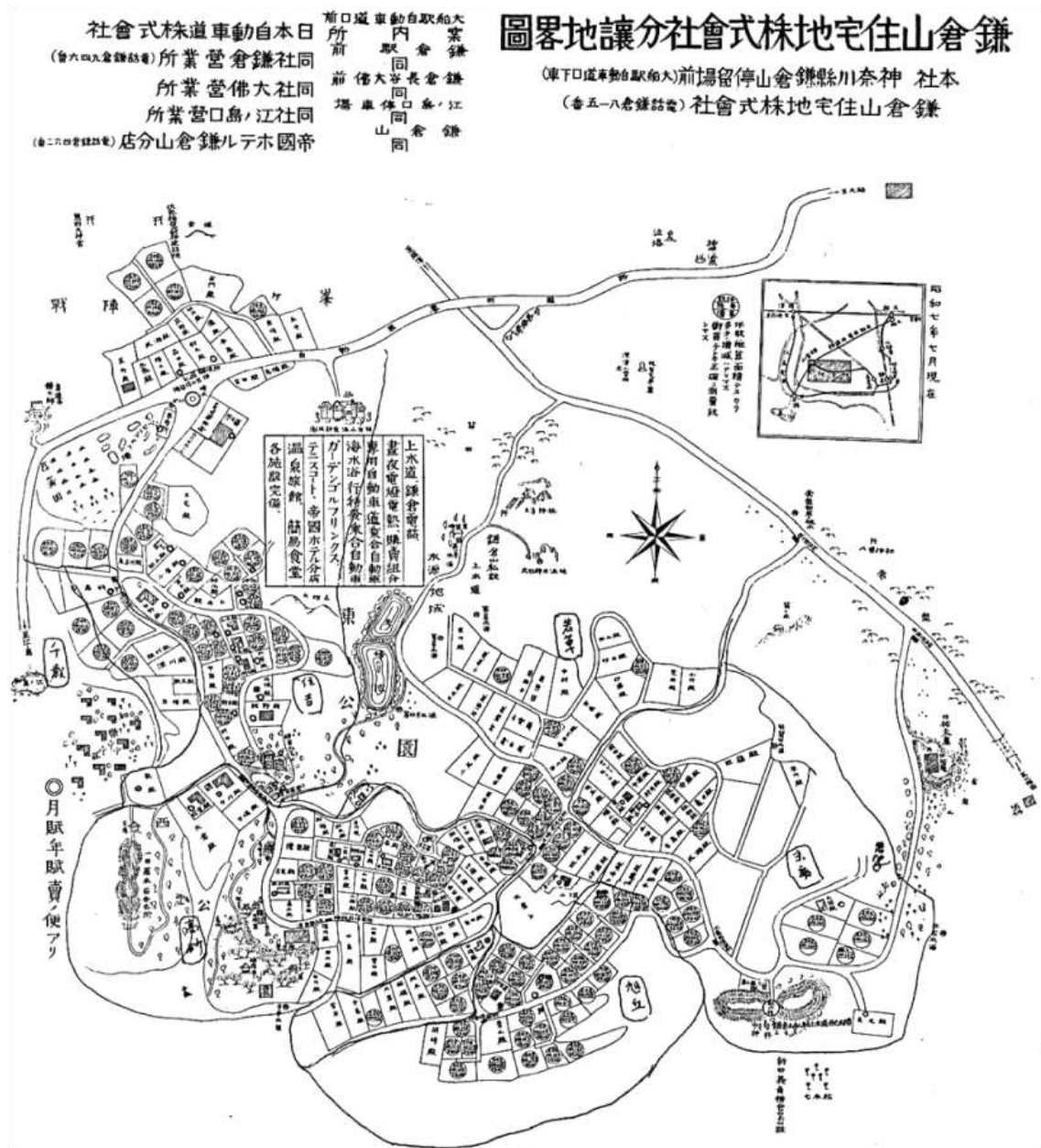


図 鎌倉山住宅地株式會社分譲地略圖

(c) 鎌倉山石柱（鎌倉山ロータリー）

鎌倉山のロータリーの中央にある「鎌倉山」と刻まれた石柱がある。これは、関東大震災で倒れた鶴岡八幡宮の三の鳥居の1本を譲り受け、昭和44年（1964年）に建国記念日創設を記念して菅原通済が建てたものである。石柱の下には、鎌倉山の開発や石柱の建立について記された石碑（昭和44年（1964年）銘）がある。



写真鎌倉山石柱
（昭和25年（1950年）頃）



写真 鎌倉山石柱

(d) 鎌倉山碑

鎌倉山碑は、石組みの礎石に乗った高さ4m余りもある大きな石碑であり、昭和10年（1935年）に建立されたことが刻まれている。鎌倉山の開発について、その歴史が刻まれている。



写真 鎌倉山碑

d 鎌倉の文化人に関する建造物

(a) 旧野尻邸（旧大佛次郎茶亭）

旧野尻邸は若宮大路とその東側に並行に走る辻説法通りに挟まれた、ゆるやかにカーブする細い路地沿いに位置し、落ち着いた色調の板塀は、郷愁をいざなう路地景観を形成している。板塀の奥には、鎌倉文士の交流の場でもあった茅葺きの茶亭が残る。建物は大正8年（1919年）頃に建築⁴²されたとみられる。茅葺屋根を持つ数寄屋風の平屋建てである。鎌倉風致保存会の指定保存建造物になっている。



写真 野尻邸(旧大佛次郎茶亭)

(b) 吉屋信子記念館

吉屋信子記念館は、鎌倉文学館から200m程南東に進んだ閑静な住宅街に位置する。建物は、近代数寄屋建築の第一人者である吉田五十八が昭和37年（1962年）、吉屋に「奈良の尼寺のように」と望まれて設計を行ったと伝わる。木造平屋建てで、平面西には、コンクリートブロック造りの倉庫が付属する。和風要素を巧みに取り入れた建築である。



写真 吉屋信子記念館

建物内部の書斎は吉屋信子の生前のままの形で保存され、春と秋に一般公開を行い、直筆原稿や愛用品を展示している。市民の学習施設として、昭和49年（1974年）の開館以来、多くの人々に親しまれ、利用されている。登録有形文化財である。

(c) 旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）

旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）は、寿福寺の東側から横須賀線の踏切を渡り、小町通りへ至るまで続く窟小路に面し、その黒い板塀は、鎌倉の小路の景観をより印象深いものとしている。ここは生涯を通じて外国映画の輸入と配給、海外への日本映画紹介などに情熱を注いだ川喜多長政・かしこ夫妻の住んだ地である。敷地内にある棧瓦葺き寄棟の木造平屋建ての和風建築は、東京にあった哲学者の和辻哲郎の住宅を昭和36

写真 旧川喜多邸別邸
（旧和辻邸）

⁴² 平成25年（2013年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

年（1961 年）に移築⁴³したものである。東京にあった和辻哲郎の住宅も、もとは移築されたものであり、昭和 13 年（1938 年）に江戸後期創建と見られる神奈川県大山の麓にあった古民家を解体し、東京に移築したと伝わる。旧市街地の谷戸の高台に建つこの建物は、背後の山並みと棧瓦葺きの屋根が調和し、地域を代表する魅力的な景観を形成している。平成 6 年（1994 年）に市に寄贈された後、旧川喜多邸別邸、（旧和辻邸）の東側にあった母屋は、川喜多映画記念館として建て替えられ、旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）とともに映画文化の歴史を伝えている。

(d) 鎌倉国宝館

鎌倉国宝館は、鶴岡八幡宮の境内にある鎌倉市の博物館である。大正 12 年（1923 年）の関東大震災により、鎌倉の社寺等の建物が倒壊し、貴重な文化財が損失したことから、不時の災害から鎌倉の文化財を保護し、また、鎌倉を訪れる人々が文化財を見学できるよう一堂に展示できる施設として設立が計画された。



写真 鎌倉国宝館

鎌倉同人会が中心になり、鎌倉町とともに設立にあたり、鎌倉同人会をはじめとする多くの人々の寄付により、鎌倉市域に所在する寺社から多数の宝物の寄託を受け、昭和 3 年（1928 年）4 月 3 日に開館した。

建物は、登録有形文化財であり、鉄筋コンクリート造りの高床式で校倉造^{あぜくら}風となっている。設計は、鎌倉同人会員であった岡田信一郎で、外観を奈良の正倉院に模し、内部は鎌倉時代の寺院建築の手法が用いられている。寄棟瓦葺き屋根の中央部には、小屋裏位置に採光用の越屋根^{こしやね}を隠し、さらに内部では虹梁^{こうりょう}大瓶束形式で採光用越屋根の棟を支える造りとなっている。

⁴³ 平成 25 年（2013 年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

(e) 日本基督教団鎌倉教会会堂

日本基督教団鎌倉教会会堂の歴史は古く、鎌倉に当教会の伝道が開始されたのは明治30年（1897年）に遡る。

専用の木造の会堂が建てられたのは明治40年（1907年）5月18日で、設計は当時の牧師である鵜飼猛、施工は戦前の鎌倉大工の代表である三橋直吉であった。しかし、この会堂は大正12年（1923年）の関東大震災で倒壊し、しばらく仮会堂の期間を経て、現在の会堂は大正15年（1926年）の建築⁴⁴である。現会堂は創建後、便所と塔屋4階部の増築がなされたほか、微細な補修・改修を受けたのみで創建当時の姿を保っている。



写真 日本基督教団鎌倉教会会堂

正面のトレーサリーを伴った大きな尖頭アーチ窓など初期ゴシック的スタイルを持ち、戦前のプロテスタント教会会堂の代表例の一つとなっている。鎌倉教会現会堂は鎌倉における最初期の鉄筋コンクリート造りとされているが、鉄筋コンクリート造りであるのは4周の壁のみで、小屋組は鉄骨造、内部間仕切、2階の床等は木造であり、一種の混構造ということもできる。外壁は目地を切って石造に擬すなど、様々な構造を用いて石造教会堂を模しているが、これらの構造材料は違和感を抱かせずに溶け合い、統一的なゴシック調を生み出している。

(f) 日本基督教団鎌倉教会会堂付属ハリス記念幼稚園

ハリス記念鎌倉幼稚園は明治43年（1910年）創立で、市内で最も古い幼稚園である。

園舎は大正14年（1925年）の建築⁴⁵で、「梅鉢型園舎」という、中央に遊戯室があり、それを囲むように舞台・教室が配置されている。

「梅鉢型園舎」の他の特徴として、鉄骨トラス構造の屋根部分で、44尺の径間を縦横に行き交うキングポストトラスで支えられていることが挙げられる。弦材が水平でなく、中央が高くなっており、内部空間にもドームの様な求心性を表現しようとした意図がみられる。それを可能にしたのは、鉄筋コンクリートと鉄骨という新しい技術であり、こういった技術面においてもこの建物は貴重な遺構であるといえる。



写真 日本基督教団鎌倉教会付属
ハリス記念幼稚園

⁴⁴ 平成25年（2013年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

⁴⁵ 平成25年（2013年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

(g) 鎌倉聖ミカエル教会聖堂

鎌倉聖ミカエル教会聖堂は昭和 8 年（1933 年）に建築⁴⁶された。その後増改築が行われ、現在、創建当時の姿をとどめているのは聖堂前部のみである。

現聖堂は押縁下見板張りの簡素な和風建物である会館及び牧師館とともに建築された。その後、昭和 13 年（1938 年）に小町通り側の隣地を購入し、現在のような敷地形態となった。昭和 40 年（1965 年）には、和風の会館及び牧師館が大幅に改造され、ほぼ現在のよ



写真 鎌倉聖ミカエル教会聖堂

うな姿となった。このとき聖堂部も西側に礼拝準備室が付け加えられ、東側の礼拝準備室は倍近くに広げられた。さらに昭和 41 年（1966 年）、敷地の北東隅に 2 階建ての牧師館が竣工したが、その後現在の建物の老朽化に伴い、平成 12 年（2000 年）に会館と牧師館を改築し、現在に至っている。

なお、この教会の名称であるが、当初は鎌倉聖公会と称していたが、昭和 17 年（1942 年）からは日本基督教団鎌倉小町教会と称すことになり、そして昭和 23 年（1948 年）からは再び日本聖公会鎌倉聖ミカエル教会と改称して現在に至っている。

外観は、下見板張りの外壁に両開き窓を配した素朴なものだが、ブラケット、三連アーチ窓、垂木下端部の繰形に手の込んだ細工の美しさが見られる。内部はみごとな技巧の天井や家具、照明器具などが、創建当初のまま残されている。この聖堂を守ってきた信徒の知恵と鎌倉の大工の昭和初期の力量を示す貴重な建物である。

⁴⁶ 平成 25 年（2013 年）に学識経験者が作成した『鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書』による。

(イ)その他の建造物

本計画において、後述の活動が認められず、歴史的風致の形成を担っている建造物として位置づけてはいないものの、別荘地として栄えた鎌倉らしい景観を形成する建造物を抜粋して記載する。

a かぶらぎきよかた 鍋木清方記念美術館

鍋木清方記念美術館は、川喜多映画記念館から南に100m程進んだ場所にある。鍋木清方は女性の美や庶民生活などを題材とした近代日本画の巨匠で、文化勲章を受章している。この地は鍋木清方の自宅があった場所で、平成6年(1994年)に市に寄付され、美術館として作品を公開している。なお、清方も前述の吉屋信子記念館の設計者、吉田五十八と懇意にしており、戦前東京に住んでいた清方の自宅は吉田五十八の設計だった。昭和29年



写真 鍋木清方記念美術館

(1954年)鎌倉・雪ノ下に居を構える際、画室は吉田五十八の設計を再現したといわれている。美術館として整備されるにあたり、正面玄関と画室は昭和29年(1954年)当時の部材をそのまま使用し、再現した。

b 旧神奈川県営湘南水道鎌倉加圧ポンプ所

主要地方道藤沢鎌倉線の大仏坂トンネルの鎌倉側すぐ手前の東側に建つ旧神奈川県営湘南水道鎌倉加圧ポンプ所は、神奈川県営水道の最初の事業である湘南水道の加圧ポンプ場で、相模川から取水した水を湘南の地域に供給するため、昭和11年(1936年)4月に建設されたものである。建築物は、昭和41年(1966年)年4月から平成14年(2002年)2月まで鎌倉市の大仏坂体育館として用いられ。神奈川県営の水道事業の最初の水道施設であり、別荘などに水を気供給する戦前の鎌倉の水道施設の希少な遺構であり、登録有形文化財である。また、全面スクラッチタイル張り外観は、大仏坂トンネル近辺の景観の大きなポイント的要素となっており、大仏坂トンネルとあいまって、鎌倉の戦前の産業遺構群を形成している。



写真 旧神奈川県営湘南
水道鎌倉加圧ポンプ所

エ 活動

(ア) 建築物の保存・継承活動

前述した建造物は、多くの別荘建造物、別荘文化にまつわる建造物が老朽化や維持管理の困難さから失われていく中で、市民の活動により守られてきた。鎌倉に点在するこれらの建造物は、単なる建築物としての価値にとどまらず、そこに関わる人々の手入れや営みによって、建物の外からも静かにその存在感を放っている。市街地のなかにあっても一際目を引き、時の重なりや文化の層を感じさせるそれらの風景は、「いざ鎌倉」～歴史と文化が描くモザイク画のまちへ～という日本遺産のストーリーにおける象徴的な風景となっている

a 旧華頂宮邸の保存・継承活動

旧華頂宮邸では、平成8年（1996年）5月、市が譲渡を受け、庭園の一般公開等を行っている。その中で、市と連携し、旧華頂宮邸の維持、管理、美化、邸内公開日やイベント開催のボランティア活動を行っているのが宅間ボランティアの会である。定期的に行われている庭園整備のときなど、ボランティア活動をしている様子が周辺の道路から見る可以看到。

この宅間ボランティアの会は、旧華頂宮が位置する宅間谷戸の親睦団体で、作家の林房雄が会長を務めた「宅間会」を前身とした市民団体であり、鎌倉市が旧華頂宮邸を譲渡された平成8年から、旧華頂宮邸の維持管理活動に携わっている。「宅間会」の正式な設立時期は分からないが、昭和16年（1941年）発行の『文藝春秋』に寄せた林房雄の文章内で、隣組の制度によって宅間谷戸の住民が親睦を深めている様子が書かれている。その後、宅間会と称されるようになり、宅間谷戸の自動車道路開発や旧華頂宮邸の迎賓館化への反対運動を中心に、活動するようになり、平成14年（2002年）に現在の宅間ボランティアの会となった。

当初の住環境の向上等を目的とした市民活動から、近年は、宅間谷戸を学区にもつ小中学校の学生を対象とした「景観ウォーク」を開催し、地元の子供たちへ守ってきた宅間谷戸の歴史、文化、自然を伝える活動も行っている。イベント当日は、宅間ボランティアの会の人々に連れられて、地域について学ぶ真剣な子供たちの様子を見ることができる。

旧華頂宮邸だけではなく、宅間会や宅間ボランティアの会が守り伝え続けている宅間谷戸の自然環境は、旧華頂宮邸の背景に緑が美しく映える景観そのものを守ることにも繋が



写真 宅間ボランティアの会の
維持管理活動の様子

っており、往時の情景を今に残している。

b 坂井家住宅における保存・継承活動

坂井家住宅は、平成 25 年（2013 年）に鎌倉風致保存会に寄贈されるまでは、坂井家の住居として使用されていたため、一般に公開はされていなかった。しかし、前所有者で退職後に水彩画かとして作品を残した坂井武三郎^{さかい ぶさぶろう}が、和館、洋館、また敷地内の絵を多く描いており、当時の様子を知ることができる。さらに、武三郎の作品は絵画コンクールや展示会に出展されており、これにより鎌倉の近代建築物として坂井家住宅が世に知られることとなった。その後、武三郎から鎌倉風致保存会に寄贈されてからは、ボランティアによる庭園、敷地の整備が行われており、活動の日には、庭園の整備をしている様子を周辺の道路から見る可以看到。



写真 風致保存会による庭園整備の様子

c そのほかの建造物における保存・継承活動

旧野尻邸（旧大佛次郎茶亭）は、大佛次郎が亡くなった後も野尻家が所有し、昭和 58 年（1983 年）に鎌倉風致保存会の保存建造物に指定し、鎌倉風致保存会の協力を受けながら保存と春と秋の一般公開を行っていた。しかし、次第に維持管理が困難になり、所有者が平成 31 年（2019 年）売却を決断、なかなか買い手が見つからない中、解体の可能性もあったが、貴重な遺構がなくなる危機感から個人の手が挙がり、有志が集まり、「一般社団法人大佛次郎文学保存会」が令和 2 年（2020 年）に継承した。その後、同団体と鎌倉市風致保存会により、春と秋の公開が行われており、公開日には旧野尻邸（旧大佛次郎茶亭）を見ようと市内外から人々が集まってくる様子が見られる。



写真 風致保存会による庭園整備の様子

(イ) 別荘文化を支えた人々の営み

鎌倉に一時的に滞在する人や常住するようになった「別荘族」を相手とした由比ガ浜通沿い、坂ノ下、長谷近辺のここでの商業活動では、別荘を持つ顧客への品質の高い商品の提供や「御用聞き」と呼ばれるサービスの提供など、商店の創意と工夫の積み重ねによる独自の商業体系が発展した。明治45年（1912年）に大橋良平が著した『現在の鎌倉』には、「毎年七月中旬か又は八月上旬頃より、九月の下旬頃迄の様に、必ず此地に来て別荘或は貸別荘又は貸間に避暑する人が多い、之れ等の人を別荘客、避暑客と云ふて、鎌倉土着の諸商人貸家業者は崇拝するのだ、それでも鎌倉人士の財源は全く此避暑客別荘客にあるからだ、鎌倉は此夏期をとしてあるので一部の営業者の収入が一年の諸経費に充てられるのである。」とあり、当時の商店が別荘に滞在する顧客向けの営業で潤っていたことが分かる。



写真 配達の小僧さん
(昭和12年(1937年))

現在もこの地域では、米、酒、うなぎ、蒲鉾、鎌倉彫などの老舗が高品質な商品の製造・販売を続けており、古くからの建物で営業を行っている店もある。これらの商店では、お客様への商品の配達など、「御用聞き」に由来する配達文化が残っている店舗もある。配達を行っている様子を時折見ることができ、かつての別荘地としての風情を感じ取ることができる。

例えば、由比ガ浜通り沿いに店を構える「柴崎牛乳店」は、初代店主の柴崎梅吉が、明治23年（1890年）に横須賀から鎌倉村に移転し、当時この地で牛を飼いながら、別荘で過ごす人々に牛乳を配達していたという。

鎌倉を代表する土産物であり、伝統的工芸品である鎌倉彫も、鎌倉の別荘地化と深く関わりあい、発展していったものの一つである。それまで主に寺院の仏具や茶道具を作成していた仏師たちは、廃仏毀釈の風潮などによって造像の需要が激減した後、別荘を構えた上流階級の人々の需要に合わせ、家具調度品や工芸品の製作を主体とするようになり、それが鎌倉彫として浸透、発展していった。この地に残る「寸松堂」^{すんしょうどう}、「白日堂」^{はくじつどう}のような店舗兼工房は、こうした歴史を今に伝える鎌倉彫の商店兼住宅として貴重な存在といえ、建物自体が伝統を物語る存在であり、外からも歴史と文化の気配が漂う。時折、通行人が足を止めてショーウィンドウに飾られた鎌倉彫を鑑賞する姿を見ることができる。

寸松堂は、大正10年（1921年）の創業であり、大正13年（1924年）に現在の寸松堂が建っている場所の近傍に店を構え、その後移転した。工房を備えた店舗兼住宅において営まれている鎌倉彫の製作・販売は、特徴的な建物と調和することによって、鎌倉彫の歴史と伝統を今に伝えている。重厚な店内に足を踏み入れると茶托や鏡類、銘々皿、盆、菓

子器など様々な作品が取り揃えられている。

白日堂の創業は、昭和9年（1934年）にさかのぼる。創業者の伊志良不説は、寸松堂二代目の佐藤泰岳の実兄であり、泰岳は佐藤家の養子として寸松堂を継いでいる。不説は戦前、主に茶道具を製作し、戦後は若い弟子たちの育成や工房・店の経営に努め、厳しい時期を乗り越えてきた。こうした折、横須賀に進駐した将兵が鎌倉を訪れた際、鎌倉彫を購入するようになり、中にはテーブルを注文する者もいたという。現在、白日堂では、女性の店主が彫るオーダーメイドのブローチ等が人気を博している。

これらの店舗以外にも別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗が複数あり、別荘文化の記憶を今に伝えている。

表 別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗

店名	所在地	創業時期	備考
寸松堂	笹目町	大正時代	鎌倉彫工房
白日堂	長谷三丁目	昭和初期	鎌倉彫工房
柴崎牛乳店	長谷二丁目	明治中期	食料品店
三留商店	坂ノ下	明治中期	食料品店
内田理容館	由比ガ浜一丁目	大正時代	理容院
山源 石渡源三郎商店	長谷二丁目	明治初期	乾物屋
紅家美術店	長谷三丁目	明治初期	骨董品店
つるや	由比ガ浜三丁目	昭和初期	飲食店
井上蒲鉾店	由比ガ浜一丁目	昭和初期	食料品店



図 別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗(長谷駅周辺)



図 別荘文化が発展した時代から商いを続ける店舗(由比ヶ浜駅・和田塚駅周辺)

(ウ) 鎌倉山の住民等による活動

鎌倉山においては、住宅地としての開発を進めた企業により、下水道や浄化槽などのインフラや生鮮食料品店、警備小屋など居住に関する施設整備が進められ、また、
こうじゅんかく
 「交詢閣（鎌倉山ロッジ）」



写真 鎌倉山ロッジ

と呼ばれる帝国ホテル直営の社交場が開設されるなど、高級感のあるイメージが浸透していった。前述の樺亭や扇湖山荘はまさに当時の鎌倉山のイメージを体現する建物である。

そして、この地を「理想郷」として作り上げようとする意識は、企業側だけでなく住民側にも十分理解され、鎌倉山が住宅地として開発されたときから住まう人々が、昭和7年（1932年）8月に「友美会」と称する自治組織を設立し、主体的なまちづくりを進めていった。昭和9年（1934年）の友美会の臨時総会のメモからも、友美会の活動をうかがい知ることができる。そしてその活動が、今の住民による鎌倉山のまちづくりにも引き継がれている。

友美会は、住民相互の親睦を図り、自治の精神に基づき、鎌倉山住宅地を理想郷にするという趣旨で設立された。新しい居住者に対しては、その住居を建てる際、自然環境との調和を図ることや他家の眺望の妨げにならないような建物の設計を行うことや、生け垣や自然石を利用し環境の美化に配慮すること等を指導していた。現在も、鎌倉山の随所で、このような指導によって生まれた生垣や自然石の壁を見ることができる。

昭和15年（1940年）に出された内務省訓令により友美会は町内会へと形を変え、住民の生活も戦争によって大きく変化することとなるが、肩書敬称にとらわれることなく、なお住民間の結びつきは強くなっていった。その後、大きな戦災を受けることなく自然の佇まいが残された鎌倉山においては、昭和22年（1947年）に町内会令が廃止された後も地域における自治組織は存続し、発足当初の友美会のようにまちづくりに対する意識の高さがあり、この地になじまない宅地造成の計画が持ち上がった折には、住民が一致団結し、事業者と直接折衝するため現場へと赴くこともあった。

昭和45年（1970年）、鎌倉市において初めて市街化区域と市街化調整区域の区域区分（線引き）が行われた際、市は国勢調査における人口集中地区の数値基準に従い、この地域を市街化調整区域ではなく市街化区域にすることを提案したが、当時の自治組織である



写真 米山尚志『鎌倉山正史』

(平成7年(1995年)発行)

「昭和九年十月八日臨時總會のメモ」
(1934年)

「鎌倉山町内会」は、「鎌倉山住民を分断する」という理由から市街化区域化に反対する意思を表明した。その後も、更新が行われる5年ごとに、その判断を住民にゆだねてきたが、住民の判断は一貫して市街化調整区域のままでいることを望むというものであった。

そして、これまで鎌倉山の景観を守り、引き継いできた先人の意識や活動は、現在この地域に住む人々にも受け継がれており、平成12年（2000年）には、鎌倉山町内会が主体となってまちづくりを行うための「鎌倉山のまちづくり計画⁴⁷」を策定し、快適な居住環境の保全と創造を自主的に進めている様子が見られる。

この計画では、建築物や工作物の外観に関し、原色や刺激的な色彩は施さないこと、道路との境界に塀を設置するときには出来るだけ生け垣を選択すること、止むを得ず既存宅地を分割する際には一定の敷地面積を確保するなどの具体的な取組が掲げられており、良好なまち並み景観を維持するため、町内会が中心となって様々な活動を行っている。

鎌倉山において大規模な宅地開発事業が計画されると、開発事業者は計画概要を町内会へ連絡し、これを受けた町内会は、1区画の敷地面積を60坪から100坪程度確保するよう事業者へ要請を行うほか、開発予定地の周辺住民へ計画概要を知らせ、住民の意向が開発事業者へ伝わるよう調整を行っている。また、分譲当初に植えられたと伝わる桜の木がまちのいたるところに立ち並び、鎌倉山を象徴とするもののひとつであるが、特に住宅街の中央を走る通称「バス通り」の沿道に並ぶ桜並木は、毎年桜の時期になると桜のトンネルとなり鎌倉山を彩る。この桜並木を保全するため、バス通り沿いに新たに住宅を建設する場合は、鎌倉山町内会では、5mごとに1本の桜の木を植えるよう施主に求める他、開発工事に伴い、止むを得ず桜の木を伐採する場合は、必ず失われた本数以上の桜の木を区域内に植えるよう事業者と協議を行っている。現在も、新しく植えられた桜の木と分譲当初に植えられ樹齢を重ねた木が作る桜並木のトンネルからは、鎌倉山の住民が桜のある風景を大切にしている思いが感じられる。

また、鎌倉山町内会が所有する「鎌倉山集会所」の建替えにあたっては、周囲の景観に馴染む集会所とするため、住民有志により検討委員会が結成され、地域にゆかりのある建築家数名から設計プランの提案を受けて住民投票で設計者を決定し、平成27年（2015年）に建替えが完了した。

この他、町内会だけではなく様々な自主グループが良好なまち並み景観を守る取組を行っている。住宅地西側のロータリー付近では、住民が定期的に道路の清掃活動を行うとともに、花壇に季節の花を植え、まちに彩りをそえている。また、鎌倉山の分譲当初に住宅地の鎮守として奉斎された「鎌倉山神社」や、「鎌倉山集会所」の敷地内などでも住民に

⁴⁷ 「鎌倉山のまちづくり計画」とは、鎌倉市まちづくり条例に基づき、一定の地区を対象として快適な居住環境の保全と創造を図ることを目的として、まちづくり市民団体が策定する自主まちづくり計画である。

よる自主的な清掃活動が行われている。

個々の住宅でも、鎌倉山の自然が豊かな住環境を維持するため、家の敷地内に多くの植栽を施している。夏前や秋口には、住宅で植木屋による庭木の選定や植栽の整備が行われており、脚立や剪定道具を用いた作業の様子を見ることができる。鎌倉山において広大な敷地をもつ榑亭では、真竹の保護や外来植物の除却など、鎌倉山本来の植生にこだわった庭木の管理を行い、住環境の向上に努めており、日々、植栽を管理している様子を見ることができる。

このような住民の地道な努力の結果、まちに新しく建てられる建築物も既存の榑亭や扇湖山荘をはじめとした大区画の住宅が醸し出すまち並みに溶け込むよう配慮がなされ、良好なまち並み景観や住環境が次の世代に引き継がれている。



写真 鎌倉山の桜並木
(昭和 45 年(1960 年))



写真 鎌倉山桜並木

(工) 鎌倉の文化人にまつわる活動

a 文化人による鎌倉のまちづくり

令和 7 年（2025 年）に設立 110 周年を迎えた「鎌倉同人会」は、陸奥宗光の子で外交官として活躍した陸奥広吉、洋画壇の大御所黒田清輝など、鎌倉在住の^{そうそう}錚々たる人々が発起人となり設立された。彼らは鎌倉をさらに住みよいまちにすることや、観光地としても内外にもっとアピールすべきと考え、同じ志をもつ人々に呼びかけ、会を構成していった。鎌倉同人会では、創立当初から昭和にかけて鎌倉駅舎改築の要請、鎌倉国宝館の建設のほか、関東大震災のときには救護薬品の寄贈や復興の援助を行うなど、まちづくりに係る事業を積極的に進め、現在も歴史文化講座の開講や石碑の建立・保全など、鎌倉の文化の発展・向上を目指し、活動をしている。



写真 海浜ホテルの石碑

また、鶴岡八幡宮で毎年 8 月に行われる「ぼんぼり（雪洞）祭」（詳細は「社寺における祭礼・行事や信仰にみる歴史的風致」（○ページ）及び「若宮大路周辺の営みにみる歴史的風致」（○ページ）参照）は、「鎌倉ペンクラブ」のメンバーが中心となってぼんぼりを並べたことが始まりである。鎌倉に住んだ文化人により始まったこの行事は、当初のぼんぼりは 200 個ほどだったが、現在では、約 400 個のぼんぼりが鶴岡八幡宮の境内に並び、鶴岡八幡宮とその周辺を暖かい光で照らす光景が見られる。

旧野尻邸（旧大佛次郎茶亭）を建てた大佛次郎と久米正雄が発案した鎌倉カーニバル（前述）は、鎌倉を国際都市にしようと昭和 9 年（1934 年）から始められ、戦争のためしばらくの間途絶えたものの、再開通知から分かるように昭和 22 年（1947 年）から復活し、昭和 38 年（1963 年）に取りやめになるまでの間、鎌倉の夏を盛り上げた。現在、その精神を受け継ぎ、平成 28 年（2016 年）から「鎌倉市民カーニバル」が、毎年 5 月に行われている。当日になると仮装をした人々によるパレードが鎌倉市役所から海に向けて行われ、楽しそうに歩く人々の姿や歓声が鎌倉駅から由比ガ浜海岸まで続き、賑わいを見せている。

写真 鎌倉カーニバル
（昭和 9 年（1934）年）写真 鎌倉カーニバル
（昭和 26 年（1951 年））写真 鎌倉市民カーニバル
（実行委員会？観光協

b 文化人と基督教の広がり

別荘地化が進むことで、鎌倉ではキリスト教徒たちが増えていった。鎌倉へ移住、もしくは別荘を構えた文化人をはじめとするキリスト教徒たちの信仰の中心として、日本基督教団鎌倉教会や鎌倉聖ミカエル教会は、重要な役割を担っていた。

(a) 日本基督教団鎌倉教会の活動

昭和6年（1931年）に本間俊平が著した『本間全集 第5巻』には、日本基督教団鎌倉教会の講演記録があり、当時の活動をうかがうことができる。

現在は、毎週日曜朝の主日礼拝をはじめ、クリスマス、イースターなど、教会暦に基づいた年中行事も行われ、礼拝やイベント時に流れるオルガンと聖歌隊による音楽の響きは、教会の外を歩く人にも届き、教会の周辺は神聖な雰囲気で包まれる。



写真 日本基督教団鎌倉教会堂
のクリスマスマーケット

(b) 日本基督教団鎌倉教会付属ハリス記念鎌倉幼稚園における幼児教育

明治43年（1910年）に創立された日本基督教団鎌倉教会付属ハリス記念鎌倉幼稚園は、鎌倉の幼児教育の先駆けである。昭和初期の給食風景の写真から、50年以上前から数多くの園児を迎え入れていたことが分かる。現在も静かにたたずむ園舎からは幼稚園に通う子供たちの歌声や活気が外からも感じられ、歴史的なまちなみと調和した鎌倉ならではの雰囲気を醸し出している。



写真 日本基督教団鎌倉教会付属ハリス記念幼稚園 給食風景
（昭和初期）



写真 ハリス記念幼稚園の活動

(c) 鎌倉聖ミカエル教会の活動

鎌倉聖ミカエル教会の聖堂内には、昭和8年（1933年）付けの「聖別の証」が掲げられており、当時から活動を行っていたことが分かる。

現在は、日曜日の礼拝以外にも、地域住民や観光客向けに、教会見学や建物公開、チャリティバザー、音楽コンサートなどを開き、地域に開けた教会としての取組を行っており、イベント時は、賑やかな声が建物の外まで聞こえてくる。



写真 鎌倉聖ミカエル教会聖堂
の礼拝の様子(昭和40年(1965年))



写真 鎌倉聖ミカエル教会聖堂における
クリスマス礼拝の様子

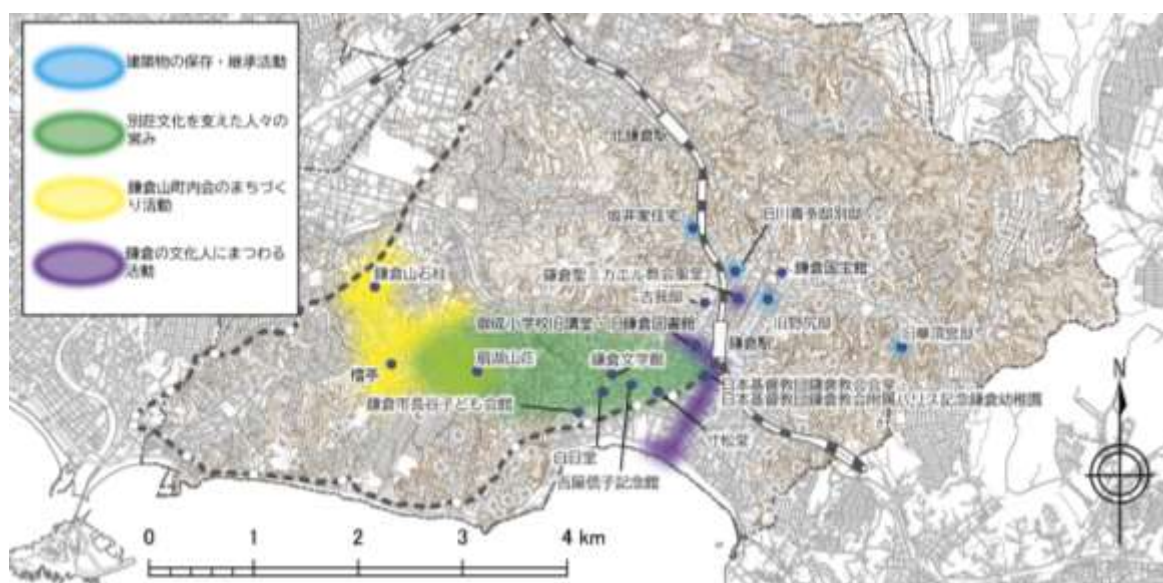


図 別荘文化に由来する活動の市街地への広がり

表 別荘文化に由来する主な活動の年表

活動種別	活動場所	現在の活動主体	昭和9年 1934年	昭和19年 1944年	昭和29年 1954年	昭和39年 1964年	昭和49年 1974年	昭和59年 1984年	平成6年 1994年	平成16年 2004年	平成26年 2014年	令和6年 2024年	現在
建築物の保存・継承活動	旧華頂宮邸	宅間ボランティアの会	宅間会による住環境向上活動										
			旧華頂宮邸一般公開の支援										
	坂井家住宅	鎌倉風致保存会	宅間ボランティアの会に改称										
			景観ウォークの開催										
旧野尻邸 (旧大佛次郎茶亭)	大佛次郎文学保存会	ボランティアによる庭園・敷地の整備											
		一般公開											
旧川喜多邸別邸	友の会	友の会の活動											
別荘での人々の営み	寸松堂		工房兼住宅としての利用										
			工房兼住宅としての利用										
	白日堂		別荘での生活を支える商い										
			その他の各商店										
鎌倉山町内会 まちづくり活動	鎌倉山石柱・鎌倉山碑を含む鎌倉山一帯	鎌倉山町内会	友美会設立 鎌倉山町内会に改称										
			町内の美化活動・景観の保全活動										
			桜並木の保全活動										
			自主まちづくり計画の作成・運用										
鎌倉の文化人にまつわる活動	市内各地	鎌倉同人会	鎌倉の文化の発展・向上を目指す活動										
	鶴岡八幡宮		ぼんぼり祭りの開催										
	由比ガ浜海岸周辺	鎌倉市民カーニバル実行委員会	鎌倉カーニバルの開催										
			鎌倉市民カーニバルの開催										
	日本基督教団鎌倉教会堂		礼拝・イベントなどの活動										
	日本基督教団鎌倉教会付属ハリス記念鎌倉幼稚園		幼児教育										
鎌倉聖ミカエル教会		礼拝・イベントなどの活動											

オ まとめ

鎌倉という地において別荘文化が栄えた背景には、多くの歴史的遺産を有し、古都の風情を湛え、温暖な気候に恵まれた海浜保養の適地であったことや、都心に近いという立地に加えて、横須賀線の開通により鎌倉に当時の日本の政財界の中心人物や文化人等の別荘が多く建てられ、それにより、地域の人々の営みに変化していったことがあげられる。

大正時代に起きた関東大震災をきっかけに、鎌倉は別荘地ではなく常住の地へと変わっていったが、この地で育まれた別荘文化は、ここに住まう人や訪れる人の間で引き継がれており、往時をしのばせる歴史的な建造物を核とした別荘地としての風情や趣が、今もまちの至るところに息づいた歴史的風致となっている。

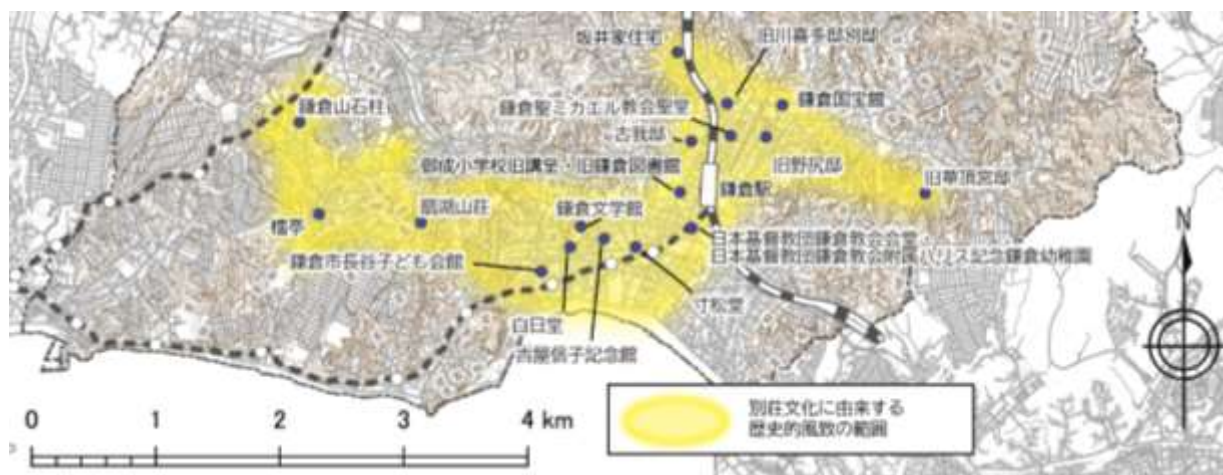


図 別荘文化に由来する歴史的風致の範囲

(7) 歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史的風致

ア はじめに

ここでいう鎌倉の山稜部とは、中世の時代において、まちの中心部を三方から取り囲む山々の連なりを指すものである。当時の山稜部は、防御性に富み、機能的に整備された都市構造を担う重要な役割を果たしていた。今日の山稜部は、山稜中腹に抱かれた社寺等の歴史的遺産とその後背となる緑が調和し、一体となって、鎌倉特有の歴史的な景観を形成している。



写真 鎌倉市の市街地・山稜
の航空写真

鎌倉時代、武陸上交通の要衝として山稜の尾根を垂直に掘り下げ、その底面を路面とした「切通」^{きりどおし}が整備された。また、切通や山腹の崖などには、「やぐら」と呼ばれる横穴式の中世墳墓及び供養施設と考えられる遺構が多く存在し、県・市指定史跡に指定されているものもある。

このように鎌倉の山稜部には、鎌倉時代に武家が山に手を加えて造った切通ややぐら、中世以降の古道などの多く文化財・歴史的建造物が点在しており、山稜部そのものが後世に守り伝えていかなければならない文化財であるともいえ、鎌倉の歴史が形成される上での物理的な基盤となっていることも、山稜部そのものが昔と変わらぬ形で守られてきたことの大きな理由である。

イ 保存活動のきっかけとなった御谷騒動^{おやつ}

鎌倉では、山稜の中腹にある社寺とその背景となる緑、そして、周囲の市街地が調和し、一体となって鎌倉特有の景観を創造し、古都として守るべき「歴史的風土」を形成している。

古都保存法は、この「歴史的風土」の保存を目的とし、昭和 41 年（1966 年）に制定された法律である。この法では、「歴史的風土」を「歴史的な建造物や遺跡などと、それを取り巻く樹林地などの自然物環境が一体となって古都らしさを醸し出している土地の状況」と規定しており、社寺などの歴史的建造物と背後の自然的環境を一体として保存していくこととしている。

鎌倉の山稜部の保全活動が盛んになり、かつ古都保存法制定のきっかけとして、御谷騒動がある。

鎌倉は、我が国が高度経済成長期を迎えた昭和 35 年（1960 年）頃から「昭和の鎌倉攻め」といわれる宅地造成の波に飲まれていった。

鎌倉地区西側に隣接する七里ガ浜地区や円覚寺裏山の明月^{めいげつ}谷^や北側など、これだけで約112ha、3,000余区画の宅地が造成され、戦後鎌倉の都市化に拍車を掛けていった。そして、この波は、古都鎌倉の聖域ともいえる鶴岡八幡宮の裏山「御谷」にまで迫ることとなる。



写真 航空写真
(昭和31年(1956年))



写真 航空写真
(昭和63年(1988年))



写真 航空写真
(令和元年(2019年))

国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」より引用

鶴岡八幡宮西側の谷戸である御谷は、八幡宮供僧二十^{ごぼう}五坊があった遺跡で、風致上や歴史上、また植物学上からみても鎌倉において最も重要であり、鎌倉そのものの破壊ともいえる行為であった。昭和39年(1964年)にこの宅地造成の計画を知った地域住民は、「鎌倉の自然を守る会」や、昭和26年(1951年)から市民による政策を提言する団体として活動していた「鎌倉三日会」などの市民団体の協力を得て、後に「御谷騒動」と呼ばれる宅地造成計画への反対運動を展開していくこととなる。

明治以降、鎌倉に別荘を持つ人々の中には多くの文化人が含まれており、英国で生まれた自然・歴史的建物の民間保護団体「ザ・ナショナルトラスト」など海外における自然保護の動きについても明るく、文化財や自然保護の意識も高かった。また、同じく鎌倉に住む学者たちも、200種もの植物が茂る自然林を守るだけでなく、鎌倉の史跡と景観が、日本のみならず世界全体にとっても貴重であることなど各々の意見を述べ、多くの識者が市民による反対運動の推進を支えた。宅地造成計画に反対する婦人会が駅前街頭署名活動を行うと、日ごろから文化財保護の重要性を訴えていた大佛次郎をは



写真2-1 鶴岡八幡宮
(昭和36年(1961年))



写真2-2 鶴岡八幡宮

じめ、里見弴、今日出海、小林秀雄、横山隆一なども署名運動に参加し、わずか一週間で20,000人を超える署名が集まるという成果を上げた。また、開発現場においては一般市民、学者、文化人、僧侶までがブルドーザーの前に立ちはだかり、ついには警察が出動するという切迫した状況にまで至った。この結果、1年間にわたり関係者による粘り強い話し合いが行われた末、宅地造成を推し進めても予定の利益が得られない程の条件が付されて開発が許可されたことから、事業者が計画を断念するに至り、さらに、このときに設立された日本初のナショナルトラスト団体といわれる鎌倉風致保存会が、市民等からの寄付金をもとに宅地造成予定地の一部の買収を行ったことで御谷騒動は終息を迎えた。

鎌倉の山稜部では、これまで、古都保存法の厳格な運用と市民の意識や活動に支えられ、山稜の樹林と一体となった歴史的環境が保全できており、山稜部は、歴史的遺産と調和し、特有の古都の景観を形成する緑の源となっている。

ウ 建造物

三方は山、一方は海に囲まれた地形を有している鎌倉では、市街地と社寺、そしてその背景にある山稜が一体となった鎌倉ならではの景観を形成している。山稜そのものが、鎌倉のまちを形作る大切な構成要素である。また、山稜部には、切通ややぐらなどの多くの文化財があり、鎌倉のまちの一部として、また、鎌倉の歴史を伝える文化財として重要な役割を担っている。

(ア) 切通

陸上交通の要衝として鎌倉の出入口にあたる山稜部に切通が造られた。中世において切通は、鎌倉と外部を結ぶ連絡路として存在するだけでなく、防衛上の要衝でもあり、源頼朝は、切通等、鎌倉と外部との往来口付近には有力な御家人を移住させていたと伝えられる。北条氏もこの基本的な姿勢を踏襲し、それぞれの要所に北条氏または一門ゆかりの有力な一族を居住させていた。

後に「七口」あるいは「七切通」と称されるようになった、名越切通、朝夷奈切通、巨福呂坂、亀ヶ谷坂、仮粧坂、大仏切通、極楽寺坂切通のうち、6つの切通は、鎌倉の地勢とその外部との連絡状況を示す重要な史跡であることから、それぞれ切通路とその周辺の丘陵部を含む範囲が国指定史跡に指定されている。

a 名越^{なごえ}切通・大切岸

鎌倉南部の丘陵地を北西－南東方向に通る切通で、史跡指定範囲は、鎌倉市と逗子市にまたがっており、鎌倉市域では約6.2haが指定されている。

往時は、鎌倉と三浦半島を結ぶ要路で、周辺には、平場や切岸、やぐら等の遺構が分布

しており、鎌倉市域の平場には、市の文化財に指定されている石廟（石造墳墓堂）が2基存在している。

切り開かれた明確な時期は不明であるが、『吾妻鏡』⁴⁸の天福元年（1233 年）8月の条に「名越坂」の記述があることから、13 世紀前半には整備されていたと考えられる。

また、日蓮ゆかりの法性寺（逗子市）のある山腹には大切岸おおきりぎしという山腹を垂直に削った人口の崖が 300m ほど続いている。平場が数段ひな壇上に造られている場所もあり、発掘調査で中世からの石切り場であったことが分かっている。



写真 名越切通の写真

b 朝夷奈切通あさいな

鎌倉東部の丘陵の谷筋を東西方向に通る切通で、史跡指定範囲は鎌倉市と横浜市にまたがっており、鎌倉市域では、約 7.7ha が指定されている。切り取られた岩肌が道と小川を挟み、両側から壁のようにせまるような形をしている。

平成 11 年(1999 年)度～12 年(2000 年)度に実施された切通周辺部の詳細分布調査では、多数のやぐら群、切岸、削平地等の遺構が確認された。



写真 朝夷奈切通の写真

『吾妻鏡』⁴⁹によると、仁治元年（1240 年）に造営が決定され、その翌年に第三代執権北条泰時の監督のもとに工事が進められており、建長 2 年（1250 年）には補修工事が行われている。

朝比奈切通は、鎌倉と金沢を結ぶ幹線道路として整備され、鎌倉に物資を供給するうえで重要な交通路であった。特に塩の運搬において重要な役割を担っていた。

室町時代以降も利用されており、江戸時代には、鎌倉遊山などで鎌倉と江戸の往来が盛んになり、江の島、鎌倉、金沢八景のある六浦むつうらをつなぐ道として頻繁に道の補修が行われた記録が残る。幕末から明治時代の頃には、峠に旅人をもてなすための茶店も設けられており、主要交通路として定着していたと考えられている。今でも切通の両側にそそり立つ切岸に当時の面影を感じることができる。

⁴⁸ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

⁴⁹ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

c 巨福呂坂こぶくろ

往時は、鎌倉の中心部にある鶴岡八幡宮の西側と、建長寺門前を結んでいた要路。約 2.7ha が史跡に指定されている。

『吾妻鏡』⁵⁰では、嘉禎元年（1235 年）に「小袋坂」において将軍藤原頼経の病氣平癒を祈る「四角四境祭」が行われたとの記述があるため、13 世紀前半には整備されていたと考えられる。

鶴岡八幡宮西側の県立近代美術館別館前を通して北鎌倉へ抜ける現在の県道が明治 19 年（1886）年に開かれたため、史跡に指定されている旧道は現在途中で行き止まりとなっており、通り抜けができなくなっているが、旧道の傍らには江戸時代の庚申塔や道祖神が残っており、当時の姿を想起することができる。



写真 巨福呂坂切通の写真

d 亀ヶ谷坂かめがやつ

鎌倉北部の東西に伸びる丘陵地を南北方向に通り、扇ガ谷と山ノ内を結ぶ切通で、約 3.9ha が指定されている。武蔵むさし（現在の東京・埼玉ほぼ全域に神奈川県東部を含めた地域）に通じる鎌倉の北の出入口であり、軍事的にも経済的にも重要な幹線道であったと考えられる。現在でも生活要路として使用されている。

『吾妻鏡』⁵¹には、建仁 2 年（1202 年）に将軍頼家が山ノ内に出かけた帰りに「亀谷辺」を通っていることが記されており、13 世紀前半には道が存在したと考えられる。



写真 亀ヶ谷坂の写真

⁵⁰ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

⁵¹ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

e 仮粧坂^{けはい}

鎌倉西部の南北に伸びる丘陵の尾根に交差するように通る道で、現在の源氏山公園を頂上として北の扇ガ谷に繋がる「仮粧坂」、南の佐助に繋がる「七曲坂」及びその交差部から西に向かって伸びる道により構成されており、約 10.9ha が史跡に指定されている。

藤沢から武蔵方面に通じる道で、今も昔の面影を残している。平成 7 年(1995 年)度及び同 12 年(2000 年)度を実施した発掘調査の結果、山稜部において多数のやぐら群、火葬遺構、切岸、堀切、削平地、石切場跡等の遺構が確認された。

『吾妻鏡』⁵²では、建長 3 年(1251 年)に鎌倉中で商売を認められた 7 か所の一つとして挙げられており、13 世紀には商業地区として栄えていたようである。元弘 3 年(1333 年) 5 月、新田義貞による鎌倉攻めの際に軍の主力を向けたので激戦地となった。

現在は坂を上ると鎌倉幕府末期に後醍醐天皇の側近として鎌倉幕府倒幕に尽力した日野俊基を祀る葛原岡神社のある源氏山公園に至る。



写真 仮粧坂の写真

f 大仏切通

鎌倉西部の丘陵の尾根筋に沿った南側斜面を北西－南東方向に通る切通で、往時は鎌倉から藤沢方面へ通じる要路であった。約 2.1ha が史跡に指定されている。大仏切通の東に隣接する常盤の地には北条氏の館があり、防衛拠点としても要所であったと考えられる。

道の両側に高い絶壁のような崖が切り立っている険しい山道で、江戸時代から明治時代にかけて何度か整備がされた。



写真 大仏切通の写真

常盤口付近の一段高くなった崖には、やぐらがいくつかあり、やぐらの中には五輪塔などもある。

g 極楽寺坂切通

7 つの切通のうち最も西側に位置する極楽寺坂切通は、坂ノ下から極楽寺、七里ガ浜、片瀬方面へ抜ける道であり、鎌倉・京都往還の重要な出入口であった。

極楽寺の門前まで続く坂道は「極楽寺坂」とも呼ばれている。この切通がいつ整備され

⁵² 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

たのかは分かっていないが、江戸幕府が編纂した地誌『新編相模国風土記稿』の明治8年（1875年）の写本には、極楽寺の開山忍性によって切り開かれたと書かれている。また、『太平記』には、新田義貞がこの切通から鎌倉に攻め込んだが、北条軍により侵入が防がれ、稲村ヶ崎に回ったという記述がある。

昔の切通は、今の成就院境内の高さのあたりを通る傾斜が急な細い崖路であったが、大正10年（1921年）に自動車の通行を可能にするため、10m以上大きく掘り下げられ、現在はその原型を留めていない。その後、昭和の時代に行われた工事により、現在は、道幅も広く、傾斜も緩やかな現在の姿となった。



写真 昭和の工事の写真
（昭和48年（1973年））

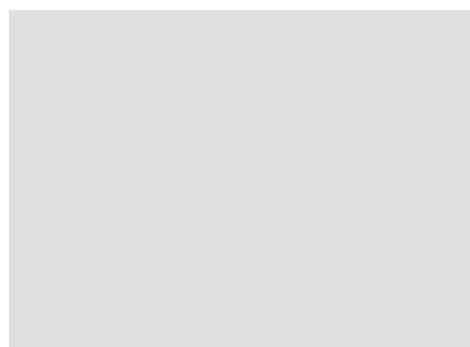


写真 極楽寺坂切通の写真

（イ） やぐら

「やぐら」とは、鎌倉を中心とした地域に分布する、山稜の中腹に造られた横穴式の中世墳墓で、武士や僧侶など支配層の埋葬や供養の場として造られたと考えられ、常滑や瀬戸の壺に入れられた火葬骨が五輪塔、宝篋印塔、板碑などとともに納められているものもある。

その成立年代は、鎌倉時代後半から室町時代ごろと推定されることから、鎌倉が都市として機能していた時期に形成されたことがわかる。都市が発展し、人口が数万人から十万人とも推定されるほどに人口が集中する中、平地面積が少なく、利用できる土地に制限があった鎌倉において、地形を活かした墓の形であった。



写真 地蔵やぐら
（大町釈迦堂口遺跡）

周辺の植物に覆われ、ひっそりとたたずむやぐらは、中世の人々の営みを感じることができ、鎌倉の歴史を色濃く残している貴重な遺構といえる。

代表的なものとして、鎌倉市内では、次の表のやぐらが知られている。

表 代表的なやぐら

名称	成立年代（推定）	概要
瑞泉寺裏山やぐら群 （国指定の史跡瑞泉寺境内）※	鎌倉時代後半～室町時代	瑞泉寺の裏山、天園ハイキングコース上に位置するやぐらである。
高時腹切りやぐら （国指定の史跡東勝寺跡）※	鎌倉時代後半～室町時代	東勝寺跡にあるやぐらで、新田義貞の鎌倉攻めの際に、鎌倉幕府第14代北条高時らがこのやぐらで自害したとの伝承から、この名が付いたとされる。
明月院のやぐら（国指定の史跡明月院境内）※	鎌倉時代後半～室町時代	明月院の開山堂左手にあるやぐらで、間口約7m、奥行6m、高さ3mと鎌倉で最大級のやぐらである。
綱引地蔵やぐら（国指定の史跡浄光明寺境内・冷泉為相墓）※	鎌倉時代後半～室町時代	浄妙寺の裏山に位置するやぐらで、やぐら内に安置されている石造地蔵菩薩坐像は綱引地蔵と呼ばれ、鎌倉二十四地蔵の一つに数えられている。
地蔵やぐら、日月やぐら、唐糸やぐら等 （国指定の史跡大町釈迦堂口遺跡）※	鎌倉時代後半～室町時代	「名越ヶ谷」と呼ばれる谷戸の最奥部に位置している平場の北側の山稜部に位置する。64基を数え、市内でも大規模なやぐら郡である。中央に彫られた地蔵菩薩や五輪塔が安置されている。
百八やぐら（覚園寺） （県指定史跡）	鎌倉時代後半～室町時代	二階堂にあるやぐらで、覚園寺裏山の山腹に位置する。170基以上を数え、中でも中央に丸彫りの地蔵菩薩が安置され、五輪塔や仏像などの壁面彫刻が刻まれている地蔵やぐらが最大である。地蔵や五輪塔が刻まれたものなど、鎌倉の代表的なやぐらが多く見られる。
瓜ヶ谷やぐら群 （市指定史跡）	鎌倉時代後半～室町時代	葛原岡・大仏ハイキングコースの中間・葛原岡神社の北側にあるやぐらで、5基を数え、中でも中央に丸彫りの地蔵菩薩が安置され、五輪塔や仏像などの壁面彫刻が刻まれている地蔵やぐらが最大である。

名称	成立年代（推定）	概要
多宝寺址やぐら群 （市指定史跡）	鎌倉時代後半～室町時代	扇ガ谷にある浄光明寺内の谷の多宝寺の跡地に残るやぐらで8基が指定されている。五輪塔や宝篋印塔が残り、常滑焼の壺や写経石が出土している。
番場ヶ谷やぐら群 （市指定史跡）	14世紀代	十二所の番場ヶ谷にあるやぐらで、20基を数える。「元徳三年」（1331年）の銘文が刻まれた五輪塔の地輪が出土しており、14世紀に成立したものと推定できる。
相馬師常墓やぐら （市指定史跡）	鎌倉時代後半～室町時代	扇ガ谷にあるやぐらで、千葉常胤の次男相馬師常の墓と伝わる。奥壁にある大型の龕は切石で閉鎖されており、鎌倉にあるやぐらの中でも特色のある形態である。

※国指定の史跡の中にあるやぐらを指す。いずれも史跡の構成要素となっている。

(ウ) 歴史的風土特別保存地区指定の山稜

鎌倉の景観を形成している山稜の中でも、古都保存法に基づく歴史的風土特別保存地区に指定している山稜は、古都保存法の発祥の地としての歴史的な意義を有し、鎌倉のまちの骨格になるものとして市民、関係団体、事業者や鎌倉を訪れる人々にも広く認知されている。

古都保存法は、この「歴史的風土」の保存を目的として制定された法律であり、「歴史的風土」を「歴史的な建造物や遺跡などと、それを取り巻く樹林地などの自然的環境が一体となって古都らしさを醸し出している土地の状況」と定義している。社寺、史跡、自然的地形が密接に結びついている鎌倉は、まさに歴史的風土の典型例として、現在、市域の約 14.5%にあたる 573.6ha を歴史的風土特別保存地区に指定している。

歴史的風土特別保存地区に指定された山稜では、古都保存法の厳格な運用と市民の意識や活動に支えられ、山稜の樹林と一体となった歴史的環境の保全がなされており、歴史的遺産と調和し、特有の古都の景観を形成する緑の源となっている。

これらの山稜は、本来は自然物であるものの、古都保存法制定に至る経緯や法制定以降の市民・土地所有者等の歴史的風土の保全の理解と協力の実態から、市民・土地所有者等によって積極的に手入れされてきた、地域固有の歴史的風土を形成する歴史的建造物と捉える。

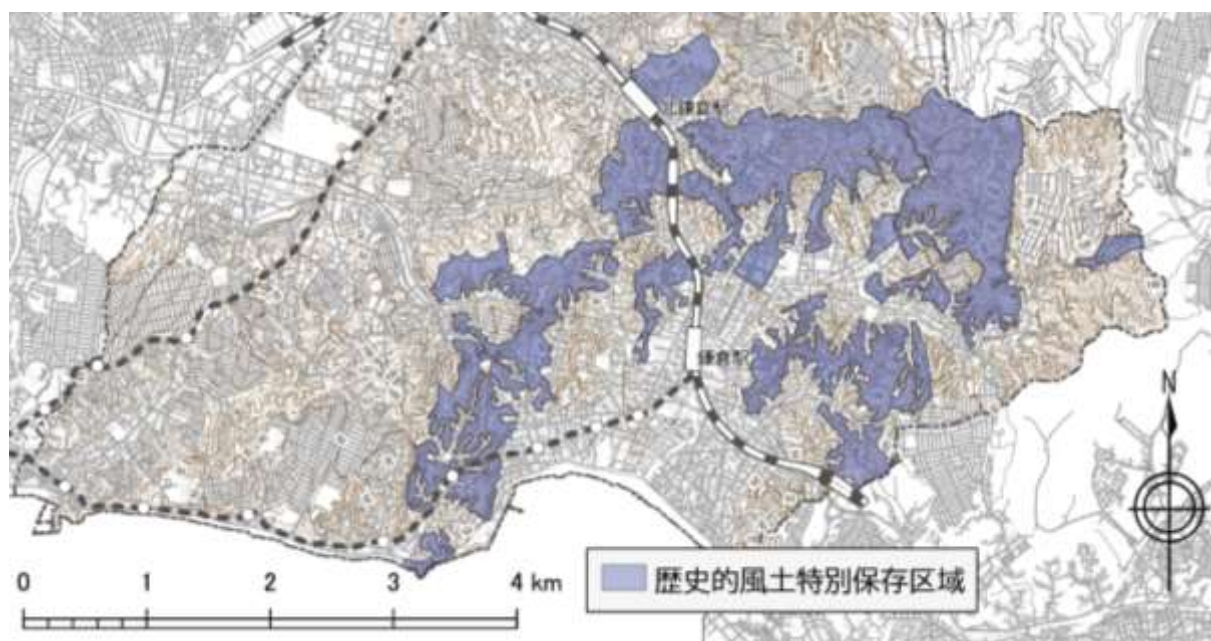


図 歴史的風土特別保存区域図

表 歴史的風土特別保存地区の指定状況（令和8年4月1日現在）

市 名	歴史的風土特別保存地区	
	地 区 名	面積 (ha)
鎌倉市	朝比奈切通し	7
	瑞泉寺	119
	護良親王墓	2
	浄妙寺	8.1
	永福寺跡	5.7
	寿福寺	18
	建長寺・浄智寺 ・八幡宮	172
	円覚寺	29
	大仏・長谷観音	110
	極楽寺	9.8
	稲村ヶ崎	6
鎌倉市及び 逗子市	妙本寺・衣張山	67
	名越切通	20
計 2 市	約 13 地区	573.6
	鎌倉市域	573.6
	逗子市域	0

※歴史的風土特別保存地区（573.6ha）のうち、206.3ha（36.0%）を神奈川県が所有管理している。（令和8年（2024年）3月31日現在）

ウ 活動

御谷騒動に始まる一連の市民運動がきっかけとなり、特別措置法として制定されたのが古都保存法である。

鎌倉で御谷騒動が起きた頃、時を同じくして京都市、奈良市でも古都の景観を守ろうとする動きが高まり、各市に古都の環境保存を目的とした団体が組織されていった。古都における環境の保全については、従来から文化財保護法、都市計画法などに基づく各種の施策が講じられていたが、これらの法律をもって古都の景観を開発から守ることは到底できないという認識から、京都市、奈良市、鎌倉市の古都3市を中心とする「古都保存連絡協議会」が昭和40年（1965年）に結成され、古都の環境を保存する総合的な施策として、国に対して特別な立法措置を講じるよう要望した。

これにより関係都市選出の国会議員が中心となり、昭和41年（1966年）に超党派の議員立法による古都保存法が制定されることとなった。

鎌倉での市民運動が契機となる土地利用制度であるが、現在も市民の古都の環境に対する意識は高く、厳しい土地利用や建築規制を甘受し、その協力を得て、社寺・山稜の建造

物や緑が一体となった古都の景観を見ることができる。

また、この御谷騒動を契機に設立された「鎌倉風致保存会」により、鎌倉の緑地の保全活動や古都保存法の趣旨目的の啓発活動が行われるようになった。

(ア) 民間土地所有者の協力による古都の緑の保全

古都鎌倉の山稜を形成する緑のほとんどは、古都保存法に基づく歴史的風土特別保存地区、昭和 48 年（1973 年）に制定された首都圏近郊緑地保全法に基づく首都圏近郊緑地特別保全地区などに指定され、地域性緑地として都市計画で守られているが、未だその多くは民有地であり、土地所有者が主体となり、行政の支援を活用しながら緑地の保全を行っている。



写真 市民による緑地等の手入れの様子(昭和 52 年(1977 年))
鎌倉市図書館 近代史資料室蔵

緑地の所有者は自主的に、自身が持つ緑地内の樹木や竹の伐採・剪定、緑地内部の倒木・枯れ木の撤去処分などの維持管理作業を行っており、鎌倉の山稜周辺では、緑地の所有者から事業者が木々を伐採・剪定を行う姿を見ることができ、チェーンソーの音が聞こえ、鎌倉に住む人々が、鎌倉のまちが緑と一体となった風景を大切にしている思いを感じることができる。

これに対し、県及び市では緑地を将来にわたり良好に保全することを目的とし土地所有者の支援等を行っている。

例えば、神奈川県では、昭和 49 年（1974 年）に神奈川県自然保護奨励金制度を発足し、運用している。同制度は、対象となる土地所有者に対する協力謝礼及び最低限の維持管理経費を交付するというもので、この交付金により、みどりの量的な確保とみどりの機能を発揮するための維持管理を促進させ、緑地が持つ公的な機能の向上を図っている。

また、鎌倉市では、昭和 63 年（1988 年）から樹林維持管理事業を展開してきた。この事業は、市民サービスの一環で市が行ってきた危険木などの処理を制度化したもので、歴史的風土保存区域、近郊緑地保全区域などの良好な環境を守るため、毎年順番に決められた地区内の土地所有者からの申請に基づき、鎌倉市が所有者に代わり樹木の枝払い等を実施していた。令和 7 年（2025 年）度からは、鎌倉市民有緑地維持管理助成事業を立ち上げ、運用している。同制度は、歴史的風土保存区域、近郊緑地保全区域などの指定区域内の山林の所有者に対し、管理負担の軽減のため、その機能を発揮させるために必要な維持管理に要する費用に対し助成を行うものである。

このような緑地などの土地の所有者、県や市の取り組みが続いていくことで、現在も山稜の建造物や社寺の背景としての緑が一体となった鎌倉独自の景観が守られ、鎌倉に住む

人々だけでなく、訪れる人たちも古都の風情を感じることができるのである。

(イ) 鎌倉風致保存会の活動

先述のように、昭和 39 年（1964 年）、鶴岡八幡宮の背後の御谷の森に宅地開発の計画が浮上した。周辺住民による反対運動が起こり、これに鎌倉在住の文化人や著名人が加わり、御谷騒動として全国的に報道されると、2 万人を超える開発反対の署名と多額の寄付金が集まった。この御谷騒動を契機として文化人や著名人が発起人となり鎌倉市からの出資を受け、財団法人鎌倉風致保存会が設立された（平成 23 年（2011 年）4 月より公益財団法人となる）。昭和 41 年（1966 年）に集まった寄付金と鎌倉市からの出資金で「御谷の森」1.5ha を買収したことで我が国初のナショナルトラスト運動となった。現在、鎌倉風致保存会は鎌倉市内に 8.0ha の緑地を所有管理するほか、古都保存法制定に至る経過の主旨の周知や風致保全の重要性など幅広い普及啓発活動を進めている。

現在、会は鎌倉の自然の風光と豊かな文化財を後世に伝えることを目的に活動を継続し、市民の理解と意識の継承を図っている。また、活動に際しては、会の主旨を広く説明し、会の活動への参加と募金の協力を広く呼び掛けている。

a 緑地等の手入れ・清掃

鎌倉風致保存会では、先の御谷騒動以降、市民からの寄付金を募るなどして土地などを買い取るナショナルトラスト運動を行ってきた。平成 9 年（1997 年）からは緑の手入れを自分たちの手で行う「みどりのボランティア」の活動に取り組んでいることが、同年の事業報告書に記載されている。ボランティア活動は年 40 回ほど、市民や企業ボランティアを広く募り、参加者は延べ 1,000 人以上に及び、会が所有している御谷山林（約 1.5ha）、^{じゅうにそ}十二所果樹園（約 5 ha）に加え、史跡保存として、国指定の史跡の東勝寺跡、浄光明寺、朝夷奈切通や大仏切通、市指定史跡の内藤家墓地、建長寺回春院、光則寺など史跡に続く寺院の背後の緑地等での下草刈り、枝払い、倒木の処理などを行っている。



写真 みどりのボランティア
（平成9年(1997年)）



写真 みどりのボランティア

b 古都保存法の主旨や緑地保全の重要性の周知・啓発活動※

鎌倉風致保存会では、緑の手入れだけに止まらず、年間を通じて、様々なイベントを開催し、古都保存法制定に至る経緯や法の周知・啓発を行っている。

春と秋の旧大佛次郎茶亭公開は、会が支援する旧大佛次郎亭を公開する目的で開始されている。昭和 58 年（1983 年）から始まったことが、同年の事業報告書に記載されている。公開の時期には、貴重な歴史的建造物を見ようと多くの人が来場する姿が見られる。

このほかにも、十二所果樹園で収穫した梅の販売会、家族で栗拾い、海岸清掃、藍染め体験教室、クリスマスリース教室やナショナルトラストコンサートなどで、いずれのイベントも毎回数多くの方の参加を得ている。

また、平成元年（1989 年）から毎年開催される「鎌倉市緑化まつり」には、平成 3 年（1991 年）から鎌倉風致保存会のブースを出店し、古都保存法に係るパネル展示などを行っている。

毎年、鎌倉駅東口と西口をつなぐ地下道のギャラリーでも同様のパネル展示を行っており、ギャラリー前では、足を止め、パネルを見る人々の姿が見られる。



写真 旧大佛次郎茶亭公開
(昭和 58 年(1983 年)(鎌倉風致保存会))



写真 旧大佛次郎茶亭公開
(鎌倉風致保存会)

鎌倉風致保存会の普及・啓発活動は、前述の古都保存法だけでなく、緑地保全の重要性を広く一般に周知するための活動にも及んでいる。「歴史ウォーク」(鎌倉風致保存会主催)は、平成 20 年(2008 年)に開始した事業で、年 4 回開催している。また、「古都鎌倉の緑と歴史探訪」((公財)かながわトラストみどり財団との共催)は、平成 22 年(2010 年)に開始した事業で、春と秋の年 2 回開催している。



写真 歴史ウォーク
(平成 22 年(2010 年))

これらでは、それぞれに歴史や考古学等の専門家を講師として招き、講師の引率を得て、テーマに基づいて市内の史跡や山稜部を廻りながら、今も残る土木遺構の解説や文化財としての価値、これらと一体となる緑の重要性などを参加者に説明し、史跡や山稜部の緑を守ることについて人々の意識の醸成を図っている。加えて、鎌倉市立中学校の卒業前の3年生を対象に、自分たちの住んでいるまちの自然とその保存に関心を持ってもらうため、市内の緑地の手入れ・海岸清掃など、地域のボランティア活動の場を提供するなど、啓発活動の範囲を広げている。

イベント時には、関係者が講師から真剣に話を聴く姿や、学生が緑地の手入れ・海岸の清掃活動などに励む姿が見られ、鎌倉の町や自然に向き合う人々の思いを感じることができる。

c ハイキングコースの安全確認・史跡の点検（ハイキング・パトロール）

緑地の保全や普及・啓発活動の他に、鎌倉風致保存会と市との協働事業として、平成20年（2008年）から、天園、祇園山及び葛原岡・大仏ハイキングコースのパトロールを実施している。会の会員ボランティアが中心となり、倒木の処理、枯損枝・危険枝の除去、危険木の確認やその報告書の作成などを行っている。パトロールを通して、これらのハイキングコースが、眺望景観だけでなく、鎌倉の貴重な財産として大切に守り、より良くしていこうとする参加者の使命感を感じることができる。



写真 古都鎌倉の緑と歴史探訪
（平成22年(2010年)）



写真 ハイキング・パトロールの写真
（平成20年(2008年)）

(ウ) やぐらにおける供養

前述のとおり、鎌倉の山稜部をはじめとした各所で見られるやぐらでは、地域住民やそこを訪れた人たちによって、供養のための献花や清掃などが古くから行われ、大切にされていたことが昭和30年(1955年)代の写真からも確認できる。現在も、ハイキングコース沿いにある小規模なやぐらも含め、鎌倉市内の各所で献花や供物が供えられている光景や訪れた人が手を合わせる光景を見ることができる。こうした光景と通じて、やぐらが今もなお、供養の対象として地域の人々に大切に扱われていることを感じられる。



写真 やぐらの献花等の写真
(昭和30年(1955年)代)
鎌倉市図書館 近代史資料室蔵

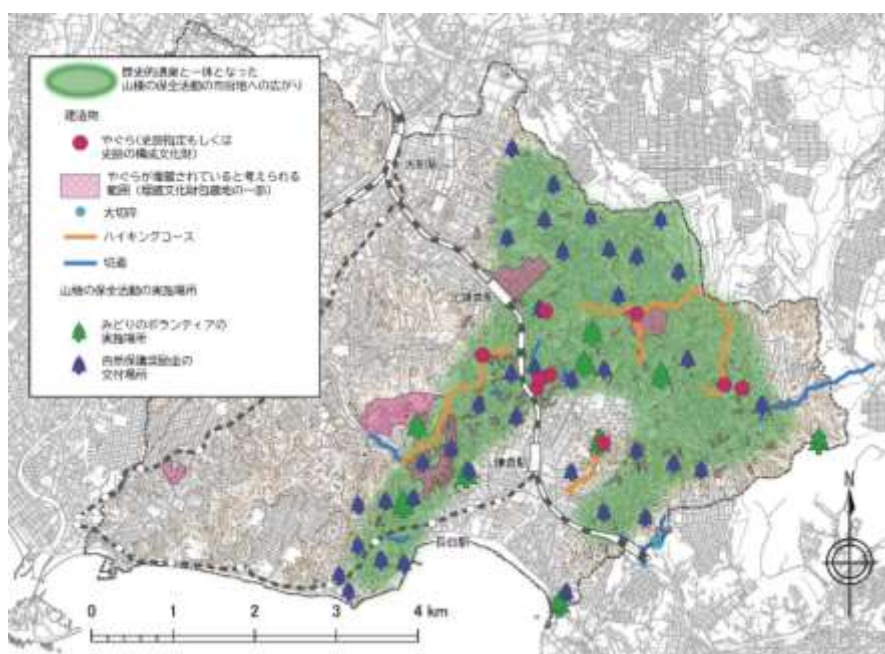


図 歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動の市街地への広がり

表 山稜の主な保全活動の年表

活動主体	活動名	昭和39年	昭和45年	昭和55年	平成2年	平成12年	平成22年	令和2年	現在
		1964年	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年	2020年	
土地所有者	所有する緑地の保全	土地所有者の協力による古都の緑の保全							
鎌倉風致保存会	緑地等の手入れ・清掃								
	古都保存法の主旨や緑地保全の重要性に関する周知・啓発活動								
ハイキングコースの安全確認・史跡の点検(ハイキング・パトロール)									
住民・来訪者	やぐらにおける供養								

エ まとめ

鎌倉を取り囲む山稜には、鎌倉時代に武家が山に手を加えて造った切通ややぐらなどの多くの文化財が今なお点在しており、山稜部そのものが後世に守り伝えていかなければならない文化財であるともいえ、鎌倉の歴史が形成される上での物理的な基盤となっている。

特に、やぐらは、地形と相まった宗教都市鎌倉独自の墓の形であり、独特の景観を形づくっている。

こうした社寺などの歴史的遺産とその背景となる緑、その周囲の市街地が調和し、一体となった鎌倉特有の景観は、山稜部そのものが昔と変わらぬ形で守られてきたことの上に成立している。こうした歴史を踏まえ、中世の歴史的遺産とともに、古都保存法制定の経緯と精神を理解し、古都の緑と景観を守るという鎌倉市民の意識は、御谷騒動から 50 年以上経った今でも非常に高く、古都保存法による丘陵部の厳しい土地利用制限や景観形成の取組に対し、市民の理解と協力が得られている。また、市内では自然環境保全、景観保全などを目的とした緑に関する多くの団体が活動している。その中でも中心となるのが、御谷騒動に端を発して設立された鎌倉風致保存会である。

このように古都鎌倉の歴史的風土は、それを守り後世に伝えようとする鎌倉市民の精神とそれに由来する活動によって守り伝えられてきた。言い換えれば、市民に継承されてきた歴史的風土保存の動きが、鎌倉における地域固有の歴史的風致を形成しているといえる。

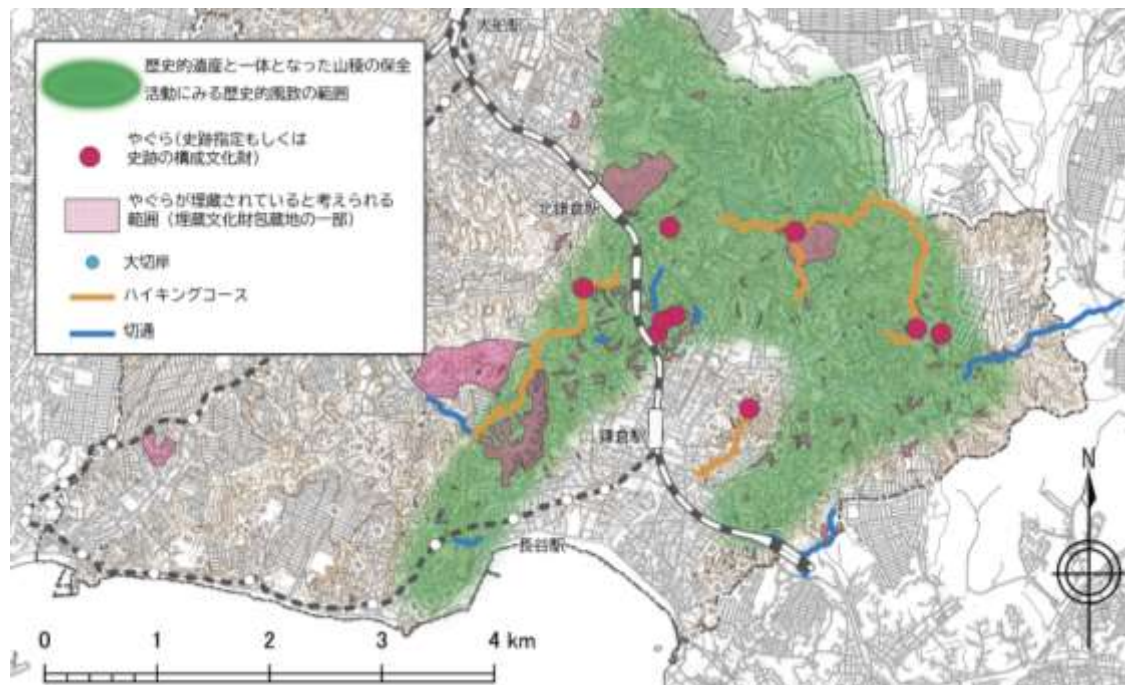


図 歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史的風致の範囲

コラム 鎌倉古道

切通を含む若宮大路・大町大路をはじめとする鎌倉古道は、鎌倉時代に鎌倉と各地を結ぶために整備された道で、鎌倉幕府が置かれていた鎌倉を中心に、関東一円に広がっていた。

特に京の都に近い側から「上道」「中道」「下道」と呼ばれる3本の幹線道路があり、そこから多くの支道が枝分かれしていた。これらの道は鎌倉幕府の御家人たちが鎌倉に向かうための戦略的な道として、また、物流の幹線道路としても利用されていた。

これらの古道は山稜・社寺、山稜部同士を結び、これら街道沿いには、建長寺、円覚寺をはじめとする社寺や庚申塔、石仏などが点在している。その一部は尾根沿いのハイキングコースや人々の生活を支える道として今も使われており、これらを巡ることで鎌倉の歴史や中世の生活や文化を垣間見ることができる。

